川柳塔

昭和四十二年一月九日　第三種郵便物認可
平成二十二年六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻九九七号

日川協加盟

No. 997

六月号

川柳雑誌・川柳塔　通巻一〇〇〇号記念

「私の珠玉の一句」大募集

六月十五日が締切日です。お急ぎ下さい。
巻末の専用柳箋を使用し、本社事務所に郵送して下さい。
（葉書・ＦＡＸはご遠慮下さい。）

残暑見舞広告

本誌八月号に掲載する残暑見舞広告を募集いたします。広告のスペースと掲載料は左記の通りです。５月号巻末の綴じ込み**暑中見舞広告原稿台紙**に原稿を貼付（又は記入）してお申込下さい。よろしくお願い致します。

★個　人　一口　二、〇〇〇円

★団　体

①1/3頁　六〇〇〇円　③2/3頁　一二〇〇〇円
②1/2頁　九〇〇〇円　④一頁　一八〇〇〇円

▼原稿締切　七月二十日

川柳塔社

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー

コーキ封筒株式会社

本　　社　富田林市若松町東３丁目７番８号　〒584−0023
TEL 0721−25−7210　FAX 0721−25−9484
東京営業所　東京都中央区日本橋本石町４丁目５番８号　〒103−0021
（日本橋川村ビル４F）
TEL 03−5255−5158　FAX 03−5255−5159
http://www.koki-envelope.com

一、〇〇〇号への道　その六

「大萬川柳」から「夜市川柳」へ

河内天笑

昭和四十二年秋、堺市が「成人学校」を開設。その中の川柳教室へサクラとして狩り出され、当時副理事長の川村好郎先生（松江梅里さんの実兄）の講座へ通い、流暢なお話ぶりに感心させられたものです。第一日目は自己紹介も兼ねて、

春雨に女房と濡れるあほらしさ

思い出の道はさけたし通りたし

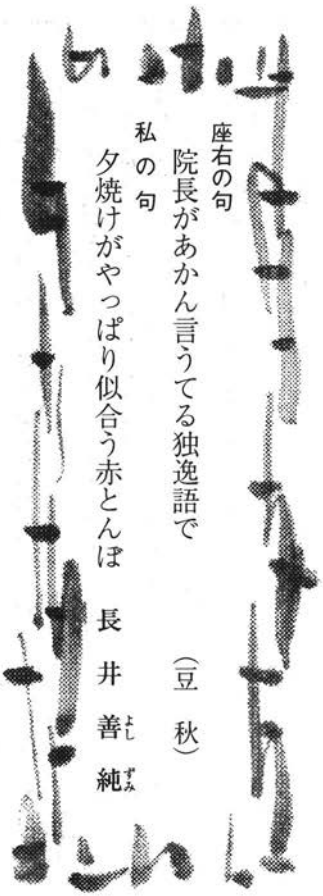
の二句を出され、二句とも大受けでみなさんが拍手を惜しみませんでした。また、路郎作品の「いつまでも肉と葱との仲であれ」も引き合いに出され結婚式の披露宴の祝辞でよく引用させていただいているとのお話で、どの例句も平易で味わい深く川柳がはじめてという生徒さん達にも容易に理解していただける作品でありました。

その年の秋にもみじの名所である箕面の滝へ是非一緒に行こうと好郎先生に誘われて同行。先生が講師をされていた丸紅飯田㈱の川柳部からの二十数名と、川柳塔同人の山本素郎氏ほか数人のお弟子さんが参加されていました。三題の兼題の選はお弟子さん達がそして当日雑感の選を好郎先生がされました。私は当日雑感を一句だけ出句して、皆さんの入選作品を聞かせていただきながら昼食のお膳を前にちびりちびりやっていたところ、先生が本日の天の句と前置きされて「せんど見たあと天ぷらになるもみじ」と私の句が発表されました。天笑と名のりましたが、この呼名が生れて初めて〝天〟を頂いた呼名でもありました。

現在川柳塔さかい誌上で続いている「夜市川柳」の産みの親は、「大萬川柳」と言って川村好郎先生の実弟松江梅里さんの創められた川柳雑誌当時のもので、十二ヶ月のすべてを麻生路郎師が選句。得点の計算法も全投句を梅里さんが一人で清記されていた事も現在の夜市川柳と変りません。

周知の通り路郎師没後は個人経営の川柳雑誌が同人組織の「川柳塔」に変り、伝統ある大萬川柳は一年余りで復活。清水白柳氏が選句に当られたが僅か二年足らずで（昭和四十四年十一月）急逝され、翌年からは川村好郎先生が選句に当たられ、川村先生の没後は川柳塔から大萬川柳が消えるという、川雑から川柳塔にかけての歴史の一ページでありました。

その後二年ほどのブランクがあった昭和五十七年三月の常任理事会で西尾栞主幹が大萬川柳の再復活を提案されたが、清記する人もない状態であり、それではという事で名称を「夜市川柳」と改め堺川柳会の誌面でお引受けする旨伝えたところ心良くご承諾頂きました。その後中尾漾介先生にご相談した末、選者を川柳塔より六名、他柳社より六名とし、ここでも一つの交流の輪を広めて昭和五十七年六月よりスタート。これまで二十八年間皆様方に支えられながら継続中というところです。



座右の句

院長があかん言うてる独逸語で　（豆　秋）

私の句

夕焼けがやっぱり似合う赤とんぼ　長井善純（よしずみ）

川柳塔　六月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「水道橋の雨」

■巻頭言　一、〇〇〇号への道「大萬川柳」から「夜市川柳」へ…河内天笑…（1）
川柳と私……福本英子…（2）
川柳塔（同人吟）……河内天笑選…（4）
川柳塔の川柳讃歌(66)……木津川　計…（47）
自選集……（48）
温故知新……（51）
水煙抄……川上大輪選…（52）
檸檬抄「巻　く」……三宅保州・高田美代子共選…（72）
麻生路郎句抄……（75）
愛染帖……新家完司選…（76）

川柳と私

福本英子

今年も全日本川柳二〇一〇年鳥取大会の案内が届きました。私が川柳に関りを持つようになったのは、今はむかし、昭和四十九年です。その頃ジョギングで毎朝和歌山城へ登っていました。仲間の方に誘っていただき、その中の野村太茂津先生の会へ伺ったのが最初でした。十名足らずの小さい会で、皆さんがせっかく来たのだからと句箋を配られ、作句をするようにと言われたのでした。

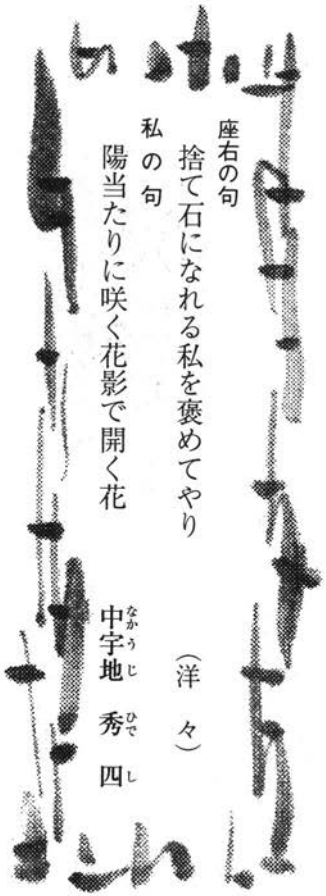
川柳と俳句の区別の知らぬ私が、左右の方に教えていただきながら、指折って五七五になるように書いたのが川柳の始まりです。

三句ほど抜けて呼名するよう勧められたのが恥しかったこと、そして最後に天の句に書き出されたのに戸惑ったこと、私以上に川村好郎、太茂津両先生が喜んで下さいました。

それがご縁で四十年近くも川柳のお世話になるとは、夢にも思っていませんでした。

川柳熱心な太茂津先生の引率で、十名近くの人数で「わかやま歌劇団」といって、北海道から九州まで全国の川柳大会へ参加させて

誹風柳多留一一篇研究 58 ……（80）
一路集
「借りる」……米田恭昌選 …（82）
「社　会」……山中康子選 …（82）
「しずく」……金子美千代選 …（83）
初歩教室「飛　ぶ」……鈴木公弘 …（84）
秀句鑑賞
同人吟……太田扶美代 …（86）
水煙抄……小島笑司 …（88）
主幹・理事長の選任について ……（89）
五月本社句会 ……（90）
各地柳壇（佳句地十選／升成　好）……（94）
六月各地句会案内 ……（110）
柳界展望 ……（112）
■編集後記（ひとこと／安藤寿美子）……尚士・光久・能子 …（114）



座右の句
捨て石になれる私を褒めてやり　（洋　々）
私の句
陽当たりに咲く花影で開く花
中宇地（なかうじ）秀（ひで）四（し）

いただくことになりました。

あちこちにたくさんの思い出や、友人がいっぱい出来て今でも心の支えになっています。中でも鳥取は、毎年続けてお世話になっている中、ある年の茗人忌句会の折に「砂丘」の題が出て、

この次は砂丘も見たい茗人忌

と出したところ選ばれて、「英子さん砂丘を知らんのか？　何年も来てるのに」と、早速翌年の大会には砂丘にお宿を取って下さいました。川柳人の優しさと温かさに触れた一番の思い出です。それから随分年も過ぎましたが、今でも飛んで行きたいところです。

川柳塔の本社では、中島生々庵、西尾琹、橘高薫風、河内天笑諸先生と四代の主幹にお仕え出来たこと。それぞれの先生方の色紙が手元にあるので、折には出して柳友への自慢にしています。

鳥取は遠いので参加は無理ですが、本社の千号記念大会にはぜひ皆さんのお供をして参加させて頂くつもりです。

今は亡きあの人この人、先生方を偲び、会場のみなさん方と感動をわかち合いたいと思います。現在私は八十六歳あと半年は元気でいられますよう祈るこの頃です。

河内天笑選

松山市　古手川　光

荒城の月が聞こえてくるさくら
うきうきわくわく　さくらに魔法かけられる
進化ない脱皮しても脱皮しても
欲望は無限地球は有限
ふる里は嗚呼なつかしい煩わし
平均寿命延びて人生薄くなる

神戸市　山　田　婦美子

現世の衣服を脱いで旅に出る
背景にあの世の気配する花野
亡き人の涙と紛う花吹雪
西行の如く逝きたい花の下
患えばベッド一つが住家なる
健康な体が欲を出してくる

藤井寺市　太　田　扶美代

こんなに嬉しいのにかかってこぬ電話
拝観料要らないお隣のサクラ
区別なく育てた苗の出来不出来
笑ってあげよ　だあれも笑わないジョーク
義理チョコもホワイトデーもいい加減
嬉し涙手に取ってみた嘗めてみた

尼崎市　山　田　耕　治

頬っぺたの肉と骨とがずれてくる
クラクション鳴らして晴れ着待っている
一日のアホをお酒で流してる
降りしなに幼児バイバイしてくれる
孫と出てハンバーガーにお相伴
雪解けを桜前線追いあげる

八王子市　播　本　充　子

居眠りをするには持って来いの椅子
フリーダイヤルに根気を試される
詩人にはなれぬ癇癪持ちだから
ガラガラと年金族の旅行好き
招待の椅子でキョロキョロしてしまう
手の届くところにお饅頭がある

大阪市　谷口　義

少々難ありのおばあさんになった
度忘れは度忘れのまま五月晴
深みどり鞍馬天狗の消えた森
賞罰はなし平熱は五度六分
七十代はミステリーゾーンに入る
葬儀屋のからくり二段構えなり

愛知県　早川遡行

片付けたコタツへ寒さぶり返す
おお寒と灯油買い足す戻り寒
君の言う名古屋美人ってこれかいな
夢はまだ捨ててはいない七十二
することがいっぱいあって何もせず
親切を笑顔で返す交差点

西宮市　西口いわゑ

虎の威を借るもまたよし生きる術
ひっそりと夕日の中に隠れたい
ままごとも財布ちゃっかり妻が持つ
過去は過去それなりにまた今もよし
母のように雨は花芽をめざめさす
花はいいまた来年も咲けるから

西宮市　秋元てる

しあわせは日がな一日花の中
空っぽの郵便受よ日の永さ
おままごとの頃から男役立たず
まいいか自己判断で九十まで
空いた椅子へ素早く老いを呼ぶ小二
耳も目も疎いが味覚確かなり

鳥取市　岸本孝子

造花かと聞かれてバラが首をたれ
目的があって節約苦にならず
同い年の姿を見ては背を伸ばす
名案がないまま基地が宙に浮く
議員秘書あぶない橋も渡らされ
雑炊でときどきお腹掃除する

鳥取市　岸本宏章

忘れたらいけないことはよく忘れ
免許証のコピーで僕と認められ
牛丼を食べるとアメリカが匂う
ＤＮＡ欠点ばかり僕に似る
都会へとなびく若者止められず
手術台に寝ているような歯科の椅子

羽曳野市　三好専平

十五歳自殺遺児とは悲し過ぎ
ハスキーと言われカラオケ狂になり
忘れるというより消えてゆく記憶
浦島太郎のようにわたしは生きてます
アカ狩りに似た言葉狩り気に食わず
下手な字を個性的だとほめられる

羽曳野市　吉村久仁雄

阿と叫ぶ夫へ吽と妻応え
常識を欠くと未来が見えてくる
それだけでまだ尽きないが母百句
飛び降りた電車に恩を置き忘れ
時々は雲に隠れて昼寝する
多数派を勝ち取り急に気付く老い

大洲市　中居善信

反核反戦口癖にして無視されて
農業で飯が食えない干からびる
世の不況これは自民の置き土産
役付きの器が少し小さいね
尻尾掴んで象を語って評論家
メタボリック症候群が浮くプール

和歌山市　木本朱夏

飛びつくのも早いが飽きるのも早い
肝腎のニュースは流さないテレビ
思いきり筆がすべった春の悔い
お福分けという美しい日本語
筍を茹でて一本持て余す
夕陽見て桜並木を引き返す

吹田市　穴吹尚士

勢いが盛んな方へにじり寄る
辣腕で鳴らした頃の酒の量
良心の錆を時々こそげ取る
ライバルに作り笑顔のおめでとう
猫はもう拾わないでと叱られる
地球儀を回してテロのニュース聞く

羽曳野市　吉川寿美

真うしろの油断うっかり見られてた
原石のままで馬齢を重ねたり
老いて尚気丈なだけが取柄です
見知らぬが御近所らしいから会釈
傍線へわたしが行方不明なり
雅号三つ持って門前の小僧

橿原市　安土理恵

糸口を見つけ拘り解いていく
三月のやわらかいとこ白和えに
辿り着く岸辺たそがれどきがいい
真ん中にキリトリセンのある夫婦
幾重にも欲巻きつけた太い首
試されるように差し出される林檎

茨木市　藤井正雄

転勤が里の近くではしゃぐ妻
ふらふらと今日もパチンコ台の前
まだ父母に言えない人と誕生日
開封の前から躍っている心
言うてみるものだ冗談からの駒
四国路のバス初夏の山初夏の海

唐津市　市丸晴翠

おずおずと若葉マークで往く八十路
釘一つ打つにも助手が要る夫
賞味期限越えて夫の胃で試す
排気ガス出ぬ自転車に汗を出す
生老病死やがて独りで往く黄泉路
イチローが打って守ってチーム敗け

尼崎市　長浜美籠

喉元をすぎると溶ける嘘まこと
相いれぬ鏡にあかんべーをする
春の陽がさんさん鳩の水のみ場
売却と知らず木蓮咲いている
特別な手紙へ選び出す切手
笑ったね泣いたね帰らない日々よ

和歌山市　古久保和子

野遊びの誘い上手なへび苺
花散らしの雨が心の中に降る
フットワークも軽くそれぞれの春へ
遠足の味がしているゆで玉子
足へきた酒を笑ってなどおれぬ
時間差で笑うおとこの孤独感

川西市　西内朋月

禁煙をすぐしろと言う黒い肺
水槽の魚は覚悟して泳ぐ
大阪のおばちゃん詐欺にかからない
向こうから苦手きたから回れ右
さくら散る下で逝く春しみじみと
人影が見えない葉桜のベンチ

神戸市　山口光久

子沢山ママのパートで食いつなぐ
つながれていると安心犬と僕
握手した手の温もりがつなぐ縁
関心をつなぎとめたく手をつくす
ぐうたらな子へも望みはつないでる
ママだけに吠えております甘えっ子

藤井寺市　鴨谷瑠美子

吊り革を握る姿が窓にいる
単純に日記書くのは難しい
さくらさくら都の風も気短かで
筍も蕗もやさしくしてくれる
もも色が好きでおんなの柵にいる
案外にしたたか紙のコップたち

西宮市　牧渕富喜子

何故だろう予報通りに咲くさくら
九日も早いさくらの日の黄砂
擦れもせず上手に角を曲るバス
天窓へ一しゅん機影これも春
半額のいちごは底で涙ぐむ
冗談に聞こえなかった四月馬鹿

母の手鏡ふるさとの風を待つ
石けんの香るタオルをそっと頬
はったい粉祖母の匂いを懐かしむ
良いことがありそう卵美味しく焼けました
卵かけごはんで育ち卵好き
草木萌えるすべて許してしまおうか

枚方市　小林わこ

冬登山飛んで火に入るように見え
揚げ足を取るしか能がない自民
女子フィギュアちょっと見せ過ぎ開き過ぎ
信用という財産をくれた亡父
内孫へやはり傾くヤジロベー
体調が良いから進む腹時計

宇部市　平田実男

暇つぶしの本ご持参で里帰り
世話好きですが下心など滅相な
辿って来た平凡な道こそ宝
メーキャップうっとり見てて乗り過ごす
他人なら笑って許すのになんで
被害者は済んだことでは済まされぬ

藤井寺市　俣野登志子

図書館も覗いてみよう春うらら
ていねいにリボンをほどく丸い膝
来世を契った君といつ逢える

尼崎市　春城年代

わたしよりだんだん若くなる遺影
熱も脈も計らぬままに老いている
献立がころころ変るおばあさん

大阪市　井丸昌紀

ナビ通り走り遠のく目的地
満月を見ると彷徨う癖がある
からくりをまだ隠してる民主党
僕ひとり欠けても誰も困らない
裁判員候補のままで済んだ僕
水たまり私の空が映ってる

羽曳野市　酒井一壺

散り際の心の叫び聞き洩らす
いのちの限り本心だけは失わぬ
すんなりと出そうで出ないそれが知恵
苦労して身についてくる生きた知恵
クレジット自分の値打ち知らされる
途中まで送って行った訳があり

三田市　臼井二英

打算ではいずれ破局が訪れる
愛あれば損得勘定抜きでよい
聞かなんだことにしとくとソッポ向き
血の濃さでやはり身びいきしています
その気ならお参りなんかすぐ出来る
青春の真ん中だったコッペパン

明石市　糀谷和郎

粘るだけ粘ってあとは運まかせ
投げた石愛の数だけ水面跳ね
僕が僕選ぶとしたらちゅうちょする
影があるから光あるように見え
産まれたのは海か涙が塩辛い
貧乏神掃除が済んで舞い戻る

弘前市　福士慕情

大臣も呼び捨てにする縄のれん
ニンニクの臭い気になる待ち合わせ
カメ虫の姿見えぬが確かいる
手付かずのマスク残して春がくる
深夜勤務真面目にこなす冷蔵庫
ゼイゼイとまだまだ動く古時計

鳥取市　有沢せつ子

パラリンピックメダルの割に小さい記事
こだわった店だがセンス合いかねる
スーパーのサービス戦を見るチラシ
姿見と一緒に歳を取ってきた
古い物捨てねば次が買えません
百均に行くと満腹感になる

鳥取市　近藤佳子

新妻は初初しさで受け答え
表情に暮らしのいろが出てしまう
子育てのころ蘇る買物ブギ
今年また朋友と浴びたい花吹雪
籤運も美人に味方するらしい
亡夫から電話がかかる白昼夢

池田市　栗田久子

まず一つ片付けてから次のこと
人さまに弱い部分も見せておく
思うほどがんばれないと気付かねば
何もせぬことも相手のためである
惜しむとも大英断でさあ仕分け
咲く花の名は知らずとも散歩道

鳥取市　福西茶子

雪ダルマ目も口もある春はまだ
年ですね一寒四温なぞ望む
ウエストの括れほしくてストレッチ
逝く日まで歩きたいからスクワット
ふれあっただけだったのにダイヤ婚
説法をした坊さんが逮捕され

富田林市　片岡智恵子

響きあう心の鈴は距離問わず
気弱になれば小さな山もでかく見え
遊びごころ学ぶ心のなかにある
魁皇関チャンコの味がしみている
一年中食べて苺の旬知らず
ポシェットも持たず白鳥海渡る

竹原市　岩本笑子

ツクシ達春の温さの中にあり
ハンディを持つ子とツルを一ワ折る
時々は休めと雨は降ってくれ
ぜひを問う砂丘に一人立っている
手をつなぐハンディなんか気にしない
夫唱婦随時々演技しています

熊本県　髙野宵草

神棚に背伸びお早ようございます
生きている証しとばかり吠え立てる
老化かな午後の新聞眠くなる
一ト月も忘れられてたカレンダー
世の異変花見の席で西瓜食べ
四次元の音に癒されたハーモニカ

鳥取市　吉田弘子

百貨店薄利多売に負けました
千両万両サクラと春を競ってる
この不満言えば壊れる夫婦愛
やがて介護される身痩せておくも良い
幸せに慣れて不満が甘え出す
百分の三秒金と銀の差よ

西宮市　片山忠

いい人と錯覚させる飴ひとつ
菜食主義で女ぎらいと言われてる
私を困惑させる投げキッス
怖そうな名前が付いた鹿威し
懲らしめる立場の人のルール無視
好敵手だから尊敬しています

四條畷市　吉岡修

手のひらにあるあやふやな運命線
脳味噌は覗かんでくれみなピンク
ゆさゆさと天狗の鼻が自慢ぽい
こそいでも拭いても消えぬ君の跡
ゆっくりとリラックスして陽が沈む
ためらいもせず嫌いやと言う返辞

堺市　大久保のん子

筋書きのない人生を泳いでる
どん底を這ったまあるい人間味
猛犬に注意と太く書きチワワ
やせるのに一日三度苦労する
逢わないと決めて心で泣いている
忘却という宝物神がくれ

橿原市　居谷真理子

溜息の漂う部屋を開け放つ
私を支えてくれる生者死者
大志あり天から吸うて天に吐く
コマーシャルさあ幻を買いなさい
玄関を出ると絡んでくる風よ
たくさんと語る独りで死ねるよう

春風へ日記も天気とり戻す
肩書を外し春から自由席
五粒でも同じサイズの種袋
欠席をすると惚けたか疑われ
ネットから仕入れたらしい喋りよう
ストレスの波が渦巻く心電図

三田市　堀　正和

春彼岸こころのコートまだ脱げぬ
曲がり角のお肌に辛い紫外線
スリッパも重く感じる再検査
心打つニュースを耳は待っている
心打ちニュースを耳は待っている
賑やかで芯は淋しいひとでした

鳥取県　石谷美恵子

ユーモアで解凍をした睨み合い
沈んでる胸にジョークがあたたかい
皿洗う無心がシェフを目指してる
世渡りの道の棘にも慣れて喜寿
テキ旨し和食の良さはないけれど
花見酒溜まった悔いがぱっと散り

枚方市　安達忠央

昨夜何食べたか直ぐに出てこない
昔のことだけはやたらと覚えてる
物忘れ気掛りなのは認知症
認知症とボケの違いを考える
認知症テスト何度も受けてみる
癌恐いけど認知症なお恐い

堺市　村上玄也

花いかだどこまで続く川くだり
老人は氏神様でする花見
寿命にも笑い袋は離せない
なる様になるさ急いては為損じる
時として言葉が足りぬなと思う
毎日を満開にしてみたいもの

府中市　藤岡ヒデコ

病人の困惑見えぬ見舞い客
友と語らうように開く愛読書
仲直り桜月夜に促され
はらはらと落花家事の手止めさせる
私を置き去りにして砂時計
目覚めればパステル調の山のいろ

富田林市　中崎深雪

本家にもやっと上がった鯉のぼり
春の庭くすくす笑い声がする
針山の針が錆びてたボタン付け
もったいないを口に運んだ付けが来る
潔く散るに散れない戻り寒
元気でさえ居れば何とか生きられる

高知市　小川てるみ

すみれの黄あかるい雨にしてくれる
弾む日の雨はポルカで降ってくる
雨の日は熱い番茶が嬉しくて
わたくしを正気に戻す通り雨
見送ってから桟橋は雨になる

京都市　高島啓子

折角の命欲張ることにする
さりげない恩師の諭し今も効く
根っからの優しい友が一人居る
素晴らしい朝と書き出す一行目
見渡せばライバルだらけ強い風

京都市　坪井孝一

我こそが春の主役と桜咲く
秘めていた思い爆発させる春
ヒロインの顔して桜咲き誇る
寒風も春の息吹に兜ぬぐ
春を待つカサブランカにある息吹

京都市　桝本宏子

柿の木の芽吹く若葉に気をもらう
お土産にいちゃもんつけて嫌われる
芽吹く花楽しみ増えた散歩道
息子の桜大きくなってもてあまし
眠たげに水面に浮かぶ花いかだ

京都市　西村益子

精一杯咲こう桜をお手本に
いさぎよく散ろう桜を見習って
紫外線避けて変身黒ずくめ
ありがとう聞けばパワーが出る介護
注文して期待はずれのエビフライ

京都市　三宅満子

七十路で掴んだヘルスケア資格（健康管理士合格）
健康に賞味期限という自覚
健康の原理はサルに辿り着く（自然に帰る）
脳味噌に若さ吹き込む鼻呼吸（新説なるか）
愛宕さん千日詣り夢無限（毎年千回記録増）

亀岡市　井上森生

寝返りを打って昨日を追い払う
忘れたい忘れられない苦い汁
捨てる覚悟固めようやく殻破る
ペットロスの痛みずうっと抱いたまま
コップの中で争っている暇はない

長岡京市　山田葉子

満月に掴んだ恋をちょっと告げ
家計簿が二冊出てきた妻の部屋
温度差はあるが懐メロ妻と聴く
やすらぎを貰いに老母の月参り
噛み合わぬ話は妻に折れておく

大阪市　鶴田遠野

青葉生き生き私押してくれ
ブルドッグ連れてまだまだ元気です
沈んでる空気とんちんかんの返事
子育てのノウハウ姑の一家言
次々と新党自信ありそうだ

大阪市　神夏磯　典子

子離れが先か親離れが先か
来客に挨拶いらぬまずビール
わが家では六月一日戦災忌
文豪が均一本で屯する
一人旅地酒の店に足が向く

大阪市　川端　一歩

コンビニで弁当を買う妻の留守
ワンコインつい気軽さに騙される
へそくりを闇から闇に使い切る
くたびれた靴を磨けば歩が進む
トンツーで隣と話す腹へった

大阪市　川原　章久

わたしだけ集中豪雨絶不調
雨降れば外出止めるそんな日々
祖父母が四人ひとりの孫に愛の雨
雨の中行って帰れば傘は無事
花束に言葉足らずを語らせる

大阪市　原田　すみ子

女房の尻に敷かれてから気楽
ハードルを下げると笑い多く逢え
生き恥をいっぱい食べてバネにする
新聞のコラムうれしいことを言う
席譲られやっぱり歳かなと思い

大阪市　吉村　一風

そこそこは生きたがやはりもう少し
三島屋の前を通ると芋を買う
なんとなく大学芋と仲が良い
別れたい女に男まあだだよ
ペット好き驚愕させた投げ捨て葬

大阪市　古今堂　蕉子

懸命に咲いた桜を愛でる風
枯渇した右脳に一冊のエキス
生かされて明日へ残していく活気
無念さの吐息後から追って来る
何もかも忘れて思い切りジャンプ

大阪市　小泉　ひさ乃

聞こえぬ振りできる白髪がありがたい
利き腕で締めぬとベルト締まらない
腹いせに音消してみる負け試合
結論へまっすぐに打つ太い杭
いつからか朝寝の出来ぬ歳となり

大阪市　升成　好

大阪市　榎本日の出

正直に弱味を見せて楽になり
人間も枯れるだろうね今元気
旅をしてみやげ話を配るだけ
副作用ないか聞いてる薬漬け
長生きの話が好きなお婆ちゃん

大阪市　小谷集一

プライドと負けん気だけで跳ね返す
あきらめることも立派な生きる知恵
日本語が下手な夫婦でよく揉める
幸せに生きる心を丸く研ぐ
言い訳をするから嘘とすぐわかる

大阪市　奥村五月

同じ愚痴今日もまたかよおばあちゃん
不景気になんでこんなに粗大ゴミ
ラーメンをすすり夢みるワンルーム
五割引き考えもせず手が伸びる
福耳と良いとこ探しほめる顔

大阪市　森田明子

幻と話しています花の下
安全な道をついつい子に願い
太めでもミニが似合っている若さ
太陽もゆっくり動く春の暮れ
真っ白な心にはもう戻れない

大阪市　寺井弘子

衣食足り礼節知らぬ人が増え
徒競争トップもビリも大声援
春うらら城と桜と人に酔い
日本の美さくらさくらの通り抜け
生かされて生きてうたかたの虹を追い

大阪市　大川桃花

ボーナスは幻ローンは現実
みたらしへ顔突き出している晴れ着
回り鮨初月給で子の奢り
花の下毛布抱いてる初仕事
鹿せんべい名刺みたいに配ってる

大阪市　近藤正

核なくせ世論沸き立つニューヨーク
ちぐはぐな夫婦も息が合ってくる
月面に顔のぞかせる青い星
密約で破れかぶれの核の傘
若者はいま氷河期に住んでいる

大阪市　福岡末吉

火付け役なだめる役もみんな友
張り裂ける思い抑える義理の仲
刻み葱芸術品とそやす妻
しがらみが解けておもむろ茶を点てる
意地を張りここ一番に踏み込めず

大阪市　岩崎公誠

着地点わからぬままで男翔ぶ
雑学が思わぬとこで役に立ち
極楽のドアをたたいて舞い戻る
コンビニのサンドイッチの薄いハム
知恵しぼり妻と互角で競い生き

大阪市　伊藤博仁

天満宮そっぽ向く人拝む人
砂場ではケーキ屋になりいらっしゃい
朝刊で叩きこんでる日と曜日
朝一のお水にお茶は仏様
大安に出したはがきですかを食う

大阪市　江島谷勝弘

パソコンで頭上がらぬ子が師匠
天成か花ある人にあこがれる
あの娘なら花いちもんめしてみたい
清清しい青空をみる何べんも
マンションに三十匹の鯉游ぐ

大阪市　平嶋美智子

一番に自分大事な自分いる
飲みすぎた朝は鉛がまとい付く
ビールちょうだい孫が二十歳に成りました
似なくてもいいのに孫もいける口
出来ぬので明日に回すもう一句

大阪市　中村れんげ

信頼を築く年月長い道
路地裏を行けば昭和に逢えそうな
極楽をたのみ閻魔につけとどけ
夕日あび水面のお堂ゆれ動く
ストレスを優しく癒すクラシック

大阪市　田浦實

河内湖がなにわを地下で支えてる
老い映す鏡は愚痴も聞いてくれ
家計仕分け貴方やってと脅かされ
寅さん観て情に充電しています
お裾分け鳶に残す漁師さん

大阪市　吉内タカ子

木の芽立つほんのりピンク色気づく
わくわくとシャッター騒ぐ春うらら
春嵐たんぽぽ笑う内の庭
趣味のおかげ介護のつかれ忘れてる
伯母法事ほんのり会話懐かしい

大阪市　岩崎玲子

童謡が私をいつも目覚めさせ
口ずさむ十八番はいつも好きな花
母いつも里からこっち向いている
人生の教科書里の山や川
今も尚こころに実家残ってる

大阪市　板東倫子

春告げる老いたオオワシ露国から
若者が価値観変えたステータス
茫洋と黄砂に沈み行く夕陽
ツイッターとはやる気の失せた反骨者
卒業式白けたままで無事終り

大阪市　萩原大朔

ボスの留守皆んなの羽根が伸びている
取り巻きがひどいと古い友が去る
記念には大きい物より軽いあれ
好きだから辛抱ができ花が咲く
賢すぎ言い訳並べ動かない

大阪市　津守なぎさ

クレーンの動きもせわしない四月
やんちゃして育つ子供は逞しい
おばちゃんに半額時間教えられ
美術館花見めぐりもした陽気
しかたなくテレビ観ている雨の午後

大阪市　坂裕之

ありがとう　すっとでる日は楽しい日
自分をも信じられない時がある
忘れ去ることが出来ずに眠い朝
老人のつもりはないがおじいちゃん
欲深く僅かな不幸悔む日々

大阪市　小糸昭子

打算から生れた愛は続かない
裏街に優れた匠隠れてる
小沢さん鶴の一声悪代官
引っ張って突き放すのは女です
動物園で飼われて野性失った

大阪市　伏見雅明

雨天なら順延とするダイエット
ノックする音聞き分ける引きこもり
脇役に徹して生きるパンの耳
レモン汁想っただけで溜まる唾
まごころに頑固な父も融けはじめ

大阪市　松尾柳右子

良いニュース聞けば鼻唄飛んで出る
春来たが底冷えのする昨日今日
耳遠くボリューム上げて聞くラジオ
友訪うて互いの元気確かめる
コーヒーの三時おやつは控えてる

大阪市　榎本舞夢

死亡欄つい年齢を見てしまい
すばらしい感動急にお腹減る
ベッドからふらふら降りる年になり
大空から春が来たよと揚げ雲雀
大いちょう倒れひこばえ逞ましい

大阪市　中村叡子

蒐集癖の男は夢を抱き続け
お父さん未だ慣れませぬ三回忌
回想の度に淋しい涙わく
朝陽に活を夕陽に祈り手を合わす
丸坊主枝伐った木に新芽萌え

大阪市　津村志華子

花の風やさしい心とり戻す
ふらふらと凧もわたしも調子者
あの事もこんな大事もふと忘れ
花の彩褪せて誰ぁれも振り向かぬ
加齢です烙印ついた脳検査

和泉市　西岡洛酔

亡母の歳越えた妹良い便り
異状無し医者の笑顔の声を聞く
預金無し然し元気が一番さ
花便り孫からの文三度読み
医に頼り神を信じて八十路坂

和泉市　横山捷也

大の字に酔って下から見る桜
衣食住足りてふるさとまだ想う
味方にも敵にもなって義理を欠く
一病を慰めあって長電話
呑み代をあてにされてる誘い水

泉佐野市　山本蛙城

二泊三日と検査入院粋に言う
ペースメーカー入れよか医者の軽い舌
ああまたもチョイミスという事故ニュース
ああ昭和助けられたり助けたり
電話番号あれこれ読ます知恵くらべ

交野市　森本弘風

ウソなんて浮かばぬままに四月馬鹿
十日ほど来ぬ間に上手ホーホケキョ
天神の嘆き聞こえる絵馬の数
歩数計歩幅が狭くなったよう
山道を車のためにする舗装

河内長野市　山岡冨美子

再生医療の明日がつくるサイボーグ
デジタル化四角四面になってゆく
いまどきの喋る家電のお節介
主義主張よりも大事なパスワード
要らぬもの欲がいっぱい抱えこむ

河内長野市　村上直樹

脳すこし欠けて人間丸くなり
気合負け週二にされた休肝日
まだ若い負けてなるかと自己暗示
百薬の長で百まで生き延びる
人のエゴ明日の地球が行き詰まる

河内長野市　黒岩靖博

ラッシュアワー咳込む人が前に立ち
たっぷりと税金呑んだＪＡＬ破綻
イケメンに惚れた弱みで騙される
お節介したばっかりに泥被り
寅さんは自由気ままに無位無冠

河内長野市　坂上淳司

えらいこと書いてしまったマニフェスト
仕分けした人らも夏に仕分けられ
噴火予知女房が爪を研いでいる
護身用に毎日爪を研いでます
蚊が食ったところを爪でバツ印

河内長野市　水谷正子

桜並木ケアの車に乗った儘
お見送りおそくなりますさくら道
弁当に散る花びらを競い合う
来年もこのメンバーで花の下
百句入り言祝ぎメール多多嬉し（なにわ柳壇）

河内長野市　植村喜代

医療では治せぬストレスだと言われ
静かです音もなく桜満開に
とし取ってお互い淋しい友が増え
同い年何んでも言えて聞いて上げ
よく降って待っている間の桜かな

河内長野市　井上喜酔

床の間は今や物置き父の城
お世辞でも若く見られて躍る胸
列島へオセロのように並ぶ基地
えび煎へカモメ見事な宙返り
真夜中の月下美人は人目避け

岸和田市　岩佐ダン吉

やがて芽を吹こうただ今汗まみれ
ふたこと目君はラッキーなどと言う
ここ一番気弱な僕が顔を出す
近道はなしマラソンは汗びっしょ
未来図の地球に緑消えている

岸和田市　原さよ子

麻酔きくまでは御守り握りしめ
病んで知る自慢するもの何もない
だまされてあげようたわいない嘘に
お茶あげて夫の位牌に話しかけ
み仏の指に惹かれた奈良の旅

岸和田市　井伊東吉

筍のように新党顔を出す
ガン予防気にすりゃ食べる物がない
回り寿司皿数競う食べ盛り
馬券買う友の土日は不在なり
スーパーで半日過ごすお年寄り

スカタンな返事を返す遠い耳
自爆テロ死んで花実が咲くじゃなし
花曇り紅は濃い目にひいて出る
カラオケでストレス飛ばしよく眠る
ふさふさの髪にもどれずヘヤピース

岸和田市　堤　楢代

八十路来て偉かったねと自分ほめ
さんざんに国に捧げた青春期
一年生道草出来ぬ塾が待つ
カード持ち使用方法など知らぬ
暗証番号を忘れて二十年

岸和田市　森　元　ふみよ

人生に迷い続けて黄昏れる
雑念が消えて静かな時流れ
口ほどに物言うそんな目がほしい
現実に押しやられてる僕の夢
嘘と言うスパイスうまく使い分け

岸和田市　雪　本　珠　子

最近は膝うつことのない政治
合格が叶って諭吉とんで行く
着飾って先生も母も参観日
人生の出発祝う桜咲く
向かい風吹けば吹くほどかたくなに

岸和田市　土　橋　房　枝

恋ごころ幾つ見て来た花時計
極楽へ往く算段はつけてある
ご先祖は皆極楽に居るそうな
満足度百点晴着着こなして
マイカップゆっくりゆらし夜が更ける

堺市　山　本　半　銭

大阪に住み大阪の田舎者
お近くの孫はただ今反抗期
子育てにほんとに切れた事もある
時々は妻の天狗の鼻を折る
枕抱きノック無用でくるあんた

堺市　志　田　千　代

コンビニで全部揃えて花の下
日曜の疲れ無言の通勤車
塾へ行く子は花も見ず走り抜け
元女優さすが議会の演技力
お花見の場所取りむきの体育系

堺市　加　島　由　一

留袖でお国訛りの輪に入る
二次会で新郎新婦けんかする
男とはそんなものだとはぐらかす
勝算があってゆったり席に着く
ゆっくりと出来ない綺麗好きな家

堺市　奥　時　雄

堺市　源田八千代

祝辞読む子より母さん落ち着かぬ
私より子育て上手い娘を褒める
仏壇に供えて上げる酒煙草
メンバーに退職の人誘い込む
親戚中いろんな職に仕分けされ

堺市　西村りつえ

宇宙飛行十年かけた夢みのり
ときめきもだんだん沈下早くなり
つるつるの肌にも染みが乱れ咲く
温暖化逃げて行けずに枯れる森
縮こまるさくらに長い春終り

堺市　柿花和夫

地下鉄で大阪弁が吠えている
自叙伝の落丁の訳言えません
歯が抜けて煩悩ひとつ減りました
人情の機微がわかってきた病後
婉然とトラブル招く紅一点

堺市　荻野像山

念入りに研いだナイフで指を切る
見てるより叩くが早いアブラムシ
不景気で朝から並ぶパチンコ屋
核兵器売って墓穴を掘っている
核の傘被って基地は嫌と言う

堺市　宮本かりん

おはようと今日もシナリオないドラマ
雑草が芽吹きを競う春の土手
微笑まれほほ笑み返す無言劇
下り坂青息吐息つきながら
コンビニへ今日は一人の足が向き

堺市　齋藤さくら

紅引いて若さ競ったクラス会
夜桜の場所の確保が初仕事
一年生背中いっぱいランドセル
心配も期待も生きるバネと知り
高速の無料どこかへマニフェスト

堺市　大隅克博

箸で食べ味がわかったスパゲティ
きっちりと締めると隙間あく障子
子供には僕の通知簿見せられぬ
新券は抜いて祝いにとっておく
窓あけて駅弁買える旅したい

吹田市　太田昭

ジンクスを破る呪文を飲み下す
戦場にしたくないから基地を置く
評論家すべて賢いとも言えず
ほどほどに生きてもやはり蹴躓く
雑草も愛されたくて背伸びする

吹田市　山本希久子

私を狙う個人情報洩れている
レトロな風ボストンの港町（アメリカの旅　3句）
サマータイムへボストンはまだ真冬
結局はアメリカへ来て中華食べ
生受けて七十五年またたく間

吹田市　野下之男

氷上に女の意地が花開く
負けた日はカラスの声も気に障る
出来合いの料理で妻の澄まし顔
何故だろう素直に伸びぬ鉢の花
オウムでもお喋りしたい良い日和

吹田市　瀬戸まさよ

許せないけれど笑顔で話します
供花新た母の命日十九日
閉店の安売り無駄も買わされる
酒飲めぬコンプレックスわかるかい
奈良まちの古典愛してふらふらと

吹田市　大谷篤子

わたしにはくれぬティッシュが気にかかる
膝かかえ笑って鬱も軽くなり
声変り低音の孫宇宙人
天国に近い景色の万華鏡
転ばぬよう近い公園ウォーキング

吹田市　須磨活恵

失敗を重ね人間燻し銀
わたくしのはらわた探る内視鏡
少しずつ自分に甘くなって老い
誰もいない処で唄うラブソング
たあいない夫婦の会話午後のお茶

吹田市　木下敏子

曲ること嫌な花ですチューリップ
ころころと寒暖の差に蹴躓き
予告通り老いが近づく膝の音
何もかも忘れて春の風に乗り
ユーモアが出まかせに飛ぶ花の下

高石市　浅野房子

あまりにも人の良いのもアホのうち
本を読む現実逃れたくてよむ
見納めになるかも知れぬ桜見る
挨拶の出来ぬ中年多すぎる
立ち話疲れましたよ足腰が

高槻市　生田義一

少数の連立与党に牛耳られ
財源も無しに飾ったマニフェスト
クラス会仇名飛び交う懐かしさ
花の下軍歌が響く老人会
四月馬鹿お庭はボケの花盛り

高槻市　左右田　泰　雄

大丈夫杖さえあればこんな坂
任せとき壺は押えているからな
響き合う形で肩を組む二人
ホイホイと気楽とんぼの生返事
襟足の白さが目立つ濃紫

高槻市　峯　村　勲　弘

母強し急流上る鮎に似て
お泊りは僅か天下の回りもの
遠回りして万歩計上機嫌
お回りもお手も上手で天下り
ヨーイヤサー都をどりが招く春

高槻市　井　上　照　子

痛い検査命惜しくて堪えている
空っぽの頭川柳良い薬
第二子を産む孫愛しよく動く
諄々と説けば理解の目に変わる
オール電化機械があちこちでしゃべる

高槻市　佐　甲　昭　二

亡母の気配まだ残ってる台所
株安の記事が朝から首締める
自分史を辿れば汚点透けて見え
やわらかな目でリストラを切り出され
百円ショップ夢のかけらを買い漁る

高槻市　杉　本　義　昭

捨てられたガラスするどく牙を剥き
着メロがポロポロポロと嘘ばらす
絞っても三日もたてばまたメタボ
書斎からメシはまだかとベルが鳴る
悪知恵は次から次と冴えてくる

高槻市　富　田　美　義

たらい回し切り裂く救急車の叫び
禍は善人めがけ降り掛かる
修正の度にちびてる自尊心
棘の有るセリフ弱音の隠れ蓑
達者かと冷かし合って老いの坂

高槻市　安　田　忠　子

決勝戦終らず布団取り込めぬ
コップ酒さくら吹雪に酔いました
桜餅の絵手紙届き蝶になる
花粉症一錠飲んで効く恐さ
ぎっしりとスケジュール組みこなす幸

高槻市　執　行　稲　子

孫の頬プリンプリンと笑ってる
蕎麦の花と初めて出合う楚々として
開いたら悪口三昧罪な人
酢を少し足してコックの味になる
ぎりぎりと胸に応える悔い一つ

高槻市　乙倉武史

龍馬欲し憂国新党旗上げる
痛ましき幼児虐待聴くニュース
人間の顔して心鬼を飼う
わが青春(はる)は戦なしでは語れない
靖国の春大祭の案内来る

高槻市　指宿千枝子

エネルギーが勿体なくて怒らない
駅前の交番道を聞いただけ
ばあさんになって勇気が湧いてくる
思いつくと怖いもの無し旅に出る
淀川にたゆとう鳥も旅支度

豊中市　安藤寿美子

石踏んで渡るやさしい川がある
降り出して庭石までもよみがえる
ささやかに溝の流れに花筏
花吹雪浴びたく風を待っている
公園の桜見たくて遠回り

豊中市　江見見清

許したいでもタイミング測ってる
感謝するだけで生きれる歳となり
飲み遊ぶ友達の輪が見舞う輪に
ひもじいの言葉が子等に通じない
友人の病状を問う役がくる

豊中市　藤井則彦

役人の態度は椅子に比例する
リコールの車晴れ着に泥をはね
することがなくてストレス溜めている
妄想もアイディアも湧く独り酒
見舞客同士であとの飲む話

豊中市　水野黒兎

社長以下みな平等に花の下
さまざまな門出を祝いさくら咲く
花冷えのこころ暖めしじみ汁
チャレンジがあってチャンスが生きてくる
春雨にくもの巣の技浮き上がる

豊中市　松尾美智代

パソコンを教えてくれる十二歳
春休み孫にお守りをされてます
助けてるつもりで邪魔をしてるかも
散歩する昔住んでた家辺り
咲き初めて寒の戻りに震えてる

富田林市　大橋鐘造

果の無いゴールへ今日もつっ走る
千の思慕抱いて身を灼く恋蛍
雁首が揃い始まる猿芝居
火柱を立てた記憶のある背中
絆だと思えば楽し口喧嘩

曲線を描いた日々に味がある
行きつ戻りつ春の女神は気まぐれだ
いそいそとかかりつけ医へ行かはった
春雨に帰したくない蛇の目傘
目印がまたひとつ消え街冷える

寝屋川市　森　茜

恩師の忌筆まめだった青インク
真っ白は議員に向かぬものらしい
二センチの段差に足をすくわれる
じいちゃんの記憶を辿る生誕地
グルット関西幼なじみが出て電話

寝屋川市　平松かすみ

わたくしの尺度ますます大ざっぱ
動員をされてしまって聞く話
変な人になっているのは自分かも
わたし好みの花を夫が植えている
逃げ道をいっぱい持っているふわり

寝屋川市　籠島恵子

一年生の孫に携帯教えられ
空気読み蓄の目覚め春彼岸
背伸びして彩り競うチューリップ
草を引く骨折り損をくり返し
姿見に背筋も伸ばす主婦の朝

寝屋川市　森田麗

ついついと易きに流れすごす日日
他人事とさめた目で見る他人さま
眠れぬまま友への文を認める
両隣へわらび届いておすそわけ
もう八十まだ八十と揺れている

寝屋川市　冨山ルイ子

ノウハウを考えながら捨てるゴミ
お椀の菜やっぱり郷里の味噌がよい
ぞろぞろと殿が揃うと味気ない
見上げても見透しきかぬ澄んだ空
たんまりと戴く筍のお裾分け

寝屋川市　太田とし子

虫偏も人もぞろぞろ春ですね
パワフルなおばば五分も黙らない
よそ行きの言葉で無心吐く受話器
少子化の肩に食い込む負の遺産
汗かけば支持は後からついてくる

羽曳野市　徳山みつこ

本心をジョークに乗せて軽く言う
行届いた気遣い少し煩わし
主婦業を天職として鍋みがく
間引かれる定めも混じる種袋
庭の花咲いて墓参を思いつく

羽曳野市　安芸田泰子

羽曳野市　福田悦子

紫陽花は許してくれる浮気症
日焼け止め帽子の縁を広くする
夏バテの予防今年も梅を漬け
風吹かにゃ泳ぎが出来ぬ鯉幟り
食べに行く話に友の輪が出来る

羽曳野市　永田章司

今日の雨桜散らしとなる気配
老人と女性パワーが世を変える
宿の膳地酒が踊る舌の上
日日好日味わう人のクラス会
外来種強いはヒト科とて同じ

阪南市　山本柳昌

石舞台蘇我馬子の息を聴く
孫曾孫玄孫もおいで白寿の賀
桜吹雪風とおどける車椅子
春の雨たっぷり命いとおしむ
雨嬉し今日は心の拭き掃除

東大阪市　北村賢子

人間味深くてこころ揺れ動く
空を屋根気楽に生きる無位無冠
好きな男なぜか無視する癖がある
夢抱いて生きているから輝ける
冤罪晴れ大手が振れる空の下

東大阪市　佐々木満作

可愛い娘なんといじめを仕掛けてる
極楽という切札で惑わされ
リハビリの拳開けば湧く勇気
長時間正座利かなくなった膝
お日様は分け隔てなく降り注ぐ

東大阪市　米田水昇

花の下極楽浄土の夢結ぶ
畳む波宇宙見すえる竜馬像
出かけない時の素顔は安らかだ
ばあさんの団子田舎の匂いした
旅をしたロッキー山脈胸に生き

枚方市　寺川弘一

アルバムは輝いた時だけ貼り付ける
あなたとはほろ酔いほどの幸せよ
老人会の誘い蹴っても高齢者
することもないが百歳まで生きそう
人生の終着駅は無人駅

枚方市　海老池洋

天国はわが家と思う重い靴
植え替えた苗喜ばす春の雨
野仏に母の祈りの涎掛け
喜びの新芽へ温い春の雨
ふらっと旅風に案内してもらう

枚方市　伊達郁夫

折れそうな雑草だから群れて咲く
冗談の言える空気に帽子脱ぐ
四捨五入されて人生裏返る
無に帰る知恵を大海から貰う
麻酔醒め妻が包んだ手の温さ

枚方市　丹後屋肇

菜の花が瀬戸内海を染めている
孫の腕借りてお墓に辿り着く
墓を舞う紋白蝶に会釈する
吟詠を聞かせて仏壇を閉める
巻頭言響く川柳金字塔

枚方市　二宮山久

ライバルに先をこされた大舞台
九十八歳の母見舞う瀬戸の旅
六十路坂まだまだ元気習いごと
出会わねばよかった心をとられそう
ハイキング笑顔と汗とにぎりめし

枚方市　二宮紫鳳

新入生桜吹雪に夢おどる
つくしんぼかしまし足を止めて見る
母見舞う笑顔嬉しい桜舞う
瀬戸内の春に抱かれて癒し旅
若夫婦誘い花見の手弁当

藤井寺市　髙田美代子

平均台の上を走ったこともある
適温を保ってくれぬ莫迦陽気
レンタルの衣裳で済ますまつりごと
落ちこんだ人を誘ってバイキング
一本の筍メニューあれやこれ

藤井寺市　若松雅枝

良いことがあったかビール付けてある
道徳心しっかり今も身に纏い
お金は無いが人を愛する心なら
読めそうで読めぬ漢字に挑戦す
混浴の鄙びた湯から仰ぐ月

藤井寺市　鈴木いさお

自叙伝の中にもう一人の私
離婚してホッとする奴悔やむヤツ
また妻に愛想笑いをしてしまう
七人の敵退けて得た妻だ
いちばんの寝心地妻のひざ枕

藤井寺市　津田シルク

菜の花の海へスカーフ舞って消え
竹の子の伸びたかったと言う悲鳴
ほろ苦い旨みもあって春を食べ
ローテーション組んで会社へ週三日
見合相手の品定めする障子の目

藤井寺市　伊藤アヤ子

かぐや姫いるのか藪が騒がしい
あなたには知らせておこう保険金
病室の窓からふるさとが見える
しっかりと素手でつかめたあなたの手
満開の桜の空におぼろ月

藤井寺市　増井ヨシ枝

豪快に笑う方から気を貰う
デイサービス笑い袋も連れて行く
桜ひらひら犬もひとひら背にのせて
お隣の雨戸の音に安堵する
入学式少し大きい服を着て

箕面市　広島巴子

花びらを浮かべ日本の春を飲む
国により姿を変える神仏
築二十お色直しをする我家
住人も共に中古に甘んじる
木や花に異常気象を問うてみる

守口市　井上桂作

明治とは包んで古きよき時代
歴史上昭和の御代は面映ゆい
来し方もさながら夢と思ういま
適当に遊んで老いを弾ませる
思うだけ八十路の恋は清清し

八尾市　宮崎シマ子

ガラスの靴砕けて草鞋編んでいる
サプリメントが多くて話咬み合わぬ
愚直にも一本線しか知らぬ道
影もまたポーズとってるいい姿勢
立たぬ足ふんばれば涎こぼれおち

八尾市　内海幸生

栄忌や温顔に吹く風みどり
温顔に叱られそうなことばかり
倒木の千古の銀杏の根から芽が
風吹くな花がピンボケ嫌うから
鉢植えの山椒に筍買ってくる

八尾市　髙杉千歩

紀元節天長節と譲らない
竹の子も三日目ひとり春の膳
臑の出たジーンズ価値観違いすぎ
ハイヒールばあちゃんのよは信じない
殆どが寡婦で姦し老人会

八尾市　村上ミツ子

四月一日楽しい嘘で和ませる
近所から春連れて来た若竹煮
やっとこさ桜もコート脱ぎ捨てる
限度額増えても殖やす金はない
生きているだけで満点だと思う

好奇心抱いて余生を謳歌する
一本の傷で十指の重さ知る
定年と聞いてやはりと思う顔
継ぎ接ぎの噂がマジになる怖さ
単純だから壊れることがない機械

八尾市　寺川はじむ

遠い日の思い出残すコンサイス
主義主張しているうちは惚けてない
ああしようこうもしたいと今日も暮れ
役に立つうちは重宝がられてた
笑い合う相手まだ居るありがたさ

大阪府　米澤俶子

師の句集帙を繙く薫風忌
エープリルフールのジョーク大手振る
生きる糧車窓の花見して句会
花手桶提げて春には訪ねます
スポーツに炊事洗濯掃除する

大阪府　籾山隆盛

修正もできずにブレるマニフェスト
椅子席で生の力士を見る至福
長かった苦闘の過去は宝物
春の色鯖酢じめに桜添え
ひと言に癒され咲かす心花

大阪府　野田栄呼

野の花に紛れて蝶の楽園に
春愁が何故か涙腺弛ませる
一と節の童謡歌う花の下
げんげ田に笑い袋が弾けてる
花吹雪水子風車がよく回る

大阪府　桑田ゆきの

本人が忘れてました誕生日
感激を貰う一人の拍手から
持って来た回覧板がよう喋る
また逢えたサクラとデートして帰る
五十年いびきに耐えた妻といる

大阪府　澤田和重

犬だって聞こえなかったふりをする
夏野菜植えて収穫夢みてる
バーゲンをちょっとのぞくと言って出る
もうと思うまだとも思う七十五
言い負けてちょっと口惜しい大ジョッキ

神戸市　山口美穂

春うらら仁王がそっと欠伸する
石段を数えて登る遍路笠
天守閣見上げて食べる桜餅
善人の仮面を借りて遊んでる
オーバーに褒めて小さく叱る母

神戸市　伊勢田毅

神戸市　木村貴代子

姫ゆりの涙かわかず基地に揺れ
老いてまた一人ままごとしています
おてんばも寝ている時はお姫様
悪い事知って悪さの三歳児
娘と孫を思う心に生かされる

神戸市　田中章子

便利さに五感がにぶくなってくる
幸不幸オーバーラップするさくら
春の雪黄砂まじっているだろう
土佐分旦うそいつわりはなさそうだ
いつの日も君輝いていてほしい

神戸市　山崎武彦

聖書抱き片手に銃を持つ不思議
褒め合ってジャブを仕掛ける嫁姑
ちょっと褒め値引きをさせるとはさすが
さすがです忘れ上手に生きてはる
思い切り喋れば悩みスウーと消え

相生市　中塚礎石

つむじ風僕の台詞を消したがる
風車くるくる主張ない男
六法で割り切り夫婦他人めき
面識のない気楽さに吹いたほら
序章から海が荒れてる負け戦

芦屋市　黒田能子

足腰の達者なうちに遊んどく
切り株に座って拭う山の汗
ピンチには歌を唱って切り抜ける
一芸を極めた人のいい笑顔
悲しいことが続いています仏さま

尼崎市　加川靖鬼

山菜料理春のうまさをとじ込める
きっちりと仕込んだ妻にしごかれる
ネジ花の螺旋を昇りつめた蟻
カマキリは鎌の手入れに余念無し
奈良町の格子覗いて回る鹿

尼崎市　軸丸勝巳

また寒気戸惑う花も老人も
わがお城殿の気分で見る桜
花の下恋しバブルのバカ騒ぎ
実現にパワーが要ると知る政治
孤独感次つぎ若い友が逝き

尼崎市　林昭三

下枝のさくらに頭撫でられる
昨日まで雨今日は風さくら散る
買物もないデパートへ万歩計
春が来た下着のゴムが皆緩い
ファスナーが急に動かぬ慌てます

だんだんと飼い主の癖真似る犬
歩き疲れカフェでリセット万歩計
親孝行くどい話もじっと聞く
海賊の島も今では観光地
親心手玉に爪を研ぐ詐欺師

尼崎市　藤岡りこ

くぎ煮くる友それぞれの味のせて
仰げば尊し風にのります幼稚園
卒園式スーツ姿に手をひかれ
新幹線桜のトンネル里帰り
直子さん女性の誇り宇宙船

伊丹市　山崎君子

お節介時に助ける老いの知恵
ぼんやりと長生きしたら疎まれる
満開の桜口実大宴会
一生に何度やらかす再離婚
絵手紙に思わず顔がゆるんでる

加西市　金川宣子

任期終え解放感と虚脱感
溶けてゆく自分のためのチョコの味
慎ましく手の平に乗る広辞苑
スイッチの弛んだ体もてあます
友に会えバス待つ時間苦にならず

川西市　米原雪子

老いの旅土産でバスが狭くなる
出る予定あれば早起き出来る姑
痛いとこ出来て元気の意味を知る
行き届く嫁に手足をもぎ取られ
示されて解らないままカルテ見る

三田市　上垣キヨミ

どうしょうもなくなってから行く歯医者
暗い世にせめて喜劇の二つ三つ
意義のある少数意見無視される
パソコンが無機質な字で感謝告げ
不義理した手前進まぬ靴の向き

三田市　久保田千代

どんな日もあるわいなぁと母笑顔
家で産み家で逝きたい嫁と姑
糠添えて来た筍が鉢合せ
土壇場で実力出るかポロ出すか
だんだんと厚味を出しているカルテ

三田市　北野哲男

飲兵衛の通夜は飲兵衛ばかり来る
泣きながらその場の空気読む女
記憶術学んだ帰り皆忘れ
有限を無限のように過ごす日日
食べ放題その内カニが底をつく

三田市　福田好文

三田市　石原歳子

厭なこと忘れたいけど私下戸
その事に触れずにわざと知らん顔
我慢ばかりしていられない意地もある
塾繁盛りんごの頬っぺ死語になる
散歩中円墳みつけ跳び上がる

西宮市　藤本直

ほとぼりが冷めましたかとお節介
適当なずるさ加減がむつかしい
花よりも葉が好きですよとしとやかに
伝えたい言葉が喉で迷ってる
野の花は控え目だけに美しい

西宮市　緒方美津子

ごろごろと新ジャガ弾ませてカレー
不眠症いうて寝てはる春炬燵
鎮まらぬいかり深爪してしまう
スーパーを歩いてるよう駅の中
やき肉とビールに負けるダイエット

西宮市　亀岡哲子

前後左右頭上も注意して歩く
蕗のとう地球の味のほろ苦さ
頑張ってなんかいないと頑張り屋
育児休暇のパパ忙しいおままごと
お向かいの苗字とっさに出てこない

西宮市　山本義子

寺参り石庭ひかるみどり雨
雨あがり春も落葉の定めあり
ホースより雨がうれしい花時計
母を看るひと息ついた雨の音
鹿威し雨とジャンケンして遊ぶ

西宮市　足立茂

飲み会へ勝手に足が速くなり
訃報聞き放っておいた四月馬鹿
青春が土にまみれてホームイン
宅配便春の香りと母の顔
禁煙は簡単だもう十回目

西脇市　七反田順子

国産をよって食べてるカタツムリ
百均はついついたんと買わされる
水仙は母の命日偲ばれる
日足伸びうららうらと犬散歩
傷負うて恋に破れた猫の顔

姫路市　古川奮水

八十円切手で遠い友と会う
惣菜は赤札付に吟醸酒
休肝日右手確かにティーカップ
帯芯は諭吉だったと噂聞く
春風に少しは妥協して生きる

奈良市　米田恭昌

関白がかあちゃんと言う耳障り
少国民矢張り負けんと聞いたジャズ
炊き出しに並ぶ顔顔ドラマ秘め
恥じらいを忘れて守る過半数
うどん好き讃岐ツアーにニッコニコ

奈良市　天正千梢

夕食は桜ご膳で祝われる
名医とナースに深く頭下げ
百歳の爺にうなずく事ばかり
階段は一歩ずつだと思い知る
まだ残り仕事があるといのちくれ

奈良市　岩本浩二

五月の湯浴びて元気を取り入れる
椅子一つ巡る男にあるドラマ
究極のマジック老妻の厚化粧
煩悩を捨てて身軽な八十路旅
盛り上げるつもりの十八番白い風

奈良市　辻内げんえい

シップ貼りドリンク飲んで孫の世話
湯たんぽにエコの名を付け売れている
ジム通いお湯が目当てのお年寄り
ソチ五輪場所はどこかと地図さがす
円周率五歳児覚え五百桁

奈良市　阿部茶々

金婚までジューンブライド無事に持ち
蚊一匹追っかけ回し眠れない
鶴彬その生き様に胸打たれ
手当て決め今後こどもが増えるはず
スーパーで菊一輪を買う老爺

生駒市　飛永ふりこ

ぶすぶすとマグマのような不信感
鮮やかなたんぽぽ迷いから覚める
どんよりの心ショパンのシンフォニー
逸速く新人婚活の候補
角張ったジョークで人を制します

香芝市　大内朝子

生きているだけで嬉しい青い空
口髭を剃るわたくしになっちゃった
限界を知る脳味噌が淋しがり
平穏だ色恋沙汰の無い暮し
残された命きらきらひかりたい

大和郡山市　坊農柳弘

多数派の中で叛旗を振るピエロ
民営化の見直しポスト赤いまま
窓開けて初夏の誘いを待つひとり
殊更に観光用の茶摘み唄
自分史に自己陶酔の夢一つ

息子には親父のすべて古臭い
親父には息子のすべて青臭い
大吟醸二本ころがす春の宵
母だけがにこにこ見てる飲みっぷり
斜に構えひとりで吠える父である

奈良県　渡辺富子

弱者から切り捨てられてゆく政治
突風の粋な計らい花筏
弁当の日の丸も良い花の下
ごまをするためのすり胡麻的を射る
ご近所のおかげで旬の味よばれ

和歌山市　福本英子

手鏡の裏に儚い風が棲む
寄り添えば風ざわざわと花吹雪
ふるさとが極楽だった遠き日々
グラスの底に甘く残っている未練
横からのいらぬお世話が野火となる

和歌山市　松原寿子

ルンルンは御偉方らの目に止まる
おみくじの凶へやる気が倍加する
体調はどうかと親身ある便り
糖尿病がなんだ私の料理好き（旦那が糖尿病）
ぶらぶらしても生きて行けるのに総理

和歌山市　田中みね

永遠の愛へ鎖がからみつく
金婚へ昭和のリズム捨て切れず
一抹の不安がよぎる言い逃れ
あと味の良さが勇気を倍にする
牡丹餅のようなほっぺで福を呼ぶ

和歌山市　武本碧

齢という老いを無視して勇み足
風向きを見ながら次の策を練る
目標とずれた話が盛り上がる
割引きも割増しもない暮し向き
暇そうに見えてコーヒー誘われる

和歌山市　喜田准一

嬉しい日うれしいように万華鏡
企画したとおりにいかぬマニフェスト
半世紀添うてリズムがまだ合わず
スキップのリズム狂った骨粗鬆
鼻柱なくてめがねが拗ねている

和歌山市　玉置当代

来客もなく大欠伸する器
物置が健康器具の墓場です
ホントかな時代はエコと言うけれど
きもの着て自惚鏡見ています
一病とゆっくり歩む花の下

和歌山市　堀畑靖子

和歌山市　岩本美智子

分娩室パパ一番にご対面
ヘソの緒へ鋏を入れるパパ震え
新生児誰に似てるか赤い顔
そっと開く赤子の手には長い指
桜咲く門に喜ぶ一年生

和歌山市　松尾和香

平行線辿った夫婦共白髪
流されてひょっこり変わる水の音
正直に映す鏡と笑い合う
ロングラン桜に感謝雨の音
人生を楽しむパワー出る余生

和歌山市　坂部紀久子

消しゴムは消された文字と心中する
世辞ばかり聞かされ上に立つ孤独
場違いに気付き光らぬ昼の月
一段落ついてカレーに決めました
スタートは皆幸せを描いてた

和歌山市　堀冨美子

幸せは信じた向きへ風が吹く
捻子緩み視界ぼやけた気の軽さ
逝ってから夫にあげたチョコレート
ストレスが徳利の底をまた振らす
卒業式袴姿の孫眩し

海南市　堂上泰女

かけ足で逝ってしまった同い年
球児には可愛想です春の雨
二人三脚もうしたくない呑気夫
花々に情容赦の無い嵐
サクラ咲くと不思議嵐がやってくる

田辺市　岡本昇

三途の川渡る稽古をするプール
土を舐め土と話した自家野菜
濡れ衣を脱いだ背中が乾かない
道草をしながら欲の皮を脱ぐ
花冷えに二の足踏んでいる桜

鳥取市　鈴木公弘

騒音に負けずウグイス鳴き続け
手を合わすお悔やみ欄の同い年
手違いがあって体重また増える
喫茶店さみしい人がこんなにも
噴水に元気をもらう棒グラフ

鳥取市　夏目一粋

お互いに弱さをさらけ出せ夫婦
美しく老いて死ぬとはよう言わん
花や鳥家族に入れて今日も暮れ
あれは嘘だったと言えずそのまんま
生きるのに疲れたなんて言わないで

人間の小ささ笑う大自然
これからは自分の意志にさからわぬ
他人からの意見書き出し仕分けする
対象へ距離の取り方うまくなる
揺れ動く心持つひといとおしい

鳥取市　春木圭一郎

春へ向けこころの扉あけ放つ
ふるさとの桜も友も杖を突き
輪の中の一人となっている安堵
親つばめ諦めて去る軒ばかり
政界にみる平成の万華鏡

鳥取市　岩崎みさ江

この想い届けとポストまで走り
二の足をひょいと出したら流れ弾
今日の罪年齢詐称してしまい
日暮れの恋マッチが濡れて火が付かぬ
魂に届く無言の涙あと

鳥取市　倉益一瑤

賽銭箱小銭の音が賑やかい
泣き上戸わらい上戸が賑やかす
酒の味わからぬけれど行く花見
ヘリコプターつかまえている鯉のぼり
舌出したように咲いてる蘭の花

鳥取市　土橋はるお

愚痴ってる時は生き生きしてる妻
吠えるよりどすが利いてる唸り声
ご免ねの言葉の裏に夜叉が住む
マニフェスト信じる方が悪いのか
賞味期限過ぎた同士が党作る

鳥取市　中宇地秀四

ひと筋に歩いた父の喝が飛ぶ
鉛筆をとがらせ破る愚痴の種
ほっとした時に決まって鳴る電話
爺さまの鋏は思い切りがよい
雑草も花芽をつけて燃えている

鳥取市　土橋睦子

退職の朝もゴミ出し出勤だ
足早やに散ったがいまだ酔い覚めず
心打つ話へビールぬるくなる
えん罪が晴れて周りも心打つ
ガリ勉の事業仕分けに縛られる

鳥取市　中村金祥

痛み止め飲まず無難に年を取る
青芽ふき孫の進学独り酒
曾孫が生れる年に認知症
愛だけを少し残して去った彼
独り酒ビールの味は苦味増す

鳥取市　宮脇道子

鳥取市　奥谷彩子

いい今を形状記憶させて置く
コトコトコットン雪どけ水車春うたう
花粉症うれしい春を曇らせる
永遠の愛と錯覚をして糸結ぶ
倦怠期イエローカード渡される

鳥取市　西川和子

同席の一期一会にふれている
ふれあって互いに元気分ち合う
その度に今度こそはと秀を追う
地産地消秀を揃えて贈り物
良く咲いた梢の花が御辞儀する

鳥取市　武田帆雀

視界ゼロ赤提灯はよく見える
語り部のところどころにある虚心
花見よりエレキを弾いているお方
桜の下に放し飼いされた女
喧嘩せぬ程度に酒を注いでやる

鳥取市　平尾菜美

私のハート奪った憎い人
正論へ目覚め遅れて狭まれる
譲れない姑のゴマ和え全てです
まだ余力信じて明日の鍬を研ぐ
年相応生きる私のあみだくじ

鳥取市　永原昌鼓

汗かけばめざし一匹旨い酒
苦を楽に変える汗ならかいてみる
汗かいた笑顔が素敵ボランティア
汗かいて人はお金の価値を知る
銀メダル汗と涙の跡がある

鳥取市　田村邦昭

温かい心とこころ大きな輪
新免許新車がローン連れてくる
人生になびくを知った処世術
頑固者コピーはいやと個を守る
強靭なハート人情には弱い

鳥取市　池原天馬

八十路きて友の生き死にもう聞けぬ
ひそやかに生きる覚悟で古着出す
定年だ本気で百姓夢だった
うちの畑名ある雑草花ざかり
桜咲く荒れた山でも花やいで

鳥取市　太田幸枝

もの言わぬ孫真ん中に賑やかす
花の下花より団子盛りあがる
賑やかに暮した昔なつかしい
春祭り見知らぬ人と酌み交す
生きてても認知の友が多くなり

鳥取市　池澤大鯰

信号は青それでも急ぎ渡る癖
天下り仲間渡りと言っている
二代に渡り貧乏神の世話をする
鳥渡る旅に命を懸けながら
湯煙りが妻を女に仕立てあげ

鳥取市　加藤茶人

児を産んで謝る事を妻忘れ
往復の切符を持って娘は嫁ぎ
髪抜けてやたら頭をよくぶつけ
味方だと思った妻が杭を打ち
節穴が見てた廃れる三代目

倉吉市　山中康子

外歩き嫁と一緒で気もかるい
教わった積りはないが遺志を継ぐ
窓口であんなこんなと娘の評価
本心をすかさず吐いて祭り酒
ショッピングお札の数とにらみあい

倉吉市　猪川由美子

子ども手当たんと受けてた総理だよ
僕のハートに火を付けといて知らん振り
ヒール去り相撲人気へ頑張れよ
次のソチへ肩の荷下ろすヒマはない
総理よりエラそな御仁掻き回す

倉吉市　松本よしえ

三叉路で別れそこからまたひとり
価値観の差も乗り越えて手をつなぐ
我が家までお迎えクリニックの車
好きだったひとの写真も色褪せた
可愛いねコピーのような双児ちゃん

倉吉市　山本玲子

春霞み洒落てはおれぬ黄砂だよ
春爛漫ドライフラワーお蔵入り
甘酒の失敗作が美酒になる
町おこしあの手もこの手にも乗ろう
さるすべり蟻の木登り余念ない

倉吉市　野口節子

同窓会我が青春の巻きもどし
気もそぞろお誘い受けて旅支度
老人パワー見せたつもりの旅帰り
火の章も終えて静かな水の面
人の世の浮沈ネオンは知りつくす

米子市　白根ふみ

帰りには対岸歩きたいさくら
言うことはない放課後の夕やけに
強がりもついに傘寿の坂の上
美人湯と聞いていそいそ老いも行く
湯けむりにやおらお面をはずし出す

米子市　野坂なみ

花びらが舞って野点に春を酌む
接木する訳を古木に聞かせてる
広い道接触事故をまた起こす
植込みの辺りの草は残しとく
この国の行方案じて散るさくら

鳥取県　深田倶久

来年も逢おうねさくらトンネルで
失敗をおそれていつも二番手に
その域へ俺も到着もの忘れ
失敗談笑って言える年になり
陽春をめでる便りを両親へ

鳥取県　鳥越鬼一

列島に冬春夏が同居する
村が消え鎮守の森も役終える
イメージが湧かない時は森に入る
アマガエル　モリアオガエル大合唱
いつ来てもアニメのキャラに会える森

鳥取県　松川行男

散りそうだ桜だよりに急かされる
山菜を採りに行こうと誘われる
種よりも育ちが良いと教えられ
春嵐地方選から巻きこんで
いい話陽気になれば寄ってくる

鳥取県　北村稔

ねえあんた私でいいと言ったじゃない
エコカーを買ったが免許まだでした
子も孫も大きくなっておれ白髪
じいちゃんはいらないなんて言わないよ
食うだけはあります　あんた死なないで

鳥取県　山下節子

悲しみを隠す術です笑顔みせ
春を待つ蕾の中にある元気
判定は互角ジャンケンでもするか
ナレーション添えて名曲心打つ
気がつけば母の足跡たどってる

鳥取県　佐伯やえ

ついにきた別れごんたが泣きじゃくる（ごんた君の母さん3月27日ご死去　3句）
十年介護さぞ母上も御満足
立ち直れた御恩忘れず生きられよ
へらず口たたく人とはかみ合わぬ
人に書いた楽譜三度は弾いてみる

鳥取県　山宮愛恵

祭料理母が出番の味かげん
如才無くふるまう母の割烹着
愛を盛る大皿小皿みんな出す
苦労話喜劇となって皆帰る
とろろ昆布ほぐすうどんの真上から

ふれあいの真ん中あたり金もいる
タクシーが届けてくれた酔っ払い
マンホール町の自慢を踏んづける
チューリップ少しあぶない昼下がり
品格は問われぬおばちゃんの喋り

鳥取県　細田裕花

桜が咲くと賑やかになる国だ
散る桜流れによどみ花筏
踏みしめる道はピンクの花の路
花冷えに屋台も寒い春まつり
散る花を惜しんで飲んで吾が孤影

鳥取県　竹信照彦

子供にも描ける日の丸頼もしい
酷使した足腰の愚痴聞こえてる
友からの電話すぐのる飲むはなし
憶えてるハナハトメで傘寿越え
まだ少し乗れます僕のポンコツ車

鳥取県　山本正光

天敵は僕の心の中に棲む
目の前に壁があるから燃えられる
捻子巻いてまだ見ぬ夢を追いかける
がむしゃらに来た人生だ傷だらけ
ケータイの中に渦巻く過去未来

松江市　三島淞丘

春が来たひさびさ夜のカラオケへ
格好をつけてパソコンいじってる
鳩ポッポ弱者の声が聞こえるか
次々と積荷が重いおんな道
生活の狭間にふわり曲を聴く

松江市　松本知恵子

夫婦でも聞き返せない谷がある
にんげんを笑うカラスも腹黒い
見て聞いて喋って脳の活性化
顔のないロボット並ぶ終電車
ラブラブの時もあったと落椿

松江市　津川紫晃

神様も少子化悩む縁結び
うどん屋は腰の強さを自慢する
ミニの脚どうも免疫できません
裸婦像を回って尻も確める
雑草は折れ傷見せて嘆かない

松江市　小川注湖

溜め息をついたらやっと春が来た
溜め息の出る家計簿をつけている
年金が息つく間無し飛んで行き
子や孫の火種大事に温める
息の合う嫁と姑で茶がうまい

出雲市　多久和敬子

どうしても従いていく気の女偏
女偏ドラマは終りに近くなる
何故かしらかすみ色から抜け出せぬ
夫と二人気力無さそな日々なれど
昔々に御電話掛けてみようかな

出雲市　石倉芙佐子

沈丁花散って小さくなった庭
早春が行ったり来たり忙しい
仲直りだんだん下手になってくる
夾竹桃がもう沖縄に咲いていた（沖縄の旅）
悲しい過去を忘れたような守礼門

出雲市　森茂美

ふるさとに時間を戻す老いの旅
足を曳き背なを丸めて俺がゆく
飛騨の山女工哀史の路つづく
平和とは青い色だと決めている
戦争がふとよみがえる佐世保の字

出雲市　富田蘭水

芽ぶく春だにどうしてか眠くなる
天こ盛り里の御飯が生きてくる
温泉のお湯が無料で流れてる
桜木のもとに眠ろうかゆっくりと
石けって心が少し救われる

出雲市　小白金房子

小鳥から貰った春のこぼれ種
母の川ご恩返しに遡上する
ペタ靴で我が人生を踏みしめる
悪友の助言謙虚にうけ止める
桜百選肩を寄せ合う詩の街（木次）

出雲市　持田多輝子

会者定離送り送られ渡るしゃば
出張の土産はシャツの洗い物
上見れば限りなし野辺の花でいい
トップの座登ればつよい向い風
主婦の城ママの笑顔で幕があく

出雲市　伊藤玲子

公園のベンチに座る春の風
道端の小さな花に癒される
軽く見た小さな嘘が音たてる
冗談が鉢合せして火花散る
昭和史を生きた火の章振り返る

島根県　伊藤寿美

海猫が岬の句碑を読んでいる
身に覚え小癪な意見聞いてやる
時々は独居の背を掻く柱
亡父亡母の話が弾む茜雲
コンセント抜いて文句を言わせない

春の便りか郵便受けがさわがしい
淋しい日ネイルアートをして遊ぶ
手鏡の裏にきのうを折りたたむ
時々は喧嘩を売って惚けさせぬ
途中下車旅は気ままに春の靴

美作市　大石　あすなろ

皿数を並べて生きて来たひとり
あれほどに口止めされたのを忘れ
借り衣で心のほこりつつんでも
まだ死ねぬ仕事山ほど積んでます
漂流の果てに落着く腰の位置

美作市　山本　玉恵

追い越して足跡を子は待っている
人間だ時々休む曲り角
次の世も亡夫のレール踏みしめる
写経する無の境地での頼み事
先頭は若い世代に任せます

美作市　福原　悦子

人生の短かさ実感する八十路
中流も年を重ねて下降する
一本の藁を頼りの余生です
だまし絵の中で赤着て老い和む
少子化を金で助ける何か変

真庭市　福嶋　智恵子

木の芽ふくらむなんて甘い時間だろう
頼まれて傘寿の出番腰伸ばす
頼まれて微力ながらもボランティア
相槌は打つが一歩もひかぬ肚
来世は亡夫が待っていてくれる

真庭市　国米　きくゑ

有難う片手で足りぬほど言えた
とりたくは無いけど齢は強引だ
返事する声は元気に見せておく
花は花なりにしっかと四季を知る
下り坂膝よ我慢をしておくれ

竹原市　時広　一路

雨の朝桜の精の花蒂
愛つめた牡丹の蕾今ひらく
若い葉に後を任せて散る親葉
負うた子に教わることの嬉しさよ
生命線のばす紫陽花雨しとど

竹原市　石原　淑子

ジーンズの破れから出るメールの音
追伸に強い絆が見えて来る
今日も素顔のまんまの冷奴
しがらみが湧くごと迫る酒の味
やさしい答えから夢を膨らます

府中市　馬場　利子

東かがわ市　清川玲子

パソコンの指で世界を巡ってる
同じ箸なのに軽い日重たい日
和太鼓の響き一つになる心
年毎に響くこころが減ってくる
蕾の時はしおらしかったバラの花

東かがわ市　伊勢八重子

もう二度と心結べぬ認知症
旅心一寸くすぐる美人の湯
バイキング払ったほどは食べられず
言い訳をするから余計ボロが出る
倖せは食べて動いてよく眠る

東かがわ市　川崎ひかり

桜花ひとりで見てる味気なさ
子がおんぶしやすいようにダイエット
良し悪しはあるがケイタイ離せない
本屋には寄るまい時間すぐ過ぎる
クレヨン画ママはいつでも笑ってる

東かがわ市　原賢

気まぐれな虫がさくらを見てさわぐ
目の奥で嘘と知ってる妻の笑み
生きてきた歴史をなぞる日記帳
笑う日も泣く日も喉が渇ききる
言い勝ったセリフに軽い嘘がある

松山市　宮尾みのり

双方が不服の線で痛み分け
物忘れ許容の器小さくなる
さすがプロ簡単そうに出来上り
返事しないことが私の返事です
川柳人生アハハと笑い終りたい

松山市　髙橋宏臣

思い出もうすらぎ捨てる欠け茶碗
頭の中を流れて止まぬ砂時計
春愁のまなこに重く花を見る
夢追ってひとり芝居の幕開ける
ふりかえり見るふるさとは枯野なり

西予市　黒田茂代

雪原を丹頂が舞う別世界
白銀の流氷知床を飾る
雪しんしん人の気配のない富良野
火山土に根微細なコマクサのパワー
人ってみんな異なる内と外の顔

高知県　小澤幸泉

お城下の花見をさけてひとり酒
入学のとおい景色がよみがえり
花粉症きっと何かが起こりそう
ネオン街くっつき雑魚が泳ぎよる
立ちんぼのハラを透かしてみたいもの

唐津市　井上勝視

共白髪放し飼いでも恙なし
外からは根っこ判らぬ腐れ縁
意気投合まではおぼろな宿酔
どこからか野次馬が湧くボヤ騒ぎ
不景気が投票意欲まで下げる

唐津市　坂本蜂朗

野間之関桜を褒めて通り過ぐ
武家屋敷難攻不落の気骨あり
試飲会だんだん声が太くなる
蘊蓄の扉を開く試飲会
呑兵衛の講釈唾を撒き散らす

唐津市　山口高明

女郎蜘蛛初心な野郎を繭にする
冥府への道案内か夜光虫
毒のある朱唇おとこは吸いたがる
不甲斐ない私を責める影法師
わたくしが取ると受話器が喋らない

唐津市　樋口輝夫

惚れっぽい寅さんがまた恋してる
束の間に夕日ストンと海に落ち
父の日にメール待ってる独り酒
転び方上手になった一輪車
寝転んで反応を見る孫の知恵

熊本市　永田俊子

衛星で琴弾く大和撫子だ
ロボットが人間臭くなってきた
新政党続出竹の子山の永田町
議論百出井戸の深さは分からない
世直しの風が若水を揺すってる

熊本県　岩切康子

一つ済むとゆとり出て来てハガキなど
申告を変更しても税剥る
体育館覗いて若き日を偲ぶ
留守の間に鍬持つ夫に感服す
皆風呂好き一室揃って一番湯

シドニー　坂上のり子

大物が消えても変わりない相撲
エコへ先ず路に木々植え影作り
ボタンかけ違いの人が前に立つ
意地張って老いという字は使わない
ハードワークなくて幸運ありえない

砂川市　大橋政良

七転び八転び運のないおとこ
自己過信挫折のきざし見えてくる
腹割って話せば風が止んでいる
ポンポンと無駄口叩くのが取り柄
芋洗うように剥けてる嘘の皮

変人を恋人にするへそ曲がり
泥棒の語源知らずに逮捕する
半額になるまで粘り買うおかず
週刊誌女の怖さ特集す
逆境をすぐ跳ね返すふくらはぎ

黒石市　相馬一花

背伸びした分だけ血圧があがる
ねぎ焼きを毎日食べて風邪予防
胃袋は満足してる味おんち
愛情の深さを母に知らされる
父の好きだったダンゴを買ってくる

十和田市　阿部進

さくら桜着地に迷う蝶になる
期待感くすぐっている予告編
三ッ星の焼き肉で目が離れない
幸せをつかんだつもり今日の汗
満月が出ると張り切る月夜茸

平川市　小寺花峯

夜桜へ寄り添う肩がほしくなる
仕分けする基準が少しずつずれる
核心に触れると走る静電気
ポケットの拳ふるえる少数派
逆転の夢を根雪の下で書く

弘前市　髙橋岳水

同罪にされて負担に泣かされる
去る人が去ると舞台が広くなり
度忘れが話を止めている自責
古稀なかば僕にも見える曲り角
転た寝の至福テレビは歌続き

弘前市　相馬銀波

なごり雪隣り合わせにさくら咲く
春告げるどの山菜もほろ苦し
北国の春はさくらの猛吹雪
見てくれぬ所でひそと山桜
菜の花にリボンのように紋白蝶

弘前市　今愁女

万歩計万までいったことがない
劇薬になったりもする褒め言葉
若者もつらいが老人もつらい
負け犬じゃないぞ勝ち組でもないが
したたかな人はなんでもバネにする

弘前市　髙瀬霜石

コップ酒次の人事を喋り出す
財布からトランプ並のカード達
犬だけにキスを許してまだ独り
若いママ演歌で子供あやしてる
通勤も慣れて昼寝もうまくなり

弘前市　須郷井蛙

冬籠りのお世話になった生姜湯
瞑想へ茶目な花びら杯に
ハードルを下げてわが道思念する
いいひとで続くふたりの修羅場抜け
温む風いのちぬくめて欲が出る

弘前市　岡本花匠

球根を祓い清めて植えました
スローライフ不意に病魔が来て遊ぶ
春間近かわたしの冬は終らない
リベンジに向う涙はうつくしい
悪口にも揺れることない独楽の軸

青森県　松山芳生

出会いの日別れの日にも桜咲く
朝に目が覚めたらもうそれで幸せ
いつも持ち歩く幸せの物差し
清張に女の怖さ教えられ
鮪も鯨も日本の食文化

さいたま市　星野育子

夜桜に幻想三昧さめないで
食べて寝て起きてにっこりええ卒寿
孫十人曽孫は五人宝もの
婆ちゃんはいつも若いと孫ヨイショ
まだ卒寿ときめきひらめきへまもやり

武蔵野市　亀井円女

四季報のページを捲る今日の風
メモ帳に走り書きした花言葉
道端の花は摘めない花鋏
足の向くまま靴紐の堅結び
慎重になれば躓く事もある

東京都　清原悦子

独居して自由不自由裏表
認知症もうかまだかとひとり住み
こっそりと買いたいものが何もない
処世術少し齧って身につかず
花束に秘めた思いを届けます

東京都　岸野あやめ

深刻な顔を見せるなウォーキング
誕生日妻は嬉しくないらしい
ハミングが聞こえる妻の仕舞風呂
ブーメラン君もやっぱり遊び好き
年寄りが未熟者だとご挨拶

横浜市　菊地政勝

安心を施設に託す休息日
廃校のラストを惜しむ花吹雪
式典の親子いそいそ群れている（大学入学式）
生前葬それも良いかと聞いている
花の宴ゴミの始末にホームレス

横浜市　小野句多留

懐かしい顔顔顔は皆あの世
千鳥ヶ淵ここに眠るか征った夫
石畳踏めば軍靴の音響く
亡夫宛のメール賽銭箱に入れ
桜トンネル曇り空にも良く似合い

川崎市　三浦きぬ

満開の桜チンドン盛り上げる
五回目の祥月命日風薫る
久し振り茶の間に朝日射して春
中一の孫に重たい祝い金
湘南の海へ飛んでる孫の夢

富山市　島ひかる

洋食に箸も置かれて安堵する
スモーカー灰皿ついに片付けた
元気かと問われ少うし口ごもり
新茶汲む農夫の語る耕の秘話
愛嬌が良い店員の名を覚え

静岡県　薗田獏沓

一割の負担気軽になった医者
お年ですお医者の顔に書いてある
親切な医者で薬を天こ盛り
お互いの悪いところに行く視線
一つ聞き三つ忘れるカタカナ語

可児市　板山まみ子

半分はおしゃれのつもりメガネかけ
じっくりと聴いたら怖い子守唄
騙された振りしておこう下手な嘘
身のすくむ青い時代の恥の数
もう少しコショー利かして欲しい会

犬山市　金子美千代

愚痴ったら私の長所萎んじゃう
切ないな闇に呑まれて逝った友
なかなかに的がしぼれぬ糸のより
間違った癖で笑いのネタにされ
出っ腹を叩いてみても効き目なし

犬山市　吉田幸子

不眠症だった桜も散りはじめ
落書に感心してる色づかい
マンガでは口を歪めるいじめっ子
遅早も込みで格安空の旅
正確なお昼夫の腹時計

犬山市　関本かつ子

日本人の常識ですとひとり言
密告者の顔に魔法が書いてある
引き算をすれば出てくる負の遺産
それは無理代役なんて出来ません
血圧の高さ時々うまが合い

（前月分）美祢市　安平次弘道

川柳塔の川柳讃歌 ㊻

木津川　計

寝たきりとボケを秤にかけてみる

鈴木いさお

「義理と人情秤にかけりゃ義理が重たい男の世界」。高倉健の「唐獅子牡丹」にしびれた昔の僕でしたから、結構やくざな性質が、いやお恥ずかしい。

やくざの掟は義理を選びましょうが、終末期の身の振り方を、寝たきりかボケかと問われると、これは難しい。寝たきりは辛いし、ボケは哀しいし。ですから、大往生かポックリ死かと問を立て替えませんか。すると僕はためらわず、うーん、さてー。

辛い目に合うのも生きている証拠

山田　婦美子

むしろ婦美子さん、辛い目に合うのは「生きている証拠」と言うより、「生きていく証拠」と思った方がいいのかもしれません。

またしても演歌でイヤになりますが、「生きていくのがつらい日は、お前と酒があればいい」と川中美幸は「ふたり酒」で唄いました。「生きているのがつらい日」でしたら、暗過ぎます。「いる」は無為の印象が強く、「いく」には意図の働きがあります。なにごとかを為そうとすれば辛いことは一杯です。

手取りでは話さず本給見合席

須郷井蛙

そもそもの出会いから上げ底の、見せかけの人間と思うか、この機会をモノにしたい必死と見るか、分れるところです。

僕は後者の側で、安い手取りをちょっとでも多く思わせようと本給を口にする、その切ない説得に同情するのです。井蛙さん、そんな懸命な青年の成功を願いましょう。

もっと言うなら、しれた額でしかあるまい本給を引き上げる世であってほしいのです。

女子アナと言うが言わない男子アナ

星野育子

なるほどなるほど、その通りで、男は痛いところを育子さんに衝かれたのです、

世の中は依然として男社会です。もし女社会でしたら「女子アナ」が話題になりましょうか。ことばの創造に限らず、文化のあり様は男性主権のゆるがざること、漢字誕生の数千年前と同じなのです。女偏の文字の被差別性は、男が誕生の主役だった証なのです。男女半々の世の中なれば、らしさを除いて、表現の平等は進められねばなりません。

妻といるのにバーのママ会釈する

坂本蜂朗

知人に会釈するのは当り前です。まして馴染みとあらば、知らん振りができましょうか。会釈されたのが蜂朗さんだったとします。すると蜂朗さんは、バーのママとのかかわりを奥さんに知られたくないのです。隠しておきたい何かがあるのです。蜂朗さんに身近な同人諸氏に申し上げます。蜂朗さんはなかなかの食わせ者ですよ。モテ男のつらさです。一度は僕もそんな身になりたいなあ。

決断をせよと夕日が沈みかけ

須磨活恵

活恵さんはすでに作句の秘法を心得た、という生やさしいものではありません。造物主の万能を身につけられたのです。

考えてもみましょう。凡人は「いつかは沈む太陽だから」と言いますのに、夕陽を主体化させると、切迫した決断を迫るのです。

活恵さんの川柳世界は無限の可能性です。ぜひ朝日も詠んでください。句評を担当する者の楽しみです。夕日のような朝日もあれば、朝日のような夕日もありましょうから。

（『上方芸能』発行人）

自選集

宮西弥生

ちょぼちょぼに生きて長編のドラマ
目指すものあっていい顔いい笑顔
筋ばかり通して扉が開かない
ぎりぎりまで命と笑い残しとく
ぴしぱしと動いて派手に生きる音

八十田洞庵

炎溜め女は今日を梳る
政治漫画笑う父はまだぼけぬ
夏草の中に埋もれる兵の墓
矢印に逆らい迷い深くする
昨日の顔は仕舞っておこう今日は今日

両川洋々

淋しけりゃ影よ私が抱いてやる
だあれにも傷の深さは計らせぬ
派遣村やはり政治の貧困だ
履歴書が欠伸してます総理どの
発狂もせずにわたしの今日終る

板尾岳人

することがないので母の肩を揉む
母許し父を騙して海を見に
石投げて割ってしまった父の胸
他人とは話さぬ乳房持っている
草の芽を踏んで来ました里帰り

奥田みつ子

吃水線あたり危ない日本丸
下り坂の夕陽は凄いほどきれい
登りより下りは倍のエネルギー
花の下妖気ただよう別世界
美しすぎて命吸われる花の下

河井庸佑

反論は受ける覚悟で自己主張
忘れたい過去を秘めてる脛の傷
口答え孫もぼちぼち反抗期
不平不満噯気に出さぬのも器量
お節介迷惑だとも言えず耐え

川上大輪

健康第一タバコ一本減らそうか
いい仕事してますねぇと犠打一つ
夜の底覗いて渦を確かめる
日めくりは一月のまま桜咲く
道問えばおばちゃん飴を一つくれ

名所とは悲し原爆資料館
碧い空紙風船が空に舞う
停年と知らず目覚し鳴っている
竹植えて川の堤防強化する
節水の宣伝カーのゆく暑さ

木村あきら

春ひとり生田参りは句碑参り
五百羅漢はみんな笑っていた桜
若くなっていたのは退職後の私
孫が来るまで棚に飾っておく玩具
挑戦者の形のままでいる蕾

小島蘭幸

妖怪の誘う水無月旅へ出る
ソプラノでまだまだ嫁に負けられぬ
告白をする水仙がいじらしい
年だとは思いたくない足の萎え
花の季は終ることなき蝶の道

小西雄々

ぼろぼろになっても切れぬのは絆
それぞれに種はしあわせ色で咲き
病葉へそっと心の灯をともす
太陽の匂う手袋貰うなり
早朝の搾乳牛と会話して

斉藤姦

火事になり火遊びライター叱られる
妻の庭そろそろ追肥やりましょう
千号になった川柳塔おめでとう
二千号めざし同人一同がんばろう
大阪に鶴彬句碑なじみます

塩満敏

杉花粉黄砂襲来春霞
梅桜娘等開花春夢幻
三時間花見休戦花筏
些事雑事凶事忘却花見酒
自己管理能力微弱二日酔

新家完司

春めいてぐうたらの背を叩かれる
橋からの景色をいつも自慢する
春おぼろ寺の由緒を聞いている
あっけなく別れる縁もある世相
ついて来ぬ身体へ頭休ませる

恒松町紅

満開へ去年のコース辿る幸
ストーブに今日の機嫌を問う目覚め
OSK春のおどりに血が騒ぐ
休日の留守は公認済み居職
ピーポーの音絶え間ない都市砂漠

津守柳伸

足るを知る余裕で食べる腹八分
へそくりも上には上がある母で
丑三つの信心犬にあやしまれ
黒豆を炊くばあちゃんを待つ長さ
伸び盛り頭の方は置き去りに

遠山可住

どの政党もサクラに天下取られたり
ライトアップ罪つくりなり神ほとけ
山門に鳥居に墓に散るさくら
人間の罪を背負うソメイヨシノ
校庭の桜少子化へ咲き迷う

都倉求芽

大笑いして牡丹（ぼうたん）の花が咲く
善いひとに囲まれ石がまるくなる
昭和一桁戦争の負けのこり
謙遜という格差から落ちこぼれ
花いっぱい植えていのちの根くらべ

土橋螢

いま今も棄てがたい身にあこがれる
寸暇惜しんで他人様のことばかり
金の要る味ばかりなり天地人
常識の世界あなたは保ってるか
熟すもの熟してラスト花の画布

中原諷人

善人でストレートしか投げられぬ
言い過ぎた日には豆腐でさえ硬い
再生紙の白へ疑い深くなる
行列に並ばず損をした気分
物指しと眼鏡たくさん持っている

西出楓楽

家計簿の見直し総理呼ばれない
兵站の見直しからの勝ち戦
見直したはずの人事も百日め
財政の見直し税の名が変わり
見直しをすべきか死刑廃止論

仁部四郎

励ましの拍手に幕はまだ引けぬ
琴の音を耳に茶席の客となる
かもめ追う海のわたしはボヘミアン
球根に脈あり咲かすての平に
啄木の小蟹が砂の足を這う

林瑞枝

手術終え祈るこころに辿りつく
インターネット列島探す無農薬
四ヶ月後の検査でよいと二重丸
孫大学喜び重ね桜咲く
大まかを決めると肩が軽くなり

前たもつ

政岡未延子

そうかそうかと嘘を真面目に聞いている
心細げに過疎を支えている土橋
のんびりと余生楽しむ山ざくら
自信に満ちた少年の高い音
紙と鉛筆うたが詠めずに引き籠る

三宅保州

うしろ振り向いた途端に追い抜かれ
逃げている限り解決できません
後半は満点すぎる立志伝
声も聞きたくないときはメール打つ
消火器は鬼門の位置に置いてある

第13回 鳥取県川柳文芸大会

日　時　7月11日（日）　午前10時開場
場　所　新日本海新聞社5階ホール
（JR鳥取駅南口から徒歩3分）

兼題と選者
各題2句　「品　格」　長浜　美籠　選
席題なし　「望　む」　山口　桃子　選
「カバー」　岸本　宏章　選
「仕分け」　池澤　大鯰　選
「握　る」　盛田　夢路　選
「きらきら」　稲村　遊子　選
「滑　る」　和田　三郎　選
「浮　く」　加賀田志延　選

締　切　午前11時半
会　費　当日2,000円（軽食・大会誌呈）
欠席投句1,000円（大会誌呈）
表　彰　1句1点総合成績10位まで呈賞
欠席投句　締切　7月8日（当日消印有効）
用　紙　自由（事務局により清記）
宛　先　〒680-0074　鳥取市卯垣1丁目
110　夏目　一粋
主　催　鳥取県　川柳作家連盟

温故知新

川柳句集『ふるさと』

須崎豆秋

師の序文三尺下がりいただきぬ（句集刊行）
外遊中だけは神経痛も出ず
駅長が眠気ざましに水を撒き
神様もビールの方が欲しかろに
看板のめしが一町先に見え
三ヶ日水が一番うまかった
日本人やたらにソースかけたがり
老夫婦めいめい勝手なものを食べ
鼻かみといっしょに百円札が出る
終点でああしんどとも云わぬ汽車
飼主も土佐犬らしい顔になり
蝿取りの名人となるほどに閑
チャンバラで貧乏人の子は斬られ
アルサロが左ぎっちょで酌いでくれ
名月へお尻を向けて呑んでいる
見る目ほど幸福でない自家用車
不景気で重役さんも立って呑み

初　版　昭和29年11月発行
再　版　昭和30年4月発行
復刻版　昭和60年9月発行

川上大輪選

あの世は謎さらにこの世も謎だらけ
ふる里に夢あり生家母校なし
素敵だと思えばすてき八十二
丸くなれ月も私もまるくなれ
来世もあなたとなんて暇な人
わだかまりあれば心のポリープだ

竹原市　國實　力

饒舌の独り善がりが続いてる
頼み事抱いて正座が崩せない
小細工は嫌い出た所勝負です
幸せの数ほど越えた坂多し
明日というページへ乗せる夢がある
優しさが身上魔女になり切れぬ

阿波市　三浦千津子

人生こつこつ奥の手など持たぬ
とっておきのペンで幸せ描くノート
血圧が行動範囲狭くする

大洲市　花岡順子

万歩計ある日詩人になりすます
どん底を生き抜く打算なら許す
ためらっているうち虹は消えていた

大阪府　神野千恵子

極楽蜻蛉それも一つの生きる道
風呂敷という日本の多様性
写真館どこか他人の顔になり
喜怒哀楽人を繋いでいるんだな
手をつなぐだけで景色が円くなる
無駄遣い増えるデフレのスパイラル

紀の川市　宇野幹子

美容院から転げ出た赤い毬
手鏡の中から少女羽化をする
修羅越えて塩の甘さが読めてくる
迷い道くるりくるりと女傘
厚化粧鬼一匹を閉じ込める
抜け殻に詰めてあるのは過去の夢

札幌市　小沢　淳

面舵を切るとみんなが転げだし
拍手する手前で止める夫婦劇
満腹になって五体が緩みだす
また酒に飲まれ人間さらけ出し
底辺で支えています土踏まず
風見鶏笑う私も風見鶏

鳥取県　斉尾くにこ

ありがとうわたしの生きるエネルギー
雨降ってしあわせの種発芽する
濁音を洩らすやさしい不発弾
強がりを吐いたことばが濡れている
誤解とくことばがもつれまた誤解
この言葉食べて三日は生きられる

和歌山市　上田紀子

人間のへそに笑いを溜めてある
複眼で全て見通す生き字引き
学窓を巣立ち答えのないテスト
半音を下げた暮らしでリズミカル
トンネルを抜ければ春の風に逢う
解決の鍵一本の電話から

高槻市　島田千鶴子

花筏浮かべて水の静かなり
媚もせず咲いて散りゆく山桜
全巻を大人買いして持て余す
若い日の夢に二度目の種を蒔く
入学式パパとママとを従えて
薬飲みしがみついてるこの世です

豊中市　池田純子

老眼鏡主をおいてどこ行った
ドキドキと振り子時計になる鼓動
アバウトが母のレシピの隠し味
塀ごしにくぎ煮の匂い春が来た
ふる里は人も景色も本音です
おいコラと猫には強気うちのパパ

北九州市　岡田幸生

やり残したことがまだまだある焦り
野の花を飾って部屋を若くする
起こされた耳サイレンの行方追う
始末書で済むと思っていた誤算
青春の前途にあった迷い道
不器用を笑っているな小さな捻子

藤沢市　加藤スズコ

雪かぶり野菜は耐えて甘味出す
病む足が季節変りを告げている
桜五分咲き洗礼受ける雨嵐
生かされて桜見上げる九十歳
桜トンネル絶叫のせる介護バス
ときめきの春の夢追う試歩の杖

札幌市　三浦強一

神様がぼくの余命を教えない
百均の傘があふれる忘れもの
ワープロもテレビも後期高齢者
何となく分かる気がするゴミ屋敷
訳ありの商品売れる訳がある

横浜市　川島良子

アレソレで通じる老いが怖くなる
お隣の鼾にホッとして眠る
スイッチが入ったらしい止まらない
気候変動に悲鳴を上げている身体
ここからはチョット本気になる勝負

佐渡市　髙野不二

新聞が今日一日のノルマです
胡蝶蘭昼寝をしたくならないか
定年の日からの波が大き過ぎ
テレビから今日も習った悪の道
弁解は口の中ではしています

豊橋市　藤田千休

吊り橋が度胸試しをそそのかす
レシートにサービス料がしがみつく
塗りかえて塗りつぶしても妻の顔
目鼻喉花粉三役そろい踏み
フレッシュな噂飲み干すティーカップ

富山市　有澤嘉晃

落書きを待っていそうな白い塀
似たような顔になってく同期生
転ぶのは回る地球の上だから
聞き流すことも大事な処世術
言われたが言われたとおりしない我意

大阪市　太田としお

笑いなく怒ることない日が暮れる
せわしない薄型の次もう3D
監獄が満員になる記事ばかり
辞めません酒もタバコも国の為
芸術と法のはざまでカゼをひき

大阪府　畑中節子

句作りも自家菜園の農日誌
青虫がここだここよと老い招く
亡き夫の年数えつつ墓洗う
物忘れ後期受け入れ交差点
春野菜能勢はやさしや土までも

泉大津市　助川和美

普天間へ丸く収める案がない
バス停の椅子に梅の香山の春
母の忌に間に合わせたい障子貼り
大仏様たまには立ってみたいでしょ
引越し整理つい読み直すラブレター

三寒四温春の女神に遊ばれる
いま一度見詰め直している余生
雨期乾期あって夫婦の五十年
残り火を掻き立て夢を積んでいる
造られた街が老化へつき進む

河内長野市　針生和代

出来不出来あって手作りあたたかい
出来過ぎた野菜市場を知らぬまま
腹立ててつくる料理の塩加減
へぼ将棋加減出来ずに子を泣かす
頂点に立つとあらだけ見えてくる

堺市　近藤治子

ひと目惚れしてから重い荷を背負う
自転車のエコがこたえる坂の町
同窓の名簿がうすくなってゆく
スポーツも食事も歳で軽くする
童顔の訛り飛び交うクラス会

堺市　遠山唯教

雨の日は手持無沙汰の晴れ男
定年日賞味期限と違います
案ずるな雨が降ったら傘を買え
四六時中うるさいけれど妻頼り
孫が言うお酒飲むよりヨーグルト

堺市　内藤憲彦

大丈夫明日の空は別の色
真っ直ぐに歩き賞罰なしできた
低姿勢で過ぎた半生さて後は
健康法日には一度の大笑い
飲むほどに焦点の合う縄のれん

堺市　羽田野洋介

スニーカー老いを蹴とばし春運ぶ
喜寿控えいやに演歌が身に沁みる
繰り返す家事がそのまま生きること
母が逝き子が逝きあの世慕わしい
子の頬の冷たさ指が覚えてる

豊中市　荒巻夢

トリックが解けた私戯画の中
トリックを見破っている三面鏡
柚湯沁むわが心にも傷がある
新調の眼鏡も曇る露天風呂
幻想の公約でした民主党

富田林市　古田千華

春雨に耳をすませば芽吹く音
片腕は国に捧げた友が逝く
ふる里の風逢いたくて汽車に乗る
乗り替えは出来ぬ行くしかない余生
初恋が今もくすぶり死に切れぬ

寝屋川市　岡本勲

キンコンカン傘寿を告げる鐘が鳴る
一里塚迷わず次も飛び越える
裏表見せて辿ってきて傘寿
傘寿でも知らない事が多すぎる
卒寿を生きた亡母には遠く及ばない

八尾市　赤木妙子

満開の桜の道を医者通い
大浴場一人になると恐ろしい
待合に忍耐力を鍛えられ
顔浮かび名前の出ないもどかしさ
一つして一つ忘れて齢やなあ

加東市　安達厚

いとおしく生きよう綿アメが萎む
ちちははの足跡藁ぐつで辿る
どん底を叱ってくれる冬木立
隠し味塩か砂糖かもう余生
ひとり居の窓辺を警備黄水仙

篠山市　沢山啓子

口調までママそっくりなおままごと
精一杯今日を生きよと朝の水
裏表小細工なしで生きている
体重が減って病気が顔を出す
吉報の第一声は指で丸

篠山市　石田久子

勘違い昨日の敵は今日も敵
その案は水と油が混ざってる
鉛筆と紙それだけですまぬ趣味
ブランクを埋めるに根気また根気
歯向かってくる子だ大物になるぞ

西宮市　泉水冴子

春色に透けてピンクの花多弁
性格は違うが価値観一致する
言い訳がくどくてふっと湧く疑念
たっぷりとはいかぬが孫たちへ祝儀
君がいるだけで充実するくらし

和歌山県　森下よりこ

豊かさに間延びしているリズム感
たいがいは笑ってすます事にする
いたわりの心よせ合うフルムーン
振り向けば泣かず飛ばずの半世紀
大丈夫ずっとあなたの傍にいる

和歌山市　福井菜摘

なまこから見ればわたしもちょっと変
間違いの多い予感にまたチェック
気がかりを見ていてくれる観世音
空回りしたこともある古時計
西行にふと出会えそう花の下

海南市　小谷小雪

恩返し何時も見上げる空がある
後悔の声が聞こえる耳の奥
年齢を重ね迷子になっている
一日を時間をかけて思い出す
チラシの裏にメモする趣味をもってる

紀の川市　辻内次根

お別れの峠を越えて強くなり
男用メガネをそっと掛けてみる
生きている限りお風呂は欠かさない
三期目のカラスが町を食い荒らす
愚痴を吐くコップの縁が欠けてくる

鳥取市　稲村遊子

避けるほど出会ってしまういやな人
来た時と景色が変わる帰り道
曲線で生きて人生味がある
どんぶりのかけら一つで味が落ち
学ぶほど足りぬ自分が見えてくる

鳥取市　深澤千恵子

日陰でも花を咲かせて自己主張
子の餓死に平気な顔の親が居た
薄陽でも苦境に差すと有難い
輪の中に居ても気になる温度の差
角番をついに迎えた停年後

鳥取県　吉野いさお

おそ咲きを待つより今も輝こう
溜息をまぜて噂の花が咲く
お早うを交わす元気を貰う朝
ありがとうその一言で場が和む
趣味多く持って楽しく齢をとり

鳥取県　田口清帆

突然の異変スペアー出番来る
良性のポリープですとカメラ笑む
ご先祖は末広がりを望んでる
不況風昭和一桁怖くない
昭和一桁心のおしゃれ持ち歩く

鳥取県　岡本幸枝

ライバルの動きにプラン練り直す
春の風すさぶ心を和らげる
やんわりと肩たたかれる縄のれん
老いの坂楽な方へと切り替える
美しく見えて危ないこの地球

鳥取県　岡村孝明

正直と言う宝がくれた勝利です
杭一本の重さを知った境界線
土地売れて内輪ぐらぐら揺れだした
節約は誰にも負けぬ老い二人
次つぎと悩みの種が沸いて春

鳥取県　下田茂登子

鳥取県　西谷悦子

華やかに咲いてる花にある努力
巡る四季自然の絵画飽き足らず
しあわせの種火掌からこぼす
大勢になびく芯なしヤジロベー
雑魚だけど信念の骨きたえてる

雲南市　渡部好榮

これからの暮し一本道をゆく
ロボットに助けられてる夢を見て
ストレスを瞬間風速飲み込んだ
知恵袋持ってたやっぱりお婆ちゃん
わくわくとした年頃もあったよね

雲南市　菅田かつ子

イントロの咄嗟に言葉見付からぬ
地の果てに散った生命と言う石碑
ごそごそと土竜通りを変えて逃げ
老後とて忙しすぎると嬉しそう
年寄りにされると妙に腹が立つ

米子市　加藤正二

気を抜けば加齢が病連れてくる
年老いて特効薬は歩くこと
マニフェスト期待などしておりません
ジョギングで脳の時計に油さす
言わないでよいことを言うへそ曲り

美作市　小林妻子

僕の部屋落書帖と大辞林
田植には誰も帰省はしてくれぬ
筍が出てる猪から知らせ
うども蕨も忘れてつづく農作業
極楽も見て来たような法話聴く

竹原市　若年幸子

咲き分けて春を奏でる椿園
プチ登山天気も味方はずむ靴
ホロホロと散りゆく桜抱く未練
忌のめぐり亡夫の居そうな花筏
花筏噂話を満載に

今治市　渡邊伊津志

他人まで幸せにする生きる知恵
寂しさを吸い取るために手を握る
潮風と光を弾く椿の実
生きるねた考えながらストレッチ
贖罪の気持が演技光らせる

唐津市　北村松風

八十路過ぎ同窓会はまず黙祷
八十路坂ちょっと留年して登る
花冷えに桜も迷う満開日
束の間の憩う煙草の場所探す
寅年だ見せろ胴上げタイガース

静岡市　渡辺芳子

花冷えの雨はさくらの涙かも
さくら散る残るつぼみにほほえみて
戦時中釣りたてのキス米に化け
それぞれにゴハンよと呼ばれまたあした

江南市　脇田雅美

仲直り腹の底にはまだ火種
年かさね料理半分ラップする
度胸いる男が入る美容院
真っ直ぐに歩く人生敵多し

京都市　藤井文代

歳重ね体付きだけ丸くなる
散り際も人を魅きつけ舞う桜
古希迎え多病息災いいじゃない
お酒でなく桜と人に酔いました

京都市　清水英旺

スギ花粉と不可侵条約結びたい
青天の霹靂トンツー不整脈
かゆいとこ手が届く如墓洗う
春ほころびウンカの如く人が湧く

岐阜市　平野あずま

乾杯の形で咲いたチューリップ
成功をしたから法螺も聞いてくれ
鎧兜ぴしりときめて入社式
相談もせずにペットの名を決める

大阪市　平井露芳

寅年を虎年にしてよタイガース
一割の負担継続妻元気
主婦業に定年ないと妻の愚痴
ハガキより安い電話で事が足り

大阪市　笠嶋恵美

写経する雨のリズムと筆の先
二巡目は御礼まいりの花の寺
墓まいり墓地の値段も確かめる
チベットのパッチワークは寺飾り

大阪市　松田聰

顔よりも背中が失意物語る
老醜はいつか私もたどる道
花冷えへ冬物をまた出してくる
発表へ手ぐすねを引く万歳屋

大阪市　山本加お里

想い出のガラクタ溜めて捨てられず
したいこといっぱいあって年とらず
おとぼけで意地を見せてるゴミ屋敷
交際費一人でいても避けられず

大阪市　阿野壽美子

糠に釘笑うばかりの母の知恵
浮き沈み味方する方吟味する
ダイエット僅かの減りに嬉しがり
案件が手間暇掛けて没になり

大阪市　吉田知之

礼儀作法教師親から教えねば
ふらふらに酔って帰って梅茶漬
百寿まで生きられそうな予感する
予感ずれ冬物仕舞い大慌て

大阪市　片岡松枝

無縁主義流れに薄くなる絆
年金者他人事ならず身構える
桜満開外国人も城の庭
ありがとう桜の中の老い夫婦

大阪市　吉川弘泰

バーゲンの服着て心薫風に
年寄れど健康金に愛欲しい
ステージの女形の舞いに魅せられて
貼り薬プンプン臭う父の背は

大阪市　安藤なつこ

とりあえず一応嫌と言っておく
成せば成るはずが成らないなんでやねん
勉強をすればするほどバカになり
花吹雪あなたを連れてゆきそうで

池田市　上山堅坊

生き様をたくさん学ぶ趣味の会
さりげなく土産をいつもくれる人
勝敗がどうあろうとも飲むお酒
時価評価をしてはならない高齢者

泉佐野市　稲葉洋

遠近法やめ並列の夫婦絵図
三叉路で決めた行く手に是非もない
今日も雨明日も予報は雨らしい
さりながら降らねば涸れる地も人も

茨木市　島田誠一

衣食住足りてゆったり出来ぬ国
ネクタイの解けた余白で夢を見る
過疎の駅記念スタンプまで冷えて
記念碑に風化させぬの意地を彫る

河内長野市　山室光弘

欲を捨て見栄も捨てたら軽い肩
あちこちの部品もゆるむ錆も出る
猜疑心　心の弱みついてくる
雨と風すぐ休みとる万歩計

河内長野市　山本エミ

雨と雪がまん我慢の遍路行く
大師の湯タオルに包み持ち帰る
親孝行何んぼ積んでも悔い残る
ポジションを弁えもせず口挟む

河内長野市　木太久正一

光陰は矢の如し老いまた進む
老老の暮し油断は命とり
満開の花は団地の公園で
普天間の無事決着を祈るのみ

バーベルに笑われている僕と汗
ベランダに喫煙パパと鯉のぼり
思い出を子供の歳で語り合い
上司よりコンピューターに手こずって

河内長野市　松岡篤

食べ残し我が身に詰めてメタボ腹
駆け引きは甘え上手な孫の勝
人生の小波を泳ぐ傘の下
しっかりと日傘美人で顔隠す

河内長野市　辻村ヒロ

いいうわさだけキャッチする生き上手
桜咲く頃に誤解も溶けていた
下水など詰まるとワイフ猫の声
詰め替えて娘に回す宅急便

河内長野市　梶原弘光

きれいですジューンブライド幸せに
母の日より父の存在薄いです
春先は花粉で涙嫌いです
春休み宿題ないよ最高だ

河内長野市　内海綾乃

真っさらな文房具には親の夢
童心にかえり絵筆がはしゃいでる
片言に笑み誘われるひなまつり
おいしいのそのひと言に賭けている

河内長野市　木見谷孝代

政権は多勢に無勢おらが春
脳トレで指折り作る五七五
どうしたんカリカリしなや飴あげよ
スーパーの詰め放題は人気者

河内長野市　谷久美子

専門になりきれず居る趣味多才
オレオレを試して母に叱られる
耳に胼胝できると子供反抗期
さらさらと流したつもりわだかまり

岸和田市　中岡香代

まだ今はタダの空気で生きられる
オレと聞き詐欺を連想する世相
そこそこでよいと言いつつはっぱかけ
そこそこの付合いだから長続き

堺市　澤井敏治

賞罰欄白のまんまで終りそう
古希までを支えた足を撫でてやる
プランタのねぎで一人の汁を炊く
物忘れするが口だけよく廻る

吹田市　二宮栄子

進む道迷う時だけ妻に聞き
海外で日本文化の良さを知る
年寄りの知恵をヒントにエコライフ
この道に終りはないと日々励む

高槻市　初代正彦

高槻市　片山　かずお

まだ生きているぞと雨戸開けている
デイケアは今日も昔の流行り歌
呆けた顔してるがこれは生まれつき
親切で隠す男の下心

豊中市　源田　啓生

物言わぬ桜ほろほろ散るばかり
平成の桜も涙溜めている
骨太の人も鰯も消えて行く
デジタルの時代に合わぬアナログ脳

寝屋川市　小嶋　みさと

人々の願いかなえて咲く桜
スタートを切って華やぐ新入生
それぞれの使命を終えて散り急ぐ
健康をめざし溢れるサプリメント

寝屋川市　小谷　滋彦

春風はどんな色かと窓を拭く
ひげ剃って笑うも八十路の身だしなみ
居酒屋のメニューの端におぜんざい
鉛筆のちびる量ほど没句増え

羽曳野市　安本　美喜

音信を問うてもみたし春風に
土筆摘む　杖をどこかに置き忘れ
春日傘くるりと回し話継ぐ
蕨好き市場の親爺顔馴染み

羽曳野市　宇都宮　ちづる

産道が狭かったのか伸びをする
癒しと疲れを連れて孫が来る
来年もお会いしましょと花吹雪
花絨毯そっと小脇に足運ぶ

羽曳野市　仲谷　真一

民主党庶民の声を聞きなさい
沖縄に基地の無くなる日は来るか
桜咲き春が来たのに寒いなあ
温泉とごちそうあれば若返る

羽曳野市　森下　一知

温室の管理に育つ甘ったれ
腕白を縛る日暮れの塾通い
昭和の苦支えた老いの日向ぼこ
捨てられる田んぼ畑が野に帰る

羽曳野市　松本　静子

蕗のとうほろにがいのも春なのか
大根も花が咲くまで畑にいる
タンポポの綿毛フアフアついてくる
不況かぜ春の嵐ととんでゆけ

阪南市　坂口　公子

リズムなど言うてられない花筵
ドタバタとチビが乗っとる春の休日
欲しい癖に言うては呉れぬじれったさ
事も無く倖せリズムで就く寝床

よそ行きを着ると言葉も改まる
気に留めず聞き流してる酒の愚痴
しあわせに生きる福祉を当てにする
夜目遠目ぼくもそうして見て欲しい

東大阪市　西田　いくひろ

新緑の空ちぎれ雲流れてる
晩酌も痴呆防止と理屈付く
ストレスが溶けず理屈で困らせる
幾重にも垂れた桜に一句たれ

枚方市　坂本　ミヨノ

看護師は生命あずかるマリア様
看護師はつらい嘘にも耐えている
看護師の優しさ薬医師たすけ
看護師も人の子つらいときもある

枚方市　小川　良吉

母が逝き春にも若芽届かない
年取らぬ亡夫は記憶の中で生き
積もる話みな吐き出して帰る友
サプリメント飲まず階段上がれます

藤井寺市　吉田　喜代子

K点を越えてどこまでVジャンプ
大空へ日はまた昇る日航機
居れば邪魔居らねば不便老い二人
肩たたくふと振り返る春の風

箕面市　寺井　柳童

雑踏の中で孤独をかみしめて
人の振り見てる自分も見られてる
不況下で百円の価値見直され
春ですね待合室に舟をこぐ

八尾市　中島　春江

政党立ち上がり景気立ち遅れ
諭吉さん蝦蟇口開けて待ってます
反対の挙手孤塁を守ります
冤罪を医学の進歩引き戻す

八尾市　前田　紀雄

食欲をガムとお茶とでまぎらわす
余生にも生きるためには軍資金
もどり寒カイロ忍ばせ花見する
十打てば一つは当る杭を打つ

大阪府　小栢　こずえ

就活をはじめた孫の晴れ姿
初音かと耳そば立てて犬も聞く
紋揃う事を気にした母も逝き
燃えるよう真紅の椿透かし見る

大阪府　西川　冷子

蛙の子あやしています百面相
世の中をドミノ倒しで風が行く
クリーニング冷たい雨にまた延ばす
耳鼻科へと風が運んだ花粉症

大阪府　高木　道子

ええまさか二人は出来てましたんか
音響の流れに乗ってワルツ舞う
凛として袱紗紫帯に締め
呆け防止老いらくの恋しています

大阪府　若月祐作

迷うたび父の言葉を呼び起こす
新緑があふれ足取り軽くなる
いい友と心の底を酌みかわす
お祭が背中を押したプロポーズ

神戸市　早川孝子

満点を演じたあとの疲労感
メール浸け声の世界が遠くなる
やすやすと褒めたりしない真の友
心機一転ねじはゆるめにかけておく

芦屋市　竹山千賀子

世の願い絶える事なし絵馬の数
寒に耐え野菜は甘く撓やかに
老いの日々聞こえぬふりも処世術
一人占め時間を今はもてあます

尼崎市　小池幸子

ほろ酔いが浮かれ世界へつれて行く
庭のすみ芽出し準備のこぼれ種
気ばかりで追いつけません野良仕事
菜の花が招く畠の草が呼ぶ

加東市　黒崎美紗子

生きるのは下手でいいさと天の声
夕やけに焼かれ鯖寿司母の味
脱ロマン背中で語る老い静か
花も実も無くしてからの人間味

川西市　日野岡和之

向こう見ずのところが似てて気が合うて
行き先は不明ケータイ置いてある
天に星地に飽食と飢餓の国
満開のさくら散りたいときに散る

篠山市　酒井真由

老人会あと何回かふと思う
よもぎ待つ大福ほしい友が待つ
裏返しリフォームしても似合わない
旅先で亡父そっくりにふり返る

篠山市　永井かほる

ばあちゃんも一寸いい服着たい春
孫を抱く腕の力はスイミング
皺白髪苦労も幸も知る宝
常連がいつも乗ってる終電車

三田市　尾崎一子

花街道老々介護に元気くれ
出るだけの涙流して消した過去
高笑いストレスとれた寄席を聞き
同窓会白髪方言和も和み

三田市　辻開子

篠山市　谷田多美子

三世代生きてまだまだ湧くファイト
梅の香に百歳祝う夢を追う
故里の墓は心の重石です
冬眠がさめて紅引き髪を梳く

宝塚市　丸山孔一

ポイントが溜り分らぬ使い道
しあわせも不幸も生きておればこそ
表では笑っていますピエロです
何が良い分らぬままに傍に居る

西宮市　株元玲子

巣立つ子の行く末思い胸つまる
揺れ動く心の色は虹のいろ
飛べるうちどこまでも翔んでいく
千の風に乗り大空を駆け巡り

西宮市　吉井菜々子

交差点さくら往来ななめより
無気力へさくらの花が咲き誇る
万歩計モンシロチョウを連れている
ほんとうのわたし真っ赤な靴がすき

西宮市　寺井秋果

開眼へ余生をかけて刻む日々
終章はケアハウスで書くとする
見切り発車山積みされた高齢者
虐待死孤独死絶えぬご政道

三木市　山口久子

幸せを重ねてくれる桜花
春がきて鼻炎黄砂になやまされ
朝起きはひ孫の声で起される
背押され孫と花見のたのしさよ

和歌山市　磯部義雄

湯たんぽで温めている片思い
三寒四温桜とまどう温暖化
潤滑油友と差してるアルコール
見てみたい預金残高桁八つ

和歌山市　根田よしこ

青空に何故かいらいらする心
化粧水はじめと終わりちびちび
だんだんと老母の後追い苦笑する
まだ眠いでも今日ごみの収集日

和歌山市　坂部かずみ

目覚しの残り時間を楽しもう
花見にも孫の話で盛り上がる
草餅が筍になるお裾分け
デパートで買った新色春の服

岩出市　村中悦男

小窓からいらかも知らぬ鯉のぼり
同病と知って親しさ倍になり
さぐりだと気付かれてもする電話
寄る年もそれなり欲しい希望の灯

岩出市　藤原ほのか

どん底を知っているからゆるがない
どんぴしゃり言い当てられて仰ぐ空
愛の鞭ぴしゃりと胸に沁みた夜
座るべき人がいなくて軋む椅子

紀の川市　北山絹子

名水をたっぷり飲んだ日の調子
男にも言いたい事がたんとある
お喋りが過ぎてそれから貝になる
友の訃を聞いて心の灯が消える

田辺市　大峠可動

光陰は祖父と別れて七十年
三月四月すくすく伸びる花の首
旅のまま無我の境地で物忘れ
晩年のうたは一本芯を持つ

橋本市　石田隆彦

自己批判積み上げ明日の道しるべ
褒められた味を土台にジャンプする
目と耳に情報詰まり脳はマヒ
繁ってた漢字の森が枯れていく

奈良市　尾畑なを江

短針は呑気長針めまぐるし
携帯が追って来るくるトイレまで
先のばし得意な人の借り上手
程々のところで妥協それもいい

奈良市　矢野良一

咳払い妻が帰って来たようだ
日本海夕陽波音蟹料理
孫七人出費が嵩む新学期
天下一品亡母がつくった薩摩揚げ

奈良市　加門萌子

どちらにもいい顔をして生き上手
御無沙汰の友が珍らし何か有る
ポカ三つ重ねた夜のおまじない
つくしんぼ厭がる犬を引き連れて

奈良県　牧野隆之

慢心の風船きっと割れる破目
メル友は近くに居ても遠い仲
愛裁く庭に憎悪の花が咲く
渇いてる河原に丸い愛の石

奈良県　谷川憲司

定年後遊び方から勉強中
予定表犬の散歩を入れてある
衰えに追い付かないが歩いてる
損得を離れたとこに友がいる

鳥取市　山口千代子

陽が沈む今日も一日無事感謝
十指みな働き終えて今日の幕
老いるほど誰とも話す気の安さ
行くあてもないが予報が気にかかる

晩学の辞書は至福のお友達
川柳と辞書が私をときめかす
酔いどれを許して笑う桜たち
山崎野口　宇宙に日本語が響く

鳥取市　津村律子

サイタサイタサクラがサイタけど寒い
素晴らしい今年の桜とも出会い
春が来た野にも山にもホームにも
国語辞典開くは年に二三回

鳥取市　近藤秋星

センサーとロボットうちの義兄弟
ロボットも頑固一徹夫に似る
仙人の暮らし覗きに来た蛙
虎の子が儲け話に首を出す

鳥取市　坂本なつみ

後悔の砂に消せない足の跡
一枚の紙きれ出せばもう他人
ビザ持たず無断で黄砂とんでくる
はたせない夢を子供にタッチする

鳥取市　高浜勇

潮騒と桜舞い込む社会窓
軽く言うオーミステークノーサンキュー
溜め息のさんま真っ黒帰り待つ
息溜めてタンポポわた毛空へ吹く

鳥取市　大前安子

マニフェストガリ勉知識ザルに水
ご近所に子供がいない入学期
殺人と虐待ニュース今日も雨
鍬かつぎギャラには遠く畑仕事

倉吉市　前田喜美子

強風が咲いた桜に八つ当り
脳ゆるみ漢字書取りよく忘れ
同期生よれば膝痛皆同じ
忙しい時に限って電話鳴る

倉吉市　藤井美津恵

ものくれる列に加わる知らぬ街
無名校校名ちゃんとあるけれど
次つぎと花渡るのは人と蝶
美人とは顔ではなくて心だろ

境港市　中井虎尾

人生はゆっくり歩み粘り勝ち
老人施設さくら祭で皆笑顔
寒さともお別れ嬉しい春間近か
結婚写真父母は若くて美しい

米子市　田村周子

開花予想肴にちびりちびり待つ
継ぎ接ぎのうそでポロポロ化けの皮
小石にもオンリーワンの自負がある
重石だった父がだんだん丸くなる

米子市　野川宣子

作品にいつも出てくる孫に会い
商用の折に偶然流し雛
本家にも花をたむけて墓まいり
とり寄せでかの地の食を味見する

米子市　後藤宏之

テレビから各地の花見春ごたつ
菜園の春が顔だす鍬の先
雑草に挑戦状を叩きつけ
記念樹の子孫根づいた子らの庭

米子市　後藤美恵子

花が咲き雀も庭に声かける
夫のランチ豪華に作り留守をする
易で決めた結婚だからまだ続く
無い袖を孫にはふれぬ老いの見栄

米子市　見山温子

痛いとこ突かれ返事が縺れ出す
節節が痛むそれでも明日を待つ
ジョギングの汗をビールで足しておく
初出社国の訛りもつれて行く

米子市　竹村紀の治

なびく友背く友あり世の流れ
店頭のセルフコピー機動かない
転ぶ足忘れる脳が危いよ
あと一度灯油五缶を頼まねば

米子市　小塩智加恵

助け船用はないかと子にメール
余生とて新芽をちゃんと抱いている
どたん場できれいな嘘に助けられ
お陰様おいしいご飯だけはある

米子市　吉田陽子

他愛ない話で暮れる雨の日だ
お月さま明日も丸でいてほしい
ふれあいで趣味も広がる友もでき
ふれあえる友がいるから明日がある

鳥取県　橋谷静江

桜にもデビューする春やって来た
検査受け素敵な老いを生きていく
春うらら足は自然に駆けていた
足腰を確かめている春の野良

鳥取県　飯野菖子

パスポート更新したが当てはない
去年より昼寝が少し長くなる
鬼門除けはがれて豆を撒いておく
つむじ風起して友は帰路につく

鳥取県　加賀田志延

流行を追えばおけらになる暮し
法律の枠をくぐった裏帳簿
鉛筆の芯を削って身構える
着飾って今日もいそいそ医者通い

鳥取県　大塚美代子

鳥取県　岩崎和子

不敵さと幼なさ残るバルト関
見るものが無いねと言ってゲゲゲ見る
龍馬伝激しさ若さ戸惑って
私が後期高齢嘘のよう

松江市　松浦登志子

我も食う西太后の食す物
春なのにパンジービオラミニのまま
車止めスロースローの婆二人
ジャンボより地方くじにて夢を買う

松江市　相見柳歩

ここで会うことも何かの縁ですね
はっきりと言ってしまえば君が好き
スプーンではすくいきれない夢を盛る
御仏のひかりにいつも触れている

松江市　錦織禮子

浮き浮きとドレスアップに興じてる
手古摺って悩みに悩む五七五
遠来の客と情けの花見酒
靴底の花弁過ぎし日よび醒ます

松江市　山根邦代

花の芽がふくらむ夢も脹らんで
春の風心動いて花の下
ぽかぽかに草木が呼んで回り道
四月馬鹿叔父の電話に乗っている

出雲市　川島和歌子

満開の花よりダンゴ皆が寄る
ふれ合いの顔が揃って一句練る
美容院一日だけの恵比寿顔
見えすいた言葉上手にくすぐられ

雲南市　武島ちよえ

自由でも独り暮らしは楽でない
ゆったりと包めば中身踊り出し
その歳に見えませんよに嬉しがり
明日のため話の種を残しとく

安来市　原煩悩児

流されてなるものかよと独居爺
春近し老いの炬燵が熱過ぎる
認知症の妻を八十路の惚れ直す
八十路来てなお行く道を右顧左眄

竹原市　六田半徳

米国から核廃絶へまず一歩
普天間も総理の道もいばら道
政権の浮沈決めるか五・七月
温暖化鎮めるように雨は降る

竹原市　土井輝恵

防護服着たい苦手な人の前
賽銭箱痩せて不況の風が吹く
テレビ画面広島弁がおもしろい
散るサクラランコ少し乗って見る

川柳のひよこ何時まで殻の中
止まない雨ないが不況はいつまでも
政権は変れど政治変らない
親切な言葉の裏に棘が見え

宇部市　高山清子

散り方を桜も思案してるだろ
花道はないが六方踏む構え
３６５掛ける８０とは長い
にんまりと酒の呪縛を受け入れる

香南市　桑名孝雄

有り難う素直に言えぬ反抗期
苦があれば楽もあるよと老夫婦
仲なおりしたけど距離をおいている
今日もまた充実してたボランティア

北九州市　小松紀子

飲む酒で料理の味をひきしめる
初蝶の早くももつれ合いてとぶ
待ってても来なくなったよあれっきり
する事は先にと互いそれとなく

唐津市　岩崎實

免許証がまだ本人と証明し
おそ過ぎた少子化に鳴る警報機
リストラで職なし金なし居場所なし
気をもます便りもくれぬ脛かじり

唐津市　吉冨節子

俺は俺政府は政府好きにする
世界一総理の数は誇れない
凶作が何年続く永田町
こんなのを選んだ奴も罪つくり

シドニー　三谷たん吉

見る阿呆そのかたまりの中でよい
母の振る手皇后様とは違う
ジベタリアン哲学風の貌を置き
ブランコの少年何か蹴っている

網走市　角谷幸甚

不揃いのリンゴ悲しい叩き売り
様ざまな靴に玄関華やいで
わだかまり解けて息子とコップ酒
不景気な春へ果敢に娘の仕事

札幌市　佐藤登美子

夜遊びがやっと終わるよ新学期
反抗期親の理不尽許せない
反抗期過ぎて大人が一人増え
知らぬ間に路線が増えて地下迷う

東京都　髙岡弥生

賞味期限眼中に無し戦中派
独り住む家の庭にも桜咲く
一歩でも前に進めば良しとする
四股名でも顔でも日本人かと思い

東京都　井上つよし

お彼岸の墓はおしゃべり好きになり　昭島市　野口　忠

全山がお酔いになっている吉野

道の駅土地の香りが出迎える

妻が先ずさっと書き込む予定表　横浜市　巌田　かず枝

呆れてる諦めているマニフェスト

友からのいかなご春を告げに来た

日本を治す薬はありますか

高級品よりもキャベツの値を下げて　栃木県　岡野　すみれ

丸呑みの愛は蕾のままで散る

一つ咲き一つ散りゆく花の知恵

長生きの願望美食より粗食

春嵐黄砂みやげに吹きまくり

第29年度 夜市川柳ご案内

回	兼題	選者	締切
1	気迫	三島 淞丘	6月末
2	見た目	荻野 浩子	7月末
3	挑む	鈴木 公弘	8月末
4	ポイント	小寺竜之介	9月末
5	すみません	三宅 保州	10月末
6	匂い	金築 雨学	11月末
7	稼ぐ	福本 英子	12月末
8	馴染	大森 一甲	1月末
9	出会い	西口いわゑ	2月末
10	狙い	天根 夢草	3月末
11	張る	大野 風柳	4月末
12	弁当	小島 蘭幸	5月20日

第14回 全日本川柳誌上大会 （太字は本社同人）

平成柳多留賞

木の葉っぱ札束にする里の智恵　茨城　野口きぬえ

川柳大賞

爆弾に化けるでないぞ消費税　大阪　**徳山みつこ**

NHK会長賞

オンリーワンの技で生き抜く町工場　徳島　野村　敏子

日本青少年育成協会会長賞

次世代へ地球丸ごと洗いたい　静岡　江川ふみ子

全日本川柳協会会長賞

青年の汗が弾けるトマト買う　熊本　中川めぐむ

全日本川柳誌上大会賞

遺伝子の箍から出たい蛙の子　東京　五十嵐淳隆

体温の無いロボットに抱っこされ　千葉　和田　寿一

ロボットに介護委せて説く福祉　大阪　西澤　司郎

ラブレターお伽話になる世代　北海道　片貝　宏子

儲かると冒険心が歩き出す　東京　**清原　悦子**

秀句

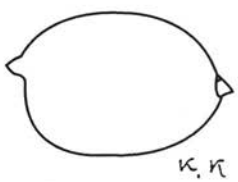
ロボットの背中に明日の夢がある　東京　**清原　悦子**

次世代が気軽に羽織る宇宙服　東京　**播本　充子**

共選欄 檸檬抄

（薫風書、カットとも）

（投句　七四八句）



「巻く」　三宅保州選

多読多作一千号へねじを巻く　松江市　小川　注湖
竜巻の予報どうすりゃいいのです　三田市　堀　正和
寿司を巻く余計な事は考えず　府中市　藤岡ヒデコ
また母の手巻きの寿司が細くなる　豊中市　水野　黒兎
巻き寿司は亡母の太さだ具沢山　大阪市　近藤　正
団欒の真ん中にある手巻きずし　田辺市　岡本　昇
言うことを聞かぬホースの巻取機　和歌山市　福本　英子
すり傷に包帯巻けと言い張る子　大阪市　伏見　雅明
淋しくてくだを巻いてるだけなのに　鳥取市　福西　茶子
やっぱりをべたべた貼った巻き戻し　松山市　高橋　宏臣
巻き戻す記憶は都合よく変わる　大阪市　森田　明子
鬼籍から巻き戻したい人がいる　西宮市　泉水　冴子
巻き戻すテープに明日が見えて来ぬ　大洲市　花岡　順子
巻き戻しすれば舅も姑も居る　寝屋川市　平松かすみ
一枚の写真あの日に巻き戻す　大阪市　原田すみ子

「巻く」　高田美代子選

多読多作一千号へねじを巻く　松江市　小川　注湖
取り巻きのせいで落選してしまい　佐渡市　高野　不二
政治家の狂ったネジを誰が巻く　吹田市　太田　昭
馬耳東風とぐろ巻いてる幹事長　唐津市　井上　勝視
とぐろ巻く蛇はチャンスをじっと待つ　弘前市　高橋　岳水
五線譜を巻き戻してる愛のうた　京都市　坪井　孝一
巻き戻す昭和ふわっと躍り出る　生駒市　飛永ふりこ
巻き戻し出来たらよいねこの頭　河内長野市　植村　喜代
毛糸玉ふたりで巻いた日だまりよ　尼崎市　春城　年代
腕貸して母と一緒に巻いた糸　寝屋川市　太田とし子
巻き戻す記憶は都合よく変わる　大阪市　森田　明子
巻きかたが下手で幼い春キャベツ　和歌山市　坂部紀久子
さあやるぞ一日分のネジを巻く　京都市　清水　英旺
菰を巻かれて横綱らしき松となり　尼崎市　藤岡　りこ
龍頭巻く亡父の恩賜の銀時計　岐阜市　平野あずま

巻き戻しばかりしているひとりの夜
改札口から巻戻してみよう
糸巻き巻き幼い頃は早かった
長いものに巻かれてからの不整脈
長いものに巻かれ窒息してしまう
長い物に巻かれ学習しています
巻き物をほどけば武者がくしゃみする
私で終る家系図巻き納め
左巻きネジもときどきあるこの世
息巻いて退くに退かれぬ鼻柱
お日さまを巻いた毛糸で編みなおす
糸巻けば御先祖さまに会えるかも
首にじゃらじゃら淋しいんだねきっと
側にいるだけで騒ぎに巻き込まれ
本気らしいから巻き込まれてあげる
包帯も訓練だから笑い合い
可能性いっぱい秘めている巻き毛
春風にカールの髪を妬まれる
注連巻いて杜の大樹は神となる
よいとまけ知らぬトンボが天を衝く
首巻きと言う日本語が通じない
巻き過ぎた捻子が軋んだ不整脈
捻子巻いて腰が動かぬのに気付く

鳥取市　高浜　勇
大阪市　谷口　義
河内長野市　植村　喜代
吹田市　穴吹　尚士
大洲市　中居　善信
河内長野市　山岡冨美子
明石市　糀谷　和郎
西宮市　亀岡　哲子
寝屋川市　籠島　恵子
豊橋市　藤田　千休
神戸市　早川　孝子
羽曳野市　福田　悦子
橿原市　安土　理恵
和歌山市　喜田　准一
堺　市　内藤　憲彦
静岡県　薗田　獏沓
尼崎市　長浜　美籠
京都市　三宅　満子
大洲市　津村志華子
豊中市　江見　見清
八尾市　髙杉　千歩
和歌山市　坂部紀久子
鳥取県　竹信　照彦

命賭けてゲートル巻いた父の駅
渋滞に巻き込まれても帰る里
夫婦してネジを巻いたり緩めたり
幸せを巻き込む技術持っている
巻き戻しするたび過去が重くなる
老いの螺子遊び心も入れて巻く
無口だが酔うとくだ巻く癖がある
満天の星と一夜の巻き蒲団
ノラ猫に聞く世渡りの虎の巻
心機一転そろりと錨巻き上げる
巻き戻すりんごの歌に突き当たる
本気らしいから巻き込まれてあげる
巻き貝になりたい覗いてもみたい
改札口から巻き戻してみよう
ゼンマイを巻いて記憶が動きだす
取巻きの声に台詞がまとまらぬ
夕焼けがきれい包帯巻き直す
透きとおるまで巻く紙芝居のあめ
消えた夢都会はやはり絵巻き物
人生は短し花の絵巻物
卒業証書巻いて働くとこがない
感謝状巻いて仕舞ってそれっきり
ネジ巻いて活を入れてるどっこいしょ

鳥取市　土橋　睦子
京都市　桝本　宏子
和歌山市　坂部かずみ
今治市　渡邊伊津志
大和高田市　鍛原　千里
河内長野市　山岡冨美子
東大阪市　佐々木満作
八尾市　宮西　弥生
八尾市　赤木　妙子
西宮市　牧渕富喜子
京都府　松本としこ
堺　市　内藤　憲彦
和歌山市　福本　英子
大阪市　谷口　義
紀の川市　辻内　次根
高槻市　富田　美義
鳥取市　倉益　一瑶
藤井寺市　鴨谷瑠美子
大阪市　鶴田　遠野
堺　市　加島　由一
大阪市　川端　一歩
札幌市　三浦　強一
大洲市　花岡　順子

うず二つ巻いてるけれど唯の人　大阪市　川端　一歩
感謝状巻いて仕舞ってそれっきり　札幌市　三浦　強一
Rの字上手に舌が巻けません　豊中市　松尾美智代
巻き過ぎたネジが時々ショートする　和歌山市　古久保和子
もう少し良くなるはずとネジを巻く　池田市　上山　堅坊
右巻きに生き方変えた私小説　和歌山市　坂部かずみ
諦める歳じゃないよとネジを巻く　大阪市　萩原　大朔
さあやるぞ一日分のネジを巻く　京都市　清水　英旺
ネジ巻いてまだまだ生きていくつもり　芦屋市　黒田　能子
ロボットは自分で捻子を巻いている　藤井寺市　太田扶美代
おい誰か日本のねじを巻いてくれ　大阪市　井丸　昌紀
遊ぶ日は捻子をいっぱい巻いて出る　米子市　政岡未延子
少しずつ大事に老いを巻いてゆく　鳥取市　土橋　螢
桐箱から候ぶみが目を覚ます　和歌山市　松原　寿子
幸せを巻き取っているネガとポジ　大阪市　岩崎　公誠
パスタくるくる就活の成果など　八王子市　播本　充子
全集を積んで一巻読みあぐね　枚方市　丹後屋　肇
巻き返しするには足りぬコラーゲン　和歌山市　武本　碧
巻きついた生命線にガーリック　西宮市　山本　義子

秀　句

哀しみをロールヘアーに閉じ込める　海南市　小谷　小雪
眠りたいアンモナイトを抱いたまま　豊中市　源田　啓生
にんげんをしあわせにするたまごやき　弘前市　髙瀬　霜石

巻こうにももうゼンマイに張りがない　泉佐野市　稲葉　洋
巻き戻し利かぬ初老の日向ぼこ　大和郡山市　坊農　柳弘
ネジ巻いてまだまだ生きていくつもり　芦屋市　黒田　能子
うず潮に芙美子の熱い想い見る　藤井寺市　鈴木いさお
巻き戻す歴史が熱い龍馬伝　香芝市　大内　朝子
長いものに巻かれ窒息してしまう　大洲市　中居　善信
巻き寿司は亡母の太さだ具沢山　大阪市　近藤　正
団欒の真ん中にある手巻きずし　田辺市　岡本　昇
まだ時価と書いてはいない鉄火巻　堺　市　大隅　克博
鉄火巻今の間に食べておく　羽曳野市　永田　章司
少しずつ大事に老いを巻いてゆく　鳥取市　土橋　螢
首にじゃらじゃら淋しいんだねきっと　橿原市　安土　理恵
凶器にも成るネクタイを首に巻く　唐津市　山口　高明
ユーモアのひとつ渦巻きパンがある　京都市　高島　啓子
人情と義理の渦から出られない　高槻市　片山かずお
巻き戻し出来ない今日を使い切る　大阪市　升成　好
持ちなれぬ金はしっかり腹に巻く　堺　市　遠山　唯教
渦を巻く天井と寝る二日酔い　紀の川市　宇野　幹子
側にいるだけで騒ぎに巻き込まれ　和歌山市　喜田　准一

秀　句

私で終る家系図巻き納め　西宮市　亀岡　哲子
巻き紙にあらあらかしこよく似合う　富田林市　古田　千華
もう追うな尻尾を巻いて逃げる犬　鳥取市　中宇地秀四

麻生路郎句抄

（句集『旅人とその後の作品』から）

不死鳥

色気ぬきを女将（おかみ）へうぼうしてかかり
意気張で貞女となったまでのこと
戯れに捕へた蟹もホテルまで
返事だけしといて雲をまだ見て居
俄雨ジョッキ一つで待つつもり
君・君・憂鬱を配ってあるくのは止せよ
どっちつかずの返事したのを悔ひはじめ
売上げのこれっぱかしに笑ってしまう
名古屋胴二号になって久しけれ

水の垢

藤の棚女中は親に会うところ
尊くもげすにも見せる乳房にて
食ふための仕事と見えず玉突屋
婦人記者こと面倒になると辞め
人の声に初手は内職持って逃げ
内職でお米屋だけは帰らせる
新しい後家はぶべつのなかに立ち
つりの多いことに気付いた歩きぶり
泊り客雨で枕をあてがはれ
人形になってゐろとは嫁へ無理
いひすぎた日は庭も掃き水も打ち
俺はもうあかんときめてかかるなり
資本家のための筆とはなり終わり
うれしさに盲は一つ踏みはずし

愛染帖

新家　完司　選

年金でモーリタニアの蛸を食う

香芝市　大内　朝子

（評）地球の裏側でひっそり暮らしていた蛸。日本の女性に食われ、川柳のネタにされるなど、夢にも思っていなかったであろう。

ノートには悪口ばかり書いてある

大阪市　神夏磯典子

（評）口には出せない憤懣をノートに書きつけて、こころの中を掃除する。波風を立てない賢い解決法。見習いたいものである。

お若いと言われた世辞は真に受ける

西宮市　藤本　直

（評）世辞だとは分かっている。が、少しでも「若々しいなあ！」と思ってくれたから出た言葉だろう。素直に喜べば活力が湧く。

ときどきは非常階段掃除する

八王子市　播本　充子

（評）「治に居て乱を忘れず」というほど大袈裟なものではないが、いつお世話になるか分からない非常階段、粗末にしてはいけない。

世の中へなにしに来たか考える

高槻市　乙倉　武史

（評）パチンコをしに来たのではないだろう。アクビをしに来たのでもない。それを考えると、一句でも名作を遺したいと思う。

微笑をいただくための草団子

篠山市　沢山　啓子

（評）世の中へ何しに来たか分からなくても、草団子を差し上げて微笑んでいただけるだけでも、この世に来た甲斐があるのではないか。

昔切腹いまはお辞儀ですむお詫び

鳥取県　石谷美恵子

（評）「申し訳ございません」と一斉に頭を下げるお詫び会見。これで済んだと思うせいか、性懲りもなく次々。まったくなさけない。

過去帳の通り庶民の系譜です

三田市　北野　哲男

（評）やんごとなき血筋でもなく、英雄豪傑も出ていない、正真正銘の庶民であることは過去帳を見れば明白。気楽なものである。

万策が尽きたタンゴを踊ろうか

篠山市　酒井　真由

（評）頭を抱えていても活路は見出せない。ならば、軽快なメロディーに乗って心身ともにリラックス。快活であれば何とかなる。

ボツばかり拾い集めて投句する

奈良市　岩本　浩一

（評）精魂込めた作品。一人の選者から没にされたぐらいで諦めてはいけない。ほとんどは独りよがりであろうが、稀には佳作がある。

京都府　松本としこ

会話なき夫婦に電話鳴りひびく
爪を切るときしか見ない足の裏
化けられる間は人の輪の中に

尼崎市　春城　年代

ざわざわと世間が動く春動く
春帽子いまの私に面映ゆい
終着駅はおひとり様の花ざかり

奈良市　辻内げんえい

孫の声疲れたときのパワー源
湯加減を訊かれた昔懐かしい
信号の向こうの人はみな若い
東京の天気予報も聞いておく

大阪市　谷口　義

橿原市　安土　理恵

いっせいに咲くしかないのかいサクラ
花見通りでちりめん山椒つまみ食い
自動車の空気を入れた事はない
戦争の話はみんな聞き飽きた

美作市　小林　妻子

鳥取市　吉田　弘子

チベットでない四季薫る湯の町だ
たっぷりの時間に多い忘れ物
好き好きの色で伸び伸びする新芽
蓮根の地上に続く空気孔

池田市　上山　堅坊

ひとり住む母の庭にも八重桜
奈良県　渡辺　富子

あかさたな追って名前を思い出す
羽曳野市　吉川　寿美

針の穴に弄ばれる小半時
クロマグロどうあろうとも縁がない
海南市　三宅　保州

頂点に立つと錯覚してしまう
二着なら安かっただけベアルック
寝屋川市　森　茜

昼下がりさながらシニア専用車
からかった烏頭上すれすれに
豊中市　松尾美智代

腰低く生きて摩擦を避けている
さくら色のセーターを着るうれしい日
鳥取市　土橋　螢

就職の孫には鯛の頭つき
人間は悩む哺乳類である
和歌山市　木本　朱夏

フリーダイヤルで春の息吹をお取り寄せ
鯉のぼり減って日本のさむい明日
弘前市　髙瀬　霜石

菓子折りを貰うろくでもない話
どうしても詐欺師に見える標準語
西宮市　緒方美津子

桜満開面目躍如無人駅
国技やというから余計愚痴がでる
八尾市　髙杉　千歩

私より上か下かと歳を聞き
写メールで孫と絆を確かめる
大阪市　柴本ばっは

セクシーな小声はとても困ります
わたくしを助けてくれている眼鏡
橿原市　居谷真理子

割り箸のランクを下げて生き残る
溜息は読点決して諦めぬ
鳥取県　斉尾くにこ

忘れたい狂ったように騒ぎたい
愛ですか意地悪ですかムチの数
高槻市　富田　美義

通り雨ほどの不運もかわせない
神戸市　田中　章子

整理べたわたしもゴミの中に住む
和歌山市　喜田　准一

人柄に甘さがあって人が寄る
大阪市　古今堂蕉子

太陽の下で聞いてる艶話
大阪市　井丸　昌紀

空色で空を塗らない人が好き
和歌山市　武本　碧

雑学がブレンドされたテレビ脳
三田市　堀　正和

男にもてる男がほんまもん
鳥取市　有沢せつ子

挨拶で売り込み電話だとわかり
四条畷市　吉岡　修

留守電に言いにくいことみな話す
米子市　後藤美恵子

春彼岸黄砂まみれの夫の墓
青森県　松山　芳生

僕ばかりじっと見ている裸婦の像
堺　市　山本　半銭

迷い子になりそうしずかに本を読む
吹田市　穴吹　尚士

道端に我が家に欲しい粗大ゴミ
和歌山市　根田よしこ

カラオケが好きな人とは飲みません
八尾市　前田　紀雄

入選句いつも尻尾を巻いてます
倉吉市　松本よしえ

カーブする車が今日も畑踏む
河内長野市　坂上　淳司

渋ちんとちゃいます金が無いのです
松江市　松浦登志子

ふんふんとぷんぷんえらい違いです
大阪市　坂　裕之

結構な人ほどぼやく暮らし向き
西宮市　泉水　冴子

句のネタを時どき拾うコラム欄
東大阪市　西田いくひろ

情報を生かしきれないまま老いる
米子市　白根　ふみ

声がかかるとすぐに食事の輪のひとり

鳥取県　細田　裕花
坊様は教えを乞うと機嫌良い

神戸市　山口　光久
いい酒はいい血をつくる目刺焼く

栃木県　岡野すみれ
買わなけりゃすぐ死ぬようなコマーシャル

大阪市　吉内タカ子
フルムーンまた行きたくて介護する

豊中市　水野　黒兎
猫を抱くただそれだけで春うらら

京都市　高島　啓子
新聞は折り目正しくやってくる

松江市　三島　淞丘
じゃんけんで決める程度の遺産分け

和歌山市　古久保和子
先客のほんのり温いお座布団

唐津市　仁部　四郎
初物の枝豆が待ついい湯だナ

藤井寺市　太田扶美代
釘煮もらって新キャベツ差し上げる

八尾市　吉村　一風
むかし人間君が代鳴るとしゃんとする

大阪市　笠嶋　恵美
スイーツの誘惑こわい午後三時

藤井寺市　鈴木いさお
本当の自分は妻にしか見せぬ

鳥取県　西谷　悦子
二人三脚紐がときどきからみつく

京都市　坪井　孝一
言い訳はすぐ作り出す悪い知恵

和歌山県　森下よりこ
無人駅からさくら吹雪に見送られ

京都市　都倉　求芽
凛と咲く桜に寝みだれるさくら

藤井寺市　若松　雅枝
満開の桜は天の贈物

神戸市　山崎　武彦
花筏村が消えるという噂

京都市　三宅　満子
予報士の言うこと聞いて咲く桜

奈良市　矢野　良一
出不精もじっとさせない春陽気

鳥取市　坂本なつみ
荒れた手を病母に見せず介護する

大阪市　小谷　集一
ライバルがいたから今の僕がある

豊中市　安藤寿美子
折りたたみより杖になる傘にする

東京都　岸野あやめ
回れ右出来ぬわたしもゴキブリも

茨木市　藤井　正雄
今にして思えば友の痩せた顔

藤井寺市　鴨谷瑠美子
本当はピアノがうまい調律師

大阪市　萩原　大朔
謎だから明日の来るのが面白い

シドニー　坂上のり子
寝直している間にカッと陽が昇る

豊中市　荒巻　夢
逝きし子へ身もだえをして春浅し

鳥取市　土橋はるお
憲法をむやみ矢鱈にこねくるな

堺　市　村上　玄也
女房の差し金孫に意見され

海南市　堂上　泰女
鈍感力に一際優れてる夫

枚方市　伊達　郁夫
小遣いは妻のヘソクリから出てる

大阪市　大川　桃花
信号は前より横を見て渡る

唐津市　井上　勝視
世に学ぶ事ばかりなり卒寿坂

大阪府　小栢　幹子
免疫が出来ていざこざ聞き流す

唐津市　坂本　蜂朗
髪を撫で付けてそわそわ趣味の会

寝屋川市　冨山ルイ子
針を持つ心優しくなってくる

枚方市　海老池　洋
怖そうな犬と散歩をする美人

八尾市　中島　春江
神仏を拝んでいても愚痴ばかり

鳥取市　倉益　一瑤
投書欄わたしも同じ傷を持つ

堺　市　遠山　唯教
前向きのスタンス変えず突っ走る
藤井寺市　俣野登志子
人波を掻き分け戎橋デート
羽曳野市　吉村久仁雄
酒飲めばみんな社長でみな首相
東京都　清原　悦子
善悪を絵本の中で学んだ日
羽曳野市　森下　一知
ゆるキャラが先頭に立つ町おこし
鳥取市　岸本　孝子
金かねと言うから金が逃げていく
大阪府　籾山　隆盛
中流の舟が時化には弱かった
唐津市　市丸　晴翠
晴天の洗濯物に降る黄砂
堺　市　羽田野洋介
ちょっとだけ水増しをするいい話
八尾市　村上ミツ子
修正のきかない顔で生きている
和泉市　横山　捷也
髪を梳く事しか出来ず母見舞う
日高市　根岸　方子
急病のおかげ禁煙できました
大阪市　伏見　雅明
核兵器作り平和を叫ぶ国
鳥取市　岸本　宏章
途上国が持てば危険な核兵器

芦屋市　黒田　能子
三時にはおやつの欲しくなる夫婦
豊中市　藤井　則彦
新聞を逆めくりして呆け防止
西脇市　七反田順子
貧乏性餅を焼くのが上手です
富田林市　大橋　鐘造
血圧を美人ナースが上げに来る
高槻市　安田　忠子
春らんまんフォーゲルパーク花と鳥
鳥取市　近藤　秋星
白鳥も冬将軍も北へ発つ
枚方市　小林　わこ
開運のお守り一つボロボロに
河内長野市　梶原　弘光
カンカラと外湯を巡る下駄の音
堺　市　西村りつえ
余生だなひねもすふわりふわり生き
大阪市　田浦　實
相槌を期待してつい愚痴こぼす
鳥取市　福西　茶子
口三味線奏でひとりの誕生日
唐津市　樋口　輝夫
会費負けせぬ飲みざまで酔いつぶれ
三田市　上垣キヨミ
折角の休みに姑が訪ね来る
松江市　相見　柳歩
自動ドアこどもたちには不思議ドア

東かがわ市　木村あきら
早明浦の水を頼りの米作り
高知市　小川てるみ
病室の孤独を老母は口にせず
岸和田市　中岡　香代
看護婦が手に書くメモの忙しさ
坂出市　綾井　嘉彦
老人にやさしいパソコンできないの
八尾市　宮崎シマ子
犬も猫も大好き人間だけ嫌い
鳥取市　田村　邦昭
三食をどんぶりばかり妻不在
奈良市　尾畑なを江
枯れているそれは表面だけのこと
大阪市　福岡　末吉
妻の技鮮やか茄子の茶筅切り
熊本県　高野　宵草
無知なれど故郷離れず暮らす幸
和歌山市　磯部　義雄
容赦せぬ麻薬処刑のお国柄
鳥取県　岡本　幸枝
改めて侘しさつのる一周忌
寝屋川市　岡本　勲
ペットブームの影に虐待子供の死
岸和田市　森元ふみよ
年重ね卒業出来ぬ色の道
河内長野市　松岡　篤
ボンカレー古看板でひっそりと

誹風柳多留一一篇研究 58

小栗清吾・伊吹和男
山田昭夫・増田忠彦
山口由昭
清　博美

439　**おめへさんお聞なんしと祭前**

小栗　今一つはっきりしない句。「祭前」は、

　借金をいさぎよくする祭まへ　三5

と同じく、天下祭の準備をいうのであろう。亭主が衣装代などに夢中で散財してしまうので、女房が「お前さん、まあちょっとお聞きなさい」と諫めている光景と思う。ただ、「お聞きなんし」とアリンス言葉になっているのが、どういう効果を狙ったのかよくわからない。遊女上がりを女房に持つような勇み肌の男を彷彿とさせるということか。

　おみさまの聞あきをする祭前　初33

伊吹　遊女上がりの女房賛。

増田　賛。「……なんし」は一般の女は言わないか。

山口　必ずしも遊女あがりでなくてもいいのでは……。「なんし」は右説のように一般でも使ったのではないか。また、「おめへさん」は亭主への呼びかけだけでなく、隣のおかみさんや友人への呼びかけととれば、亭主が準備など含めて入れ込んでいる様を愚痴っているともとれる。

清　「なんし」は遊女言葉と限定すべきではないか。市中の女が使ったという資料があれば話は別だが、句意は山口説のようなことであろう。

440　**ずんこうのすゞきやんとはんれいハ呼ヒ**

小栗　松江は、中国の松江。鱸を名物とした。（「日」）

　呉との戦に敗れた越王勾践が姑蘇城に捕らわれていたとき、家臣范蠡が魚商人を装って近づき、魚の腹に密書を入れて獄中に投げ込んだという故事（『太平記』巻第四備後三郎高徳が言付けたり呉・越軍の事）を詠んだ句。范蠡が魚商人を装ったからには、「松江の鱸やあーん」と、有名な鱸を呼び声にしただろうと。

　はんれいハはつかしそうに魚を呼ヒ　宝13宮3

　半平と名をかへさかなうつて来る　二06

清　賛。

441　**ほれたやつ間かなすきかなおとつれる**

小栗　間がなすきがなは、ひまさえあればいつも。ひっきりなしに。（「日」）

　惚れた奴は、ひっきりなしに相手のところへ訪れるというだけの句と思う。「まあ、ご苦労なこった」というようなニュアンスかと思うが、「末摘花」に採られるほどの句であろうか。

　ほれたやつ飯時分には帰る也　二37

伊吹　賛。恋句。

増田　賛。青楼句としてもよいか。

清　青楼句にはならぬと思う。

442　**らく天ハくがちを来るとはりま切**

小栗　白楽天が、日本の知恵を量れとの君命を受けて筑紫の海に到着したとき、住吉明神の化身である漁師と問答（詩と和歌の応酬）をし、ついには神風によって唐へ吹き返されてしまったという伝説（謡曲『白楽天』）を題材にした句。白楽天は筑紫の海で吹き返されてしまったが、もし陸路をやって来たとしても、住吉明神の在す摂津国の手前の播磨国までしか来られなかっただろうという意。

日本の土ハふませぬ和哥の神　七四22

清　賛。

443　**仲町にのゝ字を入レて三年セ住**

小栗　「仲町」は深川、「の」の字を入れた「仲の町」は吉原のこと。

いわゆる「けいどう」によって捕まった岡場所の遊女が、吉原へ引き渡され「奴女郎」として、三年間勤めさせられたことを詠んだ句。

江南の花北国へ三年うへ　三〇17

美なる罪人鳥篭へ三とせ入れ　三三4

清　賛。

444　**座頭金たいこをくれるすまぬ事**

小栗　座頭金は、座頭が貸す金。不当な高利で武家その他一般に金を貸した。（『江』）

「太鼓を」とあるが、万句合は「たいこへ」（安二義1）とあるので、そういう意味としておく。

句意は、吉原での放蕩のあげく、座頭金を借りるほどに資金逼迫してしまった。その高利の座頭金を太鼓持ちに呉れてやるのは、まことに申し訳ないことだということ。

伊吹　賛。

大三十日手をくんで居るすまぬ事　二22

の「すまぬ事」を「誠に申し訳ないことである」と、小生の礎稿で書きました時、小栗氏から「すまぬ」にはいろんな意味があると、ご指摘がありました。両句とも申し訳ないでもいいけれど、不甲斐ない、気に食わぬ、といった意味の方が良いように思います。

増田　賛。いまだに吉原で太鼓をあげている。

清　賛。

445　**美しい後家方丈のしつに入**

小栗　美しい後家が方丈（住職）の部屋へ入っていく。さて怪しからぬというだけの句だが、謡曲『東北』の文句取りが手柄。

『東北』には、「こゝこそ花の台に和泉式部が臥所よとて、方丈の室に入ると見えし夢はさめにけり、見し夢はさめて失せにけり」とある。

清　賛。

446　**風呂しきをとくと深川早かわり**

小栗　深川の呼び出し女郎の風俗を詠んだ句のようである。

佐藤要人『江戸深川遊里志』に、「呼び出しの女郎は、仕懸文庫持参で茶屋に出る風習がある。仕懸とはこの土地の方言で衣装のこと、文庫とはそれを入れる小さな長持である。女は道中着で来て、茶屋に入ると座敷着に着換えた」とある。主題句はこれを詠んだもので、呼び出し女郎が風呂敷に包んだ仕懸文庫から座敷着を出して手早く着換えるのは、芝居でいう「早変わり」のようだということ。

よび出しハ入レ替程につゝんで来　明二梅2

清　賛。

借りる

米田　恭昌選

間借りでも幸せだった四畳半　満子
母親にお金は借りるよりもらう　圭一郎
低金利タンスに間借りする資金　千華
借りて来た涙で弔辞読んでいる　鐘造
孫の知恵借りてどんどん若くなる　舞夢
いつ誰に借りたか傘が増えている　キヨミ
借りるだけ借りてインフレ待つとする　浩二
子宝も国の借金背負わされ　遠野
借用書なしで知恵ならお貸しする　(奥)五月
アカペラで借りを返した披露宴　伊津志
借りること多くこの世に生かされる　彩子
借りてきた猫になってる通信簿　正雄
嬉しいな息子に知恵を借りるとは　光久
マンガ本借りてアイデア探し出す　公誠
借金嫌いタバコの火だけよく借りる　一風
お隣の桜を借りて花見酒　正和
携帯を借りて携帯捜し出す　遡行
借りたまま返せぬままの恩数多　俶子
いら立ちの勢い借りて磨く床　富子
この国に幸をもらった借りがある　のり子
胸のバラと肩書き借りる貴賓席　晴翠
借りに来た手土産だなとすぐわかる　(安)泰子
ばあちゃんのお知恵を借りる子の育ち　可住
頬杖を借りて明日を模索する　幹子
虎の威を借りる狐も生き上手　孔一
永年の貸し借り重ね老妻と棲む　勝視
おおかたの知恵は母から借りたもの　扶美代
万屋へ借りに行きたい同伴者　茶子
やんわりと借りた恩には利子がつく　勇
借りた恩返せぬままの父母の墓　碧
ご主人をお借りしますとどこへやら　としお
借りた金すぐに忘れる癖がある　好文
職退いてから借りものの猫となる　強一
糟糠の妻にあれこれ借りがある　淳司
親だからただで時間を借りられる　四郎
悪友の名前を借りる午前様　淞丘
盛会をお手を拝借してメめる　哲男
佳
菜の花に明るさ借りる過疎の里　黒兎
泣けるだけ泣けとおとこの広い胸　高明
暗闇を抜ける仏の灯を借りる　次根
借金もないが貯金もない歩幅　霜石
浅学のペンがゲーテの詩を借りる　充子
人
金借りる日の口髭を剃り落す　岳水
地
古里へ夜汽車で向う資金繰り　毅
天
兄弟子に借りを返した勝名のり　薗田獏沓
軸
路地裏に出世払いの借りがある

社　会

山中　康子選

学卒が飛び出す世界不況風　(岩)和子
経済が地球丸ごとかきまわす　恵美
降りるまで見れる車内の化粧劇　和郎
ケータイのルールに無知な社会人　政勝
ロボットが社会を変える時が来る　久美子
生き生きとサークル作る高齢者　堅坊
忍耐を仕込んでくれた縦社会　時雄
社会から切り離されて青テント　かずお
宇宙から琴の音届き春爛漫　(沢)啓子
今の世に生きていたらと彬の碑　愁女
待ち時間フルに私の紙芝居　銀波
少子化に子供手当が壁になる　唯教
消費税喋れば皆に爪はじき　章久
善人を見張るカメラのある社会　裕花
社会への貢献元気なうちにする　(岩)康子
新聞は三面記事で生きている　哲男
少子化に老々介護する覚悟　晴翠
ゲーム狂子供の未来駄目にする　一子
レギンスの上にスカートはいている　小雪
昭和ひと桁カード社会に馴染めない　いさお
ぢいちゃんの社会経験月遅れ　洋
億分の一の命を生かされて　栄呼

年寄りにやさしい社会所望する　ミツ子
三月と五月がせめぎうたえる　こずえ
社会部の記者が扱う「愛子さま」　四　郎
土台から社会傾く日本国　公　誠
社会裏美女も野獣も一緒くた　一　花
天災も人災もある人社会　照　彦
小さないのちにちいさな家族の手　芳　生
マニフェスト守れば国の大破算　日の出
永田町世間知らずが吠えている　充　子
たんぽぽのまんま社会の隅で咲く　茶　子
爪に火を点す暮らしを子は知らぬ　輝　夫
嗚呼悲し上流社会まだ知らぬ　一　粋
デイケアの妻は笑顔で帰宅する　花　匠
過疎の村病院行きのバス廃止　あやめ
社会科で学んで欲しい仁義礼　志華子
佳

有情無情日な日かげの風が吹く　俊　子
海が割れ騒然とする基地の島　滋　彦
明日の社会明るく咲かす種袋　彩　子
炊き出しという温い互助社会　岳　水
社会からぽっかり浮いている無職　朝　子
人

社会福祉の役員はボランティア　螢
地

選良と公僕誰のことだろう　霜　石
天

罪と罰脱いで社会は真人間　宮西弥生
軸

高齢の社会保障が身に沁みる

しずく

金子美千代選

点滴のいのちのノックしかと受け　隆　盛
敗けは敗け涙のしずく振り払う　大　朔
ひとしずく化粧崩さぬように泣く　明　子
振り切ったしずく心の雨上がり　次　根
しずく一滴はるかはるかの海目指す　彩　子
お開きに卑しい猪口のひとしずく　一　知
春雨にしずくの音も嬉しそう　正　彦
しずくほどの愛でもおんな甦る　朝　子
想い出のしずくを追って日向ぼこ　萌　子
湯上がりの孫のしずくを追いかける　洋　介
空洞へ言葉のしずく温める　栄　呼
肩のしずく今夜の事を語り出す　孝　一
点滴のしずくが酒であったなら　キヨミ
相傘のしずく惚れてる方に濡れ　正　雄
体制を大きく変えた一雫　光　久
男ごころゆする涙のひとしずく　俊　子
懺悔する月のしずくが痛すぎる　活　恵
氷柱からしたたり落ちる早春譜　岳　水
化粧水枯れないようにひとしずく　敏　子
蓮の葉のしずくにきらり仏さま　強　一
改心のきっかけ母のひとしずく　晴　翠
一滴の涙でいつも惑わされ　としお

未練など無いわと枕ぬらす夜　高　明
一滴の血でつきとめた白と黒　まみ子
ひとり住む母の涙を見てしまう　富　子
しぼってもうぼとりとも出ない知恵　修
聴診器命のしずく覗いてる　柳　弘
独居の身時のしずくを聞いている　孝　明
肩寄せて星のしずくに洗われる　碧
弥陀仏の慈悲のしずくに生かされる　松　丘
薄給に涙も落ちたろうに妻　堅　坊
石穿つしずく確かな自己主張　茂　代
鍾乳洞の雫に焦り諭される　みつこ
母の木を揺すれば愛がしずくする　菜　摘
恋の傷からポトポトと血のしずく　螢
偕老の甘さ渋さのひとしずく　黒　兎
ひとしずく愛を下さい飢餓の子へ　裕　花
佳

黒い染み跡痛恨のひとしずく　蜂　朗
奥山のしずく大河の夢を見る　慕　情
どの子にも愛のしずくは平等に　愁　女
幸運のしずくは両の手で受ける　霜　石
五線譜に落とすと踊りだすしずく　充　子
人

ファイトファイト活力剤を一しずく　順　子
地

点滴のしずくと花の散り際と　志華子
天

ありがとう一滴だけの潤滑油　北野哲男
軸

幸せのしずくポトポト零す愚痴

初歩教室

題 ― 飛ぶ

鈴木公弘

読者（誌友?）の方から、国語辞典には〔気持（ち）〕と書いてある、「気持ち」と添削しているが「気持」が一般的なのではないかという手紙をいただきました。確かに「気持ち」と書いてほしいと述べてきました。この問題は皆様も大いに興味あることかと察しますので、返書した結論だけ触れておきます。

私は「気持ち」派です。主たる理由は二つあります。一つは戦後の小学校ではそう教えていること、二つは「教科書に川柳を」推進運動が行われているかぎり教科書に従うべきであると思うこと、です。

送りがなを添削対象とするか否か…いつも悩むところですが、じっくりと読ませていただいて、句意が損なわれないと判断したときには教科書基準を採用したいと考えます。

さて、「とぶ」という言葉を漢字表記する場合、このたびの題にした「飛ぶ」のほか、跳ぶ、翔ぶなどがあります。その違いを確認していただければ幸いです。

今回、新しい方がかなり増えました。いっそう気持ちを引き締めてまいります。

【細心を求めたい句】

原 へそくりが飛ばしてくれた船の旅　健　柳
添 へそくりが飛ばしてくれた空の旅
原 子供達熟して伸びて飛んで行く　なつみ
添 子どもたち伸びて熟して飛んで行き
原 千の風が一緒に飛べとまだ言わぬ　振　作
千の風が…の「が」は不要です。
原 これしきの水溜まりからしぶき飛び　安　子
添 これしきの水溜りからしぶき飛び
原 花の風うつ飛んで行けよい気分　美紗子
添 花の風うつ飛ばされてよい気分
原 飛んでくる噂に刺が少し見え　千恵子
添 飛んでくる噂に刺が差してある

ズバリ言い切ったほうが強くなります。

原 機長さん後ろ向きでも飛ばせます　勇
添 機長です後ろ向いても飛ばせます

【再考してほしい句】

妻の留守チンの料理で飛ぶヒューズ　開　子

気の向くまま飛んでも妻の射程距離　紀　子

右の二句は、号から察して女性、しかも妻という立場の方であろうと思います。この場合、妻とは述べずに妻の側から描いてみてください。立場をはっきり見せてしまうと説明句になる危険性が高いです。

【準入選句】

張本人飛び散る汚職静めてる　文　代

「沈めてる」でもよかったかと思います。

餌やらずつき放したら飛ぶ小鳥　孝　代

親離れさせるコツの一つでしょうか。

鳩山の首が素っ飛ぶ普天間で　秋　星

自殺でしょうか他殺でしょうか。

スケートで二回転飛ぶああ嬉し　綾　乃

下五に気持ちが凝縮できました。

ドラ息子巣からさっさと飛びやがる　憲　彦

独立心が生まれたのですから喜びましょう。

飛び来たる花粉に悩むマスク嬢　節　子

美顔?も台無しですね。

高飛びかボス猫見えぬ世の静か　道　子

盛り込み過ぎて「決まった」という感じに読めません。一点に絞ってみてください。

飛び火する不安のマグマどう晴らす　志　郎

原因が読み取れれば、もっと良くなります。

せっかちですぐに飛び出す諭吉さん　光　弘

春は特にそのようです。

飛び切りの笑顔私の武器でした　宣　子

嘆きとも解釈できます。

真相はどうであったか川を飛ぶ　啓　子

川を飛んだ真相が知りたいですね。

花のみつむらがる蜂も飛び舞うて　ミヨノ

なんでも新鮮に勝るものはありません。

夢無限少年高く高く飛ぶ　菜　摘

よくある句になったのが残念です。

サクラ咲く知らせに孫と飛び跳ねる　唯　教

飛ぶに「跳ぶ」を重ね合わせた点に感激が染み出て、輝いています。

ええやんか飛んで飛んでと浮氣して　弘　泰

飛んで…のどちらかを「翔んで」にしてもよかったかと思います。「氣」は「気」がいいでしょう。

魔が差して甘い汁吸い飛んだ首　いさお

手の内をすべて見せた感じがします。事の推移を追わず、論点を絞ってください。

生きているうちはこころ飛んでいたい　玲　子

リズムのぎこちなさを心配します。

宇宙へと飛び立つ母の心意気　登美子

ここの母は、宇宙飛行士の山崎直子さんのことでしょうか。まさか昇天される母上の話ではないですよね。

桜散る吹けば飛ぶよな恋に落ち　律　子

結局、失恋したのですか。

春なのに離陸できない僕の脳　紀　雄

錆びつかせないように使ってください。

楽らくと自由に飛べるOBに　清

定年退職されたのですね。お疲れ様でした。

新社員飛び出す姿勢夢に向け　壽美子

夢みるうちが華です。

飛ぶまでのシミュレーションを繰り返す　くにこ

毛づくろい飛ぶ日のために欠かさない　陽　子

遠慮なさらず飛び発ってください。

飛行機の離陸時間は遠にすぎ　菜々子

「遠に」は「とうに」（副詞）と読ませようとされたものと判断しました。しかし、漢字表記するなら「疾うに」でなくてはなりません。趣旨採択して、ここに載せました。

【入選句】

飛びたいが義理が地面に吸い付ける　孔　一

蝶が飛び季節のページめくられる　滋　彦

上五を「飛ぶ蝶に」とすれば一文になり、リズムがよくなります。

エネルギー溜めて親元飛び立った　章　子

傘差して飛んで遊んだ里の川　敏　治

疑惑下で飛ぶ鳥落とす幹事長　篤

春爛漫啄み忙し鳥のみち　冷　子

飛ぶほどにメタボになっていく噂　美恵子

一息に飛べた岸辺は遠くなり　こずえ

好む風選びて飛ぶや毛タンポポ　俊　子

口語表現を心がけてください。

如才なく風船飛ばし向きを読む　正　彦

飛んで勝ち後味悪い相撲とる　宏　之

飛び散った桜シルクのカーペット　かずみ

ツイッターがぶつぶつと空を飛ぶ　堅　坊

「が」は不要だと思います。

強風に飛ばずにいてね花見まで　弥　生

不景気に空高く飛ぶアドバルン　久　子

紙飛行機飛ばし日航入社式　弘　子

真相の判らぬうちにデマが飛ぶ　ちづる

せっかちで話を飛ばす主語がない　恵　美

とびとびに夢に出てくる友の顔　智加恵

飛び入りがレギュラーの座を揺らしている　ふみ子

【佳句】

どうみても羽根の生えてる金ばかり　嘉　彦

日航機重い負債を乗せて飛ぶ　久美子

世界中デマが飛び交うウェブサイト　昭

したたかに飛び出た嘘がシッポ出す　エミ

おばあちゃん無料パス手に飛び回る　一　子

選挙カー走る前にはタマが飛ぶ　志　延

ブーメラン飛んで戻ってくる安堵　義　雄

矢田烏飛ぶいにしえの道を行く　治　子

しずく飛ぶ後ろ姿の割烹着　ヒ　ロ

飛ぶ鳥は下界の様子よく見てる　孝　明

青春は三遊間を抜けた恋　酒　坊

厚化粧塗れば塗るほど飛ぶ素顔　憲　司

シナリオを変えると飛べる水たまり　幹　子

飛ぶように売れていますと涙声　梶原　弘光

たんぽぽの穂絮とびたいほうへ飛ぶ　酒井　真由

【私の句】

真相が飛び出すことも通夜の席　藤井　宏造

UFOが飛んだ米ソの冷戦期

拳骨が飛ぶ父だった怖かった

（登載漏れの方は役員が添削して返却します）

秀句鑑賞

同人吟　太田扶美代
―5月号から

困った癖で、普段、本社句会などの選でもそうなのだけれど、制限句数の二倍・三倍をいただいてしまう。

無論、選ぶ時は心を空っぽにする様心がけている。そしていい句、好きな句を抜粋してその中から、何度も選び直してゆく方法。

時間的にも賢明なやり方ではないと思う。その替りという訳ではないが、選んで、外して、また選ぶ、じっくりと丁寧に一句、一句と向き合えたという気はしています。

結果として、女性の句に少し片寄ってしまった感があることを反省しています。

よい時間をいただきました事、感謝したいと思います。

風船の一つが高所恐怖症

高橋宏臣

一緒に大空へ放っても、木の枝か何かに引っかかり、飛べないものもある。

苗木に例えてみたり、人間に例えてみたりそこまで考えないほうが面白いかも知れない。面白い表現だと思った。

じゃれあって後の人生楽しもう

鴨谷瑠美子

人生を考えて見る時、節目のようなものが誰にでも何度かあるはず。ある時は前向きにある時は少し慎重に……。じゃれあって暮すのは大いに賛成、大いにプラス志向。

行ったり来たりしながら春も私も

古久保和子

三寒四温、春が暖かくなるのを思案しているように人間も悩みながら迷いながら生きている、さりげない句なのに「私」人間を入れた事で優しいやわらかな句になるものですね。

生きている事で誰かを助けてる

栗田久子

ひとり一人、意味も意義もあってこそ生きてゆけるのだと思いたいもの。

支え合い凭れ合い、例え病床に伏していても家族にとっては、居なくてはならない人で、逆に支えになってくれているのかも知れない。そうだとしたら、大切な命、最後のさいごの日まで大切にしなければ。

冷やなら二合それから先は数えない

安土理恵

肩の力を抜いて楽しんで書いて、いらっしゃるのが、こちらにも伝わってくる。

理恵さんとお酒が呑めたら楽しいだろうなあとさえ思わせる。

差し引いてみれば人生プラスだな

宮本かりん

ホント、ホント、さらっと書いてはあるが、奥は深く、人生を真剣に考えたことのある人のみが言える言葉でないでしょうか。

嬉しい事から、辛い事、困った事を、差し引く、そうしてもまだ残った命に感謝する、そういうふうな意味に解釈しました。

シングルライフ二十四色を使い分け

長浜美籠

二十四時間でなく二十四色としているところが、わたしを引きつけました。

時間を色にするだけで、こんなに華やかな句になるものなのですね。

物忘れもう真剣に悩まない

矢倉五月

物忘れはプロの域に達している私なのに、結構、呆れたり、悩んだり、また、あまりひどい時は落ち込んだりしています。

この句を見習って極力そのように致します。

対象外の歳です紛れこんでます

山田葉子

これは愉快、思わず吹き出しそうでした。気が付いたら自分より相当、若いグループに混じり込んでいた。仲良くしてくれるのをよいことに…。そんなような場面を体験した事があって、充分同感出来ました。可愛い、大人の女性を想像させてくれました。

あちこちが軋む紛れもなく加齢

高杉千歩

リズムの良さと、スパッと言い切っている潔さ、飾ってないところ、そして私の実感でもある。川柳らしく、学ぶべきところも多くあって思わずチェックいたしました。

四月馬鹿まんまと妻にしてやられ

伊勢田毅

仲のよいご夫婦が目に浮んでくるようで、何となく微笑ましくて、こういう明るい句は大好きです。してやられた、とは何があったのでしょうか。想像を膨らませております。

目的は完走だからマイペース

黒田能子

分っているつもりでも、ついついバタバタ。完走が目的なんて本当にいい言葉ですね。皆さんに、付いてゆき兼ねると思った時は、この句を思い出したいものです。

よっと手を挙げて迎えてくれた義父

久保田千代

よっと手を挙げてという表現は、お義父さまのそのままを、書かれたのでしょうが、余りにもリアルで、読む人の心を揺すります。臨終近き日の父を想い出しました。にこっと手を挙げて千代さんのお義父様のように、病室で迎えてくれたものでした。

桜見に行けただけでも御の字だ

谷口義

痛いところがあったり、病院生活をしていて、テレビぐらいでしか桜を見られない人もいる。何のかんのと言いつつ、桜見に行けたのだから結構なことである。そのままを書いておられるだけなのにメチャメチャ面白い。

エイトビートのリズムで春が戸を叩く
ジーパンがもう似合わない春なのに

木本朱夏

いつも垢ぬけたおしゃれな句を作られる。春の句を五句、連作してある中の二句。エイトビートとこの作者とがぴったり。ほら、やっぱりおしゃれで垢ぬけしている。

ジーパンの句もステキです。突拍子もない発想だと思うのだけれど、むつかしくなく、無理もなく、ちょっと恨めしげな表現がまた、川柳らしくていい。

お見舞の今日はやさしい花ぐもり

白根ふみ

花ぐもりというところに、見舞う人を案じる優しさを感じました。女性らしくそして、品のある句だと思いました。

神様が絡んで戦終わらない

伊藤寿美

本来なら神様に願って、終わらせて欲しい戦争なのに、神様が絡んでいては、収拾がつかないでしょうね。情ないけれど遠くから早く戦が終ってくれるよう祈るしかありません。

孫達の約束針を飲まされる

小寺花峯

お孫さんと何の約束をしたのでしょうか。私の想像では、多分何処かへ連れて行ってあげる約束だったかな、守れなかったので、孫さんに謝っている姿はとても絵になりますね。けれどもこれからはそんな恐い約束は止めましょう。孫さんも大きくなってゆく事ですし、もっと現実的な約束の方が喜ばれそうです。

目玉焼き片目で足りる朝ごはん

福士慕情

何と楽しい表現でしょう、言われてみれば目玉焼を一つ二つと数えていたのが間違い、片目、両目と言うべきでした。

秀句鑑賞

―水煙抄

―5月号から

小島笑司

嘘少し混ぜて人生泳いでる

針生和代

デマも交ぜおもろい話作りあげ

中岡香代

人間生活もベテランになれば柔軟性が身についておもろい人生が送れるようになるでしょう。私も創作落語を作っていますが、嘘とデマをブレンドして仕上げています。

寿限無寿限無言えます呆けてなどいない

三浦強一

高齢化は必然的に襲って来ますが、強一さんの老化防止は楽しいですね。

古稀過ぎて生活習慣変えられず

森下よりこ

お上から後期高齢者と言われようと、古来稀で無い？歳になろうと、習慣は簡単に変えられないのが普通です。また変える必要のない人生の貫録は尊いものです。

春なのに冬将軍がまいもどる

松本静子

今年は特に寒暖の繰り返しが長く、桜もさぞ困っていたと思います。気象庁も気性の激しい天の神の仕業だと言ったとか。

鶯も発声練習する陽気

宇都宮ちづる

春は気分が晴れやかになり、草木も萌えて鶯もカラオケの練習に余念がないのでしょうよ。心の和む句ですね。

沈む陽を山懐がイッキ飲み

野口忠

雄大な暮色が浮かんで来る素晴らしい情景です。イッキ飲みが凄いです。

満月が手からこぼれる露天風呂

竹山千賀子

旅の疲れがイッキに癒されるお湯の中で、月光の曲が流れて来そうな美麗句ですね。

ゴミ出しの日カラスにもあるスケジュール

平井露芳

ダイエット今日も拗ねてる腹の虫

竹村紀の治

博士号光り就職儘ならず

辻村洋子

生活に纏わる苦労を巧みに表現した逸句です。いや賛句です。

人生の惚け突っ込みの句読点

高木道子

出入りする呆けに挑戦する努力

小栢こずえ

人生の節目節目には多少の金属疲労が忍び寄って来ます。川柳はそれを修復する手段であると、心得られたお二人の句です。

そして余生を逞しく生き抜いて行く気概が感じられ頼もしい限りです。

残り時間生命線に聴いて見る

源田啓生

大正ロマンも色褪せて来た私ですが、啓生さんに倣ってジィッと手を見ようかしら。

もう一度虎が回れば百歳だ

小林妻子

その心意気に感服致しました。何時までも川柳と仲良くして下さいね。

孫たちが笑う漫才笑えない

根田よしこ

世代の違いは仕方のないもので、若い子の言葉は理解しにくいものが多いです。

でも川柳のお陰で語彙が広まって行くのは有難いです。

千号を夢見て切磋琢磨する

前田紀雄

今月の秀句鑑賞はこれが決まりです。

主幹・理事長の選任について

川 柳 塔 社

今年は主幹・理事長の改選年に当ります。

立候補者は下記の「主幹・理事長の選任に関する規則」に基づき期間内に事務所（06-6779-3490）へ申し出て下さい。

総 務 部

主幹・理事長の選任に関する規則

1　主幹・理事長を選任するための投票は、すべての代表役員・執行役員と相談役および参与によって行なう。ただし、会計監査は投票に参加せず、選挙を管理して投票結果を常任理事会に報告する。なお、主幹・理事長の選任に関する事務は総務部で担当する。

2　主幹・理事長を選任するための投票は２年ごとを原則とする。主幹・理事長の立候補がない場合は、現任者について第１項の投票権者による信任投票を行ない、投票総数の２分の１以上の信任を得なければならない。立候補者が１名だけの場合も同様とする。

3　主幹・理事長の立候補資格は、同人歴10年以上の者とし、立候補者の推薦は15名以上の同人によるものとする。

4　立候補の受付は、７月１日から10日までに必着とし、投票は７月中に所定の用紙によって行なう。

5　この規則は、平成18年４月１日から実施する。
この規則の改廃は、常任理事会の決定によらなければならない。

本社五月句会

五月七日（金）午後五時
アウィーナ大阪

雨も上がり、つつじもほっとした表情の夕べ、初出席五名を含む九十二名の出席で、五月句会が開催された。

最初に先日逝去された日川協今川乱魚会長、住谷石舟氏、久米奈良子さんに黙祷を捧げた。

今回のお話は理事の三宅保州氏。「川柳アラカルト」と題された。「川柳アラカルト」は、和歌山三幸川柳会の柳誌「七面」の巻頭言から抜粋された小冊子である。

『「にはをくずしての」にする』では

とびきりに笑顔で撮っておく遺影
とびきりの笑顔で撮っておく遺影

群集は一人ひとりに顔がない
群集の一人ひとりに顔がない　のように「・・は」は説明調に、「・・に」は限定調になるきらいがあり、「・・の」は用途によりけりですが、多面的な効果が期待されます。

『川柳の語録から』では、

☆上手になるにこしたことはないが、上手になることに拘りすぎてはいけない。

西尾　栞

☆軽い表現にしても中身のある句でなければならない。

小出　智子

☆いのちある句を創れ。

麻生　路郎

『問答のある句を』では、

斬新な意外性のある問答があると佳句が生まれやすいと言われており、現代風には「アイロニー」のある句とも言います。

はよいかな消えてしまうと火事見舞　豆秋
茹で卵きれいにむいてから落し　句沙弥

『名句とは』では、故西尾圭幹が「名句とは、有名な句で、後の世まで人口に膾炙される句である」と定義して麻生路郎師の「俺に似よ俺に似るなと子を思ひ」をあげられています。

まだまだ多くのページが残されたが、残念ながら時間切れとなった。まさに川柳のレシピとエキスを凝縮されたお話に、会場はしんと聞き入った。（ふりこ記）

月間賞は三宅保州氏（海南市）に輝く。

（司会―美籠・昭）（脇取―蕉子・賢子）
（受付―哲子・すみ子）（清記―光久・善純）

席題「拭く」　井伊　東吉選

柔らかく拭けば母の背ほんのりと　わこ
鯉のぼり五月の空を拭き清め　直樹
散らかした机拭かれては困る　見清
時効とて罪は拭える訳じゃない　正和
感謝込め卒業生が拭く机　黒兎
冷や汗を隠れて拭いた赤っ恥　茂
もう一度挑むチャンスへ靴を拭く　冨美子
ワイパーも怒る黄砂があまりにも　求芽
皺増えてこわごわ鏡拭いている　恭昌
婚活へ拭きとっている過去の染み　遠野
手洗いの拭き掃除して美人なり　蕉子
顔の汗拭いてのっぺらぼうになり　月子
どさくさに紛れ払拭する不安　則彦
位牌拭く亡母の背を拭くように　㊟千代
大空を拭くかに一と天に書く　黒兎
悩みとり払う笑顔を見せてくれ　天笑
拭くだけは拭いたが消せぬ恋の傷　弘風
愛犬の足を拭いてる雨の朝　忠昭
後悔の心を拭いている懺悔　朝子
足拭いてあがってこいと猫に言い　耕治
春愁を拭きとるように若葉風　みつ子
偏見のメガネを拭いて解けた謎　好
尻拭いいつも女房がして平和　玄也
めがね拭く綺麗なキミを見たいから　美代子
口紅を拭いてしまえば過去の人　集一
お立ち台汗も拭かずにたのもしく　舞夢
拭き清め今朝もお花をほとけ様　哲子
面接に挑む顔拭く二度三度　公誠
秘書に罪被せて口を拭う鳩　直樹
追伸に涙を拭いた跡がある　無限
八合目ひとまず僕は汗を拭く　ダン吉
だんじりの汗を拭き取る豆絞り　集一

佳

春風はどんな色かと窓を拭く　滋彦
この指に止った温味拭かずいる　弥生
幾度の涙を拭いた割烹着　美智代
真っ白になるまで拭いているこころ　希久子
地球儀を拭いて新たな木を植える　蕉子

人

拭くたびに世間みる目が肥えてくる　光久

地

うれし涙拭かず流れるままにする　楓楽

天

青い地球へ戻すワイパーありますか　富子

軸

拭き掃除させると育ち見えてくる

兼題「福の神」　堀　正和選

一度でも巡り会いたい福の神　庸佑
欲のない祖母はかわいい福の神　シマ子
よく笑う家に舞い込む福の神　好
山の神ほんとは福の神だった　いさお
福の神呼べば貧乏神が来る　時雄
朝一番に出会った人は福の神　希久子
新緑は自然がくれる福の神　美花
ダメトラにマートンが呼ぶ福の神　朋月
豆まきはしたに居つかぬ福の神　賢子
膨よかな嫁が来てから運が向き　満作
紅一点福の神だと崇められ　(志)千代
拾われてきたニャンと鳴く福の神　修
ご利益も御神酒次第の福の神　たもつ
幸せで福の神などつい忘れ　りこ
福の神の振りして詐欺師舌を出す　美智子
大きな福もらい内緒にしています　舞夢
十年目福の神来た子が出来た　二英
賽銭をはずめばいいの福の神　哲男
子の嫁はあげまんと言う福の神　昭
お金以外は叶えると言う福の神　扶美代
日向ぼこの縁側にきた福の神　則彦
晩婚に転がり込んだ残り福　茂
自販機の下を探せば福の神　ダン吉
福の神と思った僕が阿呆やった　れんげ
日本丸七福神が重そうや　求芽
ピンク着て少しあぶない福の神　唯教
福の神いるから今日も生きられる　義子
ウインクが逆効果かも福の神　ふり子
ひょっこりとポケットにいる福の神　實
福の神は納税者だと気付かない　美花
福の神は日本の九条だと思う　冨美子
福の神きっと気まぐれなんだろう

佳

健康です福の神様ありがとう　勝弘
釣銭で買った一枚二億円　公誠
落ちてないか捜しています福の神　蕉子
汗どっとかいて出会った福の神　ダン吉
よめさんを祭っていたら恙なし　勝弘

人

福の神の最たるものは諭吉さま　保州
福の神探しに妻は帰らない　昌紀

天

ようやっと嫁のお腹に福の神　理恵

軸

神棚もないのに待ってる福の神

兼題「頃」　米田　恭昌選

豆の花咲く頃偲ぶひとがいる　冨美子
今頃になって学んだのか総理　玄也
公約でないと今頃何を言う　一歩
野次ってた野党の頃は楽だった　保州
子ども手当なかった頃は子だくさん　昌紀
あの頃の無口な妻が好きでした　遠野
訳もなく夕陽に泣いた頃がある　扶美代
少年の頃が転がるラムネ玉　朋月
整形を今頃しても振り向かぬ　瑠美子
諦めた頃に顔出す探し物　好
近頃はリズミカルです夫婦独楽　光久
あの頃は徹夜看病ようしたな　月子
飲んでいる頃を狙ってくる電話　天笑
あの頃の回顧花咲くOB会　弘風
愛の鞭打たれた頃が懐しい　集一
ノーベル賞貰う夢さえあった頃　堅坊
ケイタイのなかった頃の糸電話　希久子
あの頃のわたしが生きる懐古談　(久)千代
親がいた頃感じなかったありがた味　楓楽
頃合に咳ひとつして席を立つ　能子

卒寿越え子どもの頃のかわいい日　隆彦
肩で風切ってた頃の顔じゃない　修
あの頃のあなたのままでいてほしい　集一
今頃になって言うからややこしい　義
いつ頃か諍う無駄を知る二人　すみ子
頃合いを計り反論開始する　准一
裏方の日頃の汗が虹になる　黒兎
子育てに泣いて笑った頃が華　美智代
五十銭少年倶楽部買った頃　正雄
古日記読みあの頃を懐かしむ　れんげ
二人ともスマートだった若い頃　一歩
あの頃に戻って母に甘えたい　いさお

佳

禁酒禁煙近頃僕はすぐキレる　弘一
お互いに手頃な恋で間に合わせ　尚士
頃は良し早ようぶぶ漬け出しなはれ　いさお
頃合いをきっちり掴む時の風　森子
踏んばれば踏んばり甲斐のあった頃　時雄

人

笛吹かれ踊った頃がなつかしい　滋彦

地

あの頃の曲で少女になる夜更け　昌紀

天

あの頃へプレイバックの神田川　富子

軸

さりげなく頃合いを見て出すテスト

兼題「パック」　水野　黒兎選

パックツァーあちこち行った若かった　房子
パックして脱いだ仮面の汚れ取る　雅明
顔パック心のケアはしてくれず　昌紀
あなたの愛のことば心にパックする　弘一
パックツァーのチラシに盛った蟹と酒　昭
土産物異国情緒もパックされ　りこ
プロポーズされた言葉をパック詰め　順子
パック売りの野菜に旬の顔が無い　俶子
景色より時間気になるパック旅　茂
くれたのはきれいな嘘のパック詰め　真理子
格安のパックツァーでダイエット　正和
筋論がもれるパックの歪みから　ダン吉
この辺で真空パックしたい歳　(久)千代
誰のためパックしているのか妻よ　いさお
沖縄に基地いつまでもパックする　尚士
鏡餅真空パック苦しそう　満作
合掌の手に包みこむ願一つ　隆彦
錯覚の美に投資して塗るパック　唯教
戦争をパックしたまま逝った父　隆彦
匂まですっぽり包むパック詰め　たもつ
ひとパックにされて私が消されてる　ダン吉
一本の藁にも縋る泥パック　朋月
パックから出されて野菜深呼吸　希久子
変身願望せめてパックで夢をみる　冨美子
初恋は真空パックしたまんま　俶子
詰合せ要らぬものまでついて来る　滋彦
苦い過去真空パックしています　光久
若い気を冷凍保存するパック　哲子
青テント独りをパックして暮れる　真理子
パックなどしない少女の健康美　集一
洗い物赴任地発のゆうパック　直樹
パックした愛が届いて狼狽える　美花

佳

個を包む嘱託というパック詰め　美義
言えなくて心の痛みパックする　れんげ
青空をパックしたいと児が願う　尚士
田舎から野菜と愚痴のパック便　和夫
パック重ねとうとう自分見失う　わこ

人

地球ごと美顔パックをしませんか　富子

地

活断層の上でパックをしています　義

天

美しい日本語パックしておこう　無限

軸

思い出を包み切れずにいる袱紗

兼題「無　理」　坊農　柳弘選

柱の穴くぐってみたい東大寺　茂
ほどほどの無理に挑戦する勇気　(志)千代
ほどほどの無理が老けない秘薬です　哲男
毎試合勝って下さいタイガース　見清
婚活はもう無理ですと言う鏡　富子
その無理も背中で抱いている父よ　森子
円周率割り切るまでは未だ死ねぬ　郁夫
無理じゃない鳶が鷹生むこともある　光久
無理むりと逃げて苦労を負わぬ主義　隆彦

無理言われ逆にファイトが湧いてくる　東吉
あの頃に戻してと妻無理を言う　恭昌
これ以上とても無理だと整形医　俶子
ばれぬようセレブ気分で参ります　温子
あのドレス私のサイズありますか　茂
体裁をつくろうために又も無理　理恵
無理をせず生きております無位無官　美籠
辻褄を合わすに少し無理がある　(久)千代
無理してもなんとかしたいあなたには　求芽
美しく若く撮ってねハイチーズ　朝子
氏素性言われそうなら無理しない　修
もう無理だこの際二人辞めるべき　勝弘
基地のことほんと無理ですオバマさん　ダン吉
美しく老いたいなんてご無体な　冨美子
札束を枕に昼寝してみたい　集一
黄信号止まれば行けとクラクション　隆彦
いつも無理言える友だち一人いる　一歩
ちょっと無理言ってあなたの愛試す　楓楽
青汁を今朝も無理矢理飲まされる　尚士
別嬪さんの無理は何でも聞いてやる　いさお
無理したんちがうか赤い薔薇届く　瑠美子
棒グラフ命削ったあとがある　美籠
ファスナーに笑われている試着室　昌紀

佳

つらければ無理せず泣いていいんだよ　賢子
無理難題許してしまう片えくぼ　昌紀
もう無理と言うてはいるがまた一歩　ダン吉
とても無理妻と互角に喋るのは　いさお
しがらみを断ち切る鋏研いでます　和夫

人

花に風無理は言わない万華鏡　森子

地

情けなや無理難題の置き土産　公誠

天

無理やりに打つと曲がってしまう釘　無限

軸

幾度も無理を重ねて来たものだ

兼題「労う」　河内　天笑選

労いの笑顔ほっこり癒される　みつ子
ひらがなのハガキ労う母の文字　一風
労うて社長お言葉だけですか　弘一
三次会今日の幹事の慰労会　修
コーヒーをどうぞとさりげなく言われ　美花
労っています居ないと困る人　哲子
一片の労いもなく来た辞令　直樹
ひと仕事終えあんぱんに労われ　朝子
労いの過ぎた上司に肩が凝る　昌紀
労われほんとのことを言いそびれ　義
ご苦労さまこのひと言を忘れない　理恵
園遊会陛下に功を労われ　ルイ子
幾山河越えて労う仲になり　宣子
頑張り屋の自分労う酒二合　直樹
労われながら飲んでるお葬式　朋月
植木屋さんに羊羹出して労った　瑠美子
労いは銀行券がよろしおす　楓楽
労えばまだ言うことを聞く五体　楓楽
ぶっきらぼうだけど大事にしてくれる　美代子
夫婦喧嘩に負けては孫に労われ　則彦
労いの言葉重ねて値切る妻　忠昭
ゆっくり休めとリストラをされる　正和
いじめにも耐え憲法よご苦労さん　一歩
猫がいてくれて疲れもすぐにとれ　月子
赤ちゃんが笑ってママは労われ　耕治
負けたけどようやったなと慰労会　玄也
ちょっと小粋に妻を労うチューリップ　扶美代
労って貧乏神に暇を出す　黒兎
職安に行く靴そっと磨く妻　郁夫
過労死にせめても半旗掲げたい　保州
ありがとうと言われて汗が引きました　冨美子
ようやってくれてる足の指洗う　真理子

佳

よそ見して労うやはり他人だな　弥生
聞いたことない相棒のありがとう　(久)千代
ご馳走さまおいしかったよだけでいい　(志)千代
労いが上手で荒い人使い　集一
裸婦像に布着せかける休館日　真理子

人

耐えて来た地球労る植樹祭　岳人

地

小遣いで自分労う縄のれん　隆彦

天

心臓に皆勤賞を贈りたい　**三宅保州**

軸

ひと言と笑顔で端数まけてくれ

毎月24日締切・35句以内厳守　編集部

竹原川柳会(広島)　古田　太虚報

よく光る星から一つ暗示来る　比呂子
初誕生笑顔が光る春光る　汎美
太陽光電気に変える知恵を出す　節生
うっぷんのやりばキッチン光らせる　栄恵
原石も人も光るまで磨く　静風
み仏の光の中に生かされて　房子
太陽の光依怙贔屓などしない　一路
手作りの独楽の芯には竹のクギ　半徳
いいお湯だ芯までほぐす里の風呂　節夫
延びる芯春は優しい雨降らす　幸子
吾が家での芯はやっぱり妻である　笹舟
芯のある男のまっすぐな背骨　蘭幸
帯芯の深さ情念の深さ　笑子
芯のある人は笑顔を忘れない　規代
午後のお茶話が弾む孫自慢　栄香
四時迄は私の時間針を持つ　慶子
午後五時にもうテーブルへ来て座る　輝恵
空は青こころは午後のカープ戦　力

放課後のグランド少年の僕を観る　敬子
午後十時心をゆるりと解き放す　淑子
しがみつかない生き方愛猫に学ぶ　厚子
優しさがまだまだ足りぬ向こう脛　あゆみ
焦るほどせっぱつまっていないはず　太虚
メラメラと燃えて勝負の顔になる　千枝
クレヨンで丸を描いたらママになる　史子

和歌山三幸川柳会　武本　碧報

眼力をつけようニンニクを刻む　小雪
目くばせで分かり合えれば同じ色　喜久子
大き目の服が進級待っている　芳子
目かくしの手が優しくてほどけない　菜摘
まずは目で味わう母の雛ちらし　和子
坊ちゃんの目線はやはり上にある　武
目がふたつあって見逃す青い鳥　登美代
目一杯生きて輪廻の鹿島立ち　昇
近視です無愛想だと言うなかれ　みね
魚の目を日がな一日弄ってる　絹子
遠近はどうあろうとも心の目　八重子
目で笑い心で泣いて妥協する　当代
雑巾の針目に本音二つ三つ　柳昌
目の中に君の憂いを見たようだ　ほのか
胸がチクチク目と目が合ったあの日から　美花
目で合図人差し指は口元へ　房代
辛抱もここまでと散る椿の緋　碧
居直って耐えているのか肩の荷も　豊太郎

万歳のポーズで揺れている電車　町子
辛抱の勲章ですか座り胼胝　義雄
お互いに耐えてまあるくなった石　イセ
辛抱の今へ付けてる底力　幸
シュレッダーかけて過去から逃げ支度　富子
逃げ足が遅くて消えた雪ダルマ　かずみ
疲れたといって心が逃げている　次根
走らねば二度ないチャンス逃げていく　紀子
〇・〇一秒の差で逃げ延びる　朱夏
逃げ道を断って行く手を切り拓く　准一
逃げ道は先に作ってある答　東吉
美人画に栄養たんまりと貰う　俶子
耐えている火種たっぷり持っている　孝子
波瀾万丈たっぷり灰汁が浮いてくる　幹子
たっぷりと見せて男の木が伸びる　あきこ
たっぷりとマーキングして現在地　保州
第二ボタン外して春を闊歩する　章子

松露川柳会(鳥取)　小西　雄々報

入学へ門出を祝うお赤飯　智恵子
入学へ子供手当を待ちわびる　和代
入学へ弾むうれしい春の風　久子
入学式夢に輝く金ボタン　公美枝
将来は東大めざす入学だ　鈴枝
金次郎仰ぎ入学いそぎ足　弘子
気前よい入学祝いできました　静江
入学児末は総理か大臣か　正光

入学の日からライバル意識する　雄々

川柳塔みちのく(青森)　**小寺　花峯報**

陶酔の足跡消えぬ過疎の朝　つとむ
陶酔に浸りきれない健在無職　きよし
こんな日もあったと見入るフォトグラフ　洋子
青空に向くヒマワリに明日がある　あすなろ
骨董で懺悔している虫歯です　芳生
折り返す向かい風だが怯まない　一呑
衆院選まさか自民が負けるとは　隼人
惜別の弔辞泪をすすらせる　銀波
あと少し全快までの粥啜る　ふさゑ
採血の我が血をすする憎い針　花匠
人の世はまさかまさかが多すぎる　雅城
カサブランカの色香に頓死黒揚げ羽　愁女
粥啜りながら味方を見極める　黙人
芋粥を啜った昭和史がかすむ　岳水
薔薇の香に鼻も緩んでいる地酒　花峯
陶酔を求めて薬を買う子猿　一花
ふる里の風が包んでくれる傷　慕情
活断層まさかまさかと旅枕　劦
チギリ絵を逆さに貼った満足感　五楽庵

城北川柳会(大阪)　**伊達　郁夫報**

これからも楽しみつけ老いの坂　千加
下戸故に何時しか下座が指定席　縣祚
器替え心も変えてレッツゴー　知恵子
義理チョコをもらった僕は有頂天　容子
着ぶくれてじっと我慢の冬でした　桂作
名跡を引継ぐ裏にある苦労　義昭
波浪には負けじとまぐろ漁船出る　昭子
古ノートシークレットの匂いする　あさ子
わたくしのウインクが目に入らぬか　令子
食べ歩きいつも財布が袖を引く　美智子
正座して一針ごとに縫う晴着　ルイ子
さすがだと褒めて殺した赤い舌　郁夫
白を切り七十五日待つ男　勝弘
生かされてその道すじを書くノート　章久
ノートから喜怒哀楽がこぼれ出す　じゅんこ
連日の酒に肝臓音を上げる　克己
大根足恥じることないアスリート　正
会って欲しいさすが俺の子目が高い　弘風
車座になったら喋る雛人形　一歩
古ノート追憶にある花筏　麗
鍵っ子と母とを繋いでいるノート　志華子
さすが春みんな美人に見えてくる　典子
母さんが座ると部屋がぬくくなる　明子
ノートには書かず心に刻み込む　倫子
人間を脱いだ形で酔いつぶれ　昭
子や孫に残す言葉は飾らない　集一
風を切る一という字の爽やかさ　直樹
それまでと妻が私の袖を引く　満州夫
真新しいノートだ鉛筆が弾む　賢子
甘い風かたい鎧を脱ぎにくる　修

佳句地十選　(5月号から)

升成　好

花屋の花に呼ばれたように立ちどまる　いわゑ
罪になる手前で口に指を立て　比呂志
使わずに大事にとってある咳呵　淳司
是か非かは損か得かを見て決める　集一
おべんちゃら言わぬ鏡を持て余す　輝子
ごめんねは遅くなるほど溝になる　玲子
手で描いた線の丸みが温い　幸安
指切りの力強さに嘘がない　寿之
ぼんやりも長生きをする秘訣です　歳子
野次がとび本番らしくなってきた　繭

聞き役の真ん中に居て座り胼胝　柳弘
泣き笑い重ねて伸びていく記録　寿子
ときめきのハートのように桃の咲く　朝子
少年がノートに刻む未来地図　野鶴
合図するそれから先は自己負担　とし子

川柳ふうもん吟社(鳥取)　**夏目　一粋報**

火付け役はレーニンだった革命よ　洋々
こじける夜は酒に愛など語らせる　美雪
思い切り泣いて明日を晴れにする　無限
石橋を叩き二股未だ迷い　(平)節子
地獄絵図赤い実食べたなれの果て　一瑶
過疎の村チェンジ出来ない家ばかり　稔

ロボットに心操ること出来ぬ　(山)節　子
婆さんの火付けで孫に嫁が来た　茂登子
二股でかかった獲物今は主　滋
結局は金が目当ての火付け役　一　京
子育てへこじけてならぬ夫婦仲　圭一郎
ニギニギの上手い両手がこじけてる　金　祥
疑似餌のキンキラキンに食らいつく　蟹　郎
二股も役に立ちますボランティア　菖　子
欲張って二股かけて全部損　清　信
老夫婦子へのチェンジがまだ遠い　房　江
かっこいい火付け役なら喜んで　益　子
影法師愚痴も言わずについて来る　孝　男
二股をかけると福が逃げて行く　重　忠
雨降りの火付け役です傘一つ　振　作
今ならば二股かけるほどでない　高　明
二股をかけてかなわぬ基地ばかり　はつ江
こじけた手ふところに入れ抱いた母　春　名
性転換ハーフ美女にゃあ騙された　由美子
火付け役誰も尻込みするばかり　雅　女
二番手と組めばできそう火付役　美恵子
あの男また解散の火付け役　妻　子
締め切りが迫ると脳が空まわり　志げ緒
浄土への五箇条壁に張ってます　善　夫
ありがたい御飯ですよと嫁が呼ぶ　菊　香
二進法すべて二股岐路ばかり　大　鯰
二股をかけ成り行きを見て動く　秀　四
相撲界チェンジさせるか貴乃花　昌　鼓
二股と言われてもいい日和待つ　喜　子
一度だけ欲を満たして見たいもの　一　粋

川柳らくだの会(鳥取)　**岸本　宏章報**

草取りに小さな椅子を持って出る　仁　子
空缶ポイ他人の庭ならいいですか　寿賀子
鶴彬昭和の歴史よみがえる　大　鯰
押されても押してもいやな車椅子　孝　子
躓り口メタボは目指すダイエット　玲　子
地に返す生ごみ土も嬉しがる　宏　章
国会の椅子に座ると反り返る　せつ子
平成に押され昭和も遠くなり　邦　昭
空澄んで目指す望みが叶いそう　清　帆
見舞客ベッドが椅子の代りする　善　江
百歳を目指し畑へ今日も出る　冨貴子

川柳塔唐津(佐賀)　**仁部　四郎報**

水やお茶買うものにする子の躾　勝　視
能力給村議活動その評価　實
他人でも取れるとうれし金メダル　高　明
べからずの数に驚く新社員　四　郎
CO2出さぬ自転車八十路往く　晴　翠
マニフェスト大風呂敷が破れかけ　輝　夫
金借りたまんまで友が千切れ雲　蜂　朗

川柳塔鹿野みか月(鳥取)　**土橋　螢報**

時と金ぞっこん厳格な父だ　茶　子
内気でも心の強さぞっこんだ　露　子
ぞっこんの乳房を放り投げて寝る　永　子
満開の桜ぞっこん吸い込まれ　みどり
女房にぞっこん惚れたわけでない　蟹　郎
煩悩を投げだしぞっこんよく眠る　菊　乃
裏口の賑やかすぎる猫の春　かおる
明日の花咲かせる今日の水を汲む　惣　子
花散って波紋が池に広がった　小　鹿
どの花も押し花にして蘇る　みさ子
まだまだ進化するだろう花つぼみ　富久江
花や木に元気をもらい生きている　満
夜桜を楽しんでいる防寒着　和　子
賑やかな女の涙見てしまう　(野)節　子
花束を賑やかに見せカスミ草　弘　子
寄せ植えの花に花言葉はいらぬ　照　彦
賑やかに椿ぽとぽと春の庭　睦　子
ぞっこんでつまずき覚める軽はずみ　実　満
惹きつけて男の芯を抜いている　いさお
白髪も皺も増えてぞっこんいい夫婦　(鹿)節　子
ぞっこんの嫉妬に咲いた白い花　忠　良
何時の世も二十歳の花は美しい　久　枝
大輪の花を咲かせて友は逝く　重　忠
耐える花やがて咲く花実る花　房　子
幸せが来そう真っ赤な薔薇を買う　くに子
ありがとう言えて賑やか輪に融ける　彩　子
賑やかを抜けて介護の道を急く　美恵子
賑やかな祭り好きにも陽は落ちる　八　重

席順は抽選という賑やかさ　孔美子
賑やかに花に集まる男と女　螢

高知川柳会　小川てるみ報

リモコンに慣らされ手足退化する　健
リモコンが定位置にある掃除好き　悦子
リモコンを迷わせているテレビ欄　幸子
リモコンで彼のハートが動かせぬ　てるみ
リモコンで操作不能なうちの人　千鳥
リモコンも無風地帯で本音吐く　哲史
メール一本まめな亭主の市場籠　美々
楽にしてやろうリモコンオフにする　和広

八尾市民川柳会(大阪)　宮西　弥生報

信じれば信じてくれる夫婦ゴマ　一風
さくらさくら千の笑顔を連れて来る　留里恵
いまの龍馬少しイケメン過ぎないか　いさお
日向ぼこ猫と一緒に大欠伸　紀雄
しなやかに命耕やす春の土手　加央里
襲いくる悲しみへもう笑うだけ　賢子
わたくしを解くと忍の字が残る　あかり
捕われて変人になるカメレオン　秋子
真っ白いページに春の光射す　寿鶴
ブルースからタンゴに移る季節感　耀一
春風に放浪癖が目をさます　朝子
カラカラの雑巾があるワンDK　柳伸
笑顔にするか顰めっ面にするか遺影　草風
空白の裏で一日火の匂い　寿之
欲ひとつひとつを捨てていく写経　欣之
高得点むろん笑顔も加算され　扶美代
変人の汗に偽りない真　弥生

川柳塔おっぱこ吟社(香川)　川崎ひかり報

過ぎ去った嘘が時効で喋り出す　賢
嘘一つ許して平和押し通す　八重子
見え隠れしながら嘘のうまい人　放任
甘酸っぱい嘘は笑って聞き流す　くに子
旨過ぎる話に嘘の隠し味　弘
言い訳をしだせば嘘とすぐ解る　よしみ
少しだけ嘘も混じえてプロポーズ　いさむ
子の嘘を母は笑って聞き流す　ひかり

川柳クラブわたの花(大阪)　西川　義明報

苦労話笑って言える歳になり　美代子
きらきら光る恋まだ追っている余生　耀一
ちょこちょことあと追いかけるランドセル　知佐子
下手だけど見よう見まねのかくし味　民
プレッシャー力に変えてとるメダル　君江
ええ町や皆でチョボラ八尾の町　博子
アルバムに見入る我が子の朱の手形　愛子
夫婦仲年月過ぎて鼻につき　宏至
拉致の子の噂を風よ教えてよ　義明
前向きで余生悔い無く風と消ゆ　いつふみ
脳トレで鍛える老母のボケ封じ　宏
またかいな秘書に責任とらすとは　正春
人間の仮面をはずし素の余生　妙子
カラフルなランドセル跳ぶ新学期　俊子
生かされて生意気ですぞ余生とは　晴美
脳トレに孫とシリトリやってます　浩三
あるあると自然と首が同意する　孝子
平成の脱税王は母ちゃん子　和子
長生きはあかんと預金帳が言う　ますみ
欠けるもの無くて欠けてる思いやり　はじむ
卒業写真三ヶ月後に郵送で　たえ子
首長くして帰省待つ故郷の母　一風

川柳ささやま(兵庫)　遠山　可住報

寝とぼけて靴下の裏履きました　久子
裏の顔案外やさしかった父　純子
ひっそりと昭和が残る裏通り　二英
即答が時には墓穴掘る事も　美紗子
終焉は祝砲一つあればいい　啓子
目と鼻の先に住んでる宇宙人　真由
今日一日素直なくらし誕生日　多美子
星眺め生きる力のお守りに　かほる
祝誕生赤飯だけは自作品　幸子
生れ落ち神様決めた星に住む　美智子
追伸の一行母と子の本音　哲男
渡り初め百歳を押す車椅子　可住
一と言の重さ感じて嫁ぐ朝　開子

川柳塔わかやま吟社　川上　大輪報

数珠いくつ繰れば女の業消える　精子
珠つなぐ嬉しい事がある度に　よしこ
繋き合わせば一粒ずつに出る力　輝子
顔と顔縁を繋いだ赤い糸　なる子
雁首を並べて基地が決まらない　保州
口下手に弁当旨いとおだてられ　真里子
弁当に絆盛りつけ送り出す　寿子
ほっぺたの弁当福の神を呼ぶ　怜
弁当を開けると顔を出す昨日　大輪
空気の流れ少し変わった咳ばらい　泰女
咳をしたとたんファスナーパッとあく　まさみ
ひとりきりの咳に軋みがとまらない　あきこ
咳ばらい一つでものを言う背中　徑子
空咳ひとつ言い訳を考える　俶子
長老の咳が合図で幕が開く　三男
和やかな空気が淀む咳払い　紀子
愛されてひょっこり変わる水の色　和香
まだ女火種ひょっこり顔を出す　紀久子
ひょっこりとひょうたん島にもどりたい　裕美
ひょっこりと吐いた言葉が渦になる　めぐみ
義理欠いた人とひょっこり無人駅　利治
ひょっこりと会って互いに名が出ない　美子
ひょっこりと来て懐をさぐられる　英子
ひょっこりと帰った猫はキズだらけ　克子
さくら祭りでひょっこり出合う異星人　よりこ
押し込めた嘘ひょっこりと水に浮き　小雪
ひょっこりと来て仏壇に手を合わす　稚代
鬱の日に酸素を詰めた友が来る　冨美子

ローズ川柳会(兵庫)　木村貴代子報

豆だいこん蕎麦の花みな健気なり　義子
終章は花道連れに見送られ　藍
失せ物を見つけてやっと春気分　貴代子
宵闇に抱かれている花明り　年代
ままごとの二人へ夕陽れんげ畠　哲子
時という大きなものと根くらべ　いわゑ
昨日今日明日もままごとかも知れぬ　みつ子

川柳塔なら　坊農　柳弘報

中心はへそくりまでも知っている　カズ子
梅さくら桃も咲いたよ無言感　萌子
修二会終え球児に春が訪れる　紀雄
近くより遠い囁き拾う耳　隆之
中心がぶれたら駒は回らない　博一
中心に怖い親父がいた昭和　いさお
真ん中を食べて下さいお姑さん　華
潮風に耐えて満開水仙郷　弘風
産声を中心にした未来の図　とし子
どの国も中心に置く世界地図　郁夫
栓抜くと男臭さが溢れてた　修
泣き言の栓を放した春の海　ふりこ
大学の門に花咲き鳴る電話　章久
あの人の心咲くのを待っている　勝弘
見て聞いて食べて噂のど真ん中　柳弘
欲のない人中心で輪が和み　一風
苦労越え幸せ今が真っ盛り　恭昌
まん中に情熱こめて書く返事　惠美子
ささやきが今日一日を狂わせる　比呂志
胎動へ愛をささやき母となる　富子
遠い日のささやき耳の底にある　理恵
あした咲く花のたしかな息遣い　隆盛
精一杯咲かせる今日といういのち　あかり
悩ましい囁き鍵穴を抜ける　完次
良心に目隠しユダに囁かれ　寿美
その耳にとろりと毒を流しこむ　真理子
その日まで命を燃やす花の芯　良一
もう余生栓するものは何もない　洋子
中心の男が怪しいと思う　義
入り口も出口もふさぐ赤い栓　森子
ささやきは魔法わたしを華にする　朝子
囁きが花芯を殺す一滴　弥生
野に咲いたわたしを誰も振り向かぬ　國治
いじめだろうか中心に座らされ　のりこ
栓をした心今宵は君に抜く　和夫

川柳茶ばしら(愛知)　板山まみ子報

妻の留守一人納豆掻き混ぜる　遡行
混ぜるのも慣れて節約部分染め　かつ子
水仙が奏でているよ春の歌　百合江

新人と古株まぜて社を担う　幸子
雑ぜ返すいつもの顔が居る会議　美千代
口癖に貯金しとけと親が言う　雅美
牌まぜて老化を防ぐ四重唱　まみ子

ほたる川柳同好会(大阪)　水野　黒兎報

高原鉄道スイッチ・バック倍楽し　柳童
あかんたれなのに翔びたい私です　春代
海渡り人気者です日本食　正子
ルビコンの橋を渡った肝っ玉　契子
またですかこれが最後と義母が来る　洋子
損ばかり世渡り下手な父だった　祥風
対岸にいい人が待つ渡月橋　蛍柳
そらあかんあかんばかりで策もなし　見清
返してや母はしぶしぶ二枚出す　宇乃子
オンとオフ切り替え上手遊び人　郁子
三途の川小銭がなくて渡れない　信男
スイッチオンカーナビ威厳ある声で　雪子
渡る世間善を信じて丸く生き　幹治
どうなさる拒否必定の策ばかり　勝
携帯オフ喧嘩の後は避けられる　久子
丸木橋いくつ渡って来た月日　桂子
この橋を渡れば私の名が変る　いさむ
子のけんか負けたらあかん母叱る　長一
いつまでもみどりの気持持って生き　禮子
こりゃあかん知事が独裁者に見える　黒兎

川柳花の輪(大阪)　妻谷　重風報

今夜何故妻にべったり絡み酒　ミヨノ
キスマークべったりつけて終電車　楽鬼
べったりと関空着も世間体　重風
おばあちゃん沈む夕日に手を合わす　やすの
沈む夕日に今日をありがと明日もまた　一幸
茶柱の沈まぬうちと呼び立てる　音成
口惜しいなぁ脚がふらつく極めポーズ　善栄
懐の淋しさ見せぬえびす顔　克衛
ヒロインのつもりで帰る美容院　泰子

わかあゆ川柳会(島根)　松本はるみ報

嘘もまた人を助ける花占い　好栄
実を残し静かに散った寒い朝　恵美子
職退いてこんなに世間が見えるとは　聖子
折紙を教える手順ふと迷う　伸子
美人ではないが笑顔でもてている　ちよえ
疲れたら結び直して歩こうか　かつ子
約束を忘れ李白と向かいあい　はるみ
仏壇へ向えば昭和史よみがえり　博利
目線にも届かぬ政治虎叱える　清泉

長　柳　会(大阪)　坂上　淳司報

勿体ないが一杯詰まってる納戸　淳司
春食べたハカマ脱がせた土筆から　エミ
女房と同じ背丈で下駄を履く　マサ
こっぽりの音も明るい京舞妓　明子
風情あり利休下駄履き蛇の目傘　もこ
秘伝のタレ勿体付けてビンに詰め　弘光
教室も電車も詰めた団塊児　篤
金策に詰まった時に子の寝顔　正子
折角の化粧をかくす鼻詰まり　よしお
泥舟を捨てて脱出自民党　正一
すくすくと命の芽吹き春の庭　光弘
想い出の詰まるアルバム捨てきれず　輝子
恋をするときめき競うシクラメン　ヒロ
職引いて背中に詰まるエピソード　隆彦
格安で詰め放題と言うセール　たけし
触れ太鼓鳴ればなにわに下駄の音　幸子
すくすくと育った杉で花粉症　英美
さまざまの出会いと別れ詰まる春　正美
いま一度見詰め直している余生　和代
イケメンに惚れた弱みで騙される　靖博
時代越え遥か遠退く下駄の音　三和子
思い出の詰まった脳が涸れて行く　幸雄
煮詰まったわたしへ今日は花を買う　孝代
遺言に期待を込めてする介護　正博
喜怒哀楽下駄で奏でた昭和っ子　一慧
返答に詰まると貝になる夫　けい子
下駄はかせ商い上手い父だった　武男
国を越え命を懸けた罪と罰　久美子
煮詰まって私の胸にある昭和　芳野
弁当に詰めているのは応援歌　冨美子

下駄ばきの音が聞こえる古川柳　和子

川柳塔きゃらぼく(鳥取)　大塚　恵子報

枯れても女やがて落暉の絵の中に　瑞枝
詰め込みとゆとりの後に何が来る　章江
病窓にとんどの火の粉舞い上る　初枝
雪女まだ帰らずにいるらしい　千代
曖昧な動機で接なぐウエディング　未延子
忘れたい眺めが残る錆びた脳　ふみ
二月は逃げ三月は去り桜咲く　亜弥
紅白の庭の梅林春を待つ　晴子
焦されて春よ春よと待っている　ゆき
シクラメンと私元気ごっこしています　なみ
春うらら初音を聞いて夢ん中　麗
介護部屋ほっこり温い椅子がある　富美子
言い勝ったつもりの言葉蹴つまずく　春枝
譲られた座席に春の陽が温い　晶子
椿赤くてみんな明るくなる同士　てい子
新色の口紅マスクで出番なし　寿々子
受験子の仏頼みの親心　恵子
裏も表もない私でうすっぺら　繭

西宮北口川柳会(兵庫)　小林　わこ報

折角の好意断るのも勇気　歳子
折角の好意と思いきや賄賂　美津子
折角の名句は夢のバクが喰う　キヨミ
旨い店折角きたのにお休みか　勝弘
折角の切り札出せず懐手　奮水
古セーターほどいて今は犬の服　てる
赤い糸ほどく儚い恋でした　武臣
ほどく事ないだろうけど蝶結び　二英
息継ぎがしたくて妻の手をほどく　秋果
許そうか心をほぐす波の音　美籠
きしむ糸ほどく着物に母の愛　緑
嫁姑ほどけた筈がまたもつれ　浩司
もつれ糸みんなほどいてから死のう　毅
歳月ががんじがらめの糸ほどく　千代
しつけ糸ほどけば亡母の瞳に逢える　美代子
出土した木簡古代を喋り出す　哲男
同じ土捏ねて格差がでる茶碗　朋月
春の土涙も混じる甲子園　直
いい汗を知ってる土は裏切らぬ　富喜子
元気よく背比べする土筆達　盛夫
泥んこの笑顔たくましさが見える　わこ
土おこし春の香りを撒き散らし　いたる
土掘れば化石が過去を物語る　りこ
害虫が僕の畑でうれしそう　祐康
三世代並んで食べる笑い声　早加永
環境の違いで出来る善と悪　基輔
ハイハイと今日は花見の二本立　正和
女子フィギュアギネスブックに載る名誉　順子
ぎこちないスーツが歩く新社員　文子
時差ボケでうつらうつらとシャンゼリゼ　耕治
雨音に目覚めて今日を思案する　佐紀子
春の宵遠い昔の思慕をふと　美穂
行き先が誰もわからぬ日本丸　茂
チャンス到来腕組ほどく時が来た　比ろ志
一昔前の絵本を懐かしむ　弘子

あかつき川柳会(大阪)　山本　柳昌報

トラファン皆んな仲間と思ってる　忠昭
ディスカバリーでっかい夢を追う仲間　朝子
花に誘われぶらりと呑みに来る仲間　克己
子供手当後で返せと言われそう　桃花
子や孫に残したい海吠える親　君代
少子化に生まれ借金背負わされ　昭
妻よりもわたし子供に好かれてる　太郎
公園で遊ぶ子供の声がせぬ　章久
母さんの子供やこんなものやろう　蕉子
じゃりん子チエ彼女は子供なんですか　ダン吉
九年間アフガンの月泣いている　正
ソプラノのわずかにぶれて朧月　瑠美子
三日月は反省ばかりしています　啓子
月替わり気分を変えて彼も替え　篤
嫁に行かず月にも行かぬ家の姫　鈍甲
満月も三日月もある妻の顔　哲男
月よりの使者はとうとう来なかった　恵子
満月を見れば犬歯が伸びてくる　賢子
無視されて孤独に耐える昼の月　遠野
野の花が自分らしくと染めあがる　弘子
染まるのに残されたのはどんな色　和雄

どうにでも染まる男を飼い慣らす　たつお
みんなとは染まらず今日は帰ります　一行
自然体で染まる夕陽にある力　美花
血に染まる遺品は残らない知覧　見清
思わくはみんな別々寄れば党　武
大阪城梅桃桜彬の碑　たもつ
後期医療差別制度にそめられる　美世子
自然ふ化のトキを待ってる佐渡の空　美智子
参院選ガラガラポンにしませんか　生枝
核疑惑もはや欺瞞は通らない　紀雄
マニフェスト誰が主役かやじ馬か　柳弘
非核だと騙されてきた五十年　勝弘
ママは今宇宙旅行という時代　紀乃
父も子も職見付からぬまま四月　尚士

富柳会(大阪)　古田千華報

路の甍そろそろ春の風を待つ　千恵
一日をきっちり畳み明日を待つ　田鶴子
風は無垢春たっぷりと手話の指　紅紫朗
にんげんの焦りそろそろ浮いてくる　登子
いい街だ命たっぷり膨らます　加央里
明日には明日の風と手をつなぐ　森子
見て見ない振りが出来ないこの場面　七朗
たっぷりの胸元眼には毒でっせ　高鷲
ふる里に記憶でつなぐ橋がある　安希子
ゆっくりと明日へ繋いでゆく命　アキ
歴代の総理たっぷり金儲け　壽峰
明日こそ嫁にストライクを投げる　晴美
準備万端明日の命燃えている　寿之
断ち切ったはずの絆に支えられ　華
お百度を踏んでつないだ春桜　伸雄
凧揚げをした日あの風と出合った　彦次
好き嫌い覆い隠してマヨネーズ　奏子
薔薇色のあすが踊って眠れない　欣之
迷いなく自信たっぷりど真ん中　武人
陽気さに蠢き出した胸の秘事　よしみ
球根とわたしの明日に水を遣る　操
なにもない村だが真っ先路のとう　佳子
ねばならぬそんな呪文を解き放つ　信子
明日の絵に海の青さがほしくなる　鬼焼
明日こそ愛の告白待つ夕陽　建一
たっぷりと貯めて孤独な風纏う　澄子
点滴の音ひそやかに明日を待つ　未知
明日ばかり思うと今日が古くなる　恵
三面鏡開けばそこは竜宮城　千華

サークル檸檬(大阪)　松尾美智代報

八十路坂一年毎にきつくなる　房子
わたくしをお転婆にする坂がある　扶美代
尾道の坂は詩情に背を押され　久仁雄
晴れよりも雨降り似合う細い坂　昌紀
信じ合い歩けば坂がゆるくなる　加お里
口縄坂上町台のいい響き　たもつ
古稀の坂スイッチバックして登る　美智代
句読点うって昨日を改める　光久
自信喪失まよいが続く登り坂　美籠
恋の坂のぼり切らずに夕陽落つ　義子
春だなア雀が遊ぶベランダで　みつ子
坂登るだんだん天が近くなる　いわゑ
つつましく生きて小さな荷物もつ　希久子
頂上はない女坂男坂　楓楽

川柳塔まつえ吟社(島根)　三島淞丘報

情熱はまだ持っている髪を剃る　叮紅
天と地の情けをもらい春野菜　玲子
心情の吐露に一肌脱ぐ覚悟　たけし
陽に当てる情けの傘のしずく切る　きみえ
善い人に囲まれ飴を舐めている　螢
友情に生かされ春の便り書く　房子
牛積んだトラック消えるバックミラー　知恵子
功徳積むほどに無口になった石　ちかし
文通を積んでる内に光り出す　蘭水
爪に火をともして積んだ金だった　繭
預金利子雀の涙印字され　禮子
積み上げた古い教科書ありがとう　薫
末席が何かごそごそ動き出す　注湖
ごそごそと噂話に耳が寄る　和歌子
ごそごそと亀で行きます好きな道　スズコ
啓蟄にごそごそ手足動き出す　多喜
口さびしごそごそ探す冷蔵庫　政子
裏返すごそごそ春が顔を出す　紫晃

虫干しへ母の形見が喋り出す　昌子
千差万別愛の形も百通り　寿代
色形花は数だけ自己主張　幸子
形ばかりの言葉はいらぬ四面楚歌　桂子
形だけ財布がわりに持っている　ちえこ
覚えてる君の形はすぐ書ける　柳歩
声のない声が聞こえる街の隅　茂美
春休み子供の声が遊ばない　邦代
お隣へおからを炊いて声かける　治代
あれこれの外野の声に耳塞ぐ　幸
チャンスかも知れぬ大声出してみる　美智子
末席に座り声無き声を聞く　淞丘

はびきの川柳会(大阪)　徳山みつこ報

当選の朝は大きなあくびする　敏
忍び足せめてのお詫び朝帰り　章司
朝風僕のやる気を問うてくる　ダン吉
冤罪が晴れてまばゆい朝日浴び　いさお
天空を眺めて入る露天風呂　正子
温泉とごちそうあれば若返る　真一
花冷えの童馬ゆかりの京の宿　久仁子
ホテルより素朴で温い宿が好き　ヨシ枝
一人旅ひとりの宿は淋しすぎ　登志子
タイムスリップ文豪の宿にいる　みつこ
山の宿里にかえった心地する　千鶴子
高級車身の丈合わずかしこまる　喜久子
土筆摘む杖をどこかに置き忘れ　美喜

崖っぷち仏の声が聞こえ出す　一壺
熱燗に猫なで声が付いてくる　一知
苦しみも御破算になる呱呱の声　りつえ
ソプラノがアルトに変わった古女房　ちづる
いつの世も国へ届かぬ民の声　遠野
皮下脂肪それをパワーにする女傑　六点
食欲のパワーまだまだバイキング　フジ
鬼の面着けるとパワー倍になり　獏沓
団結のパワーを蟻が見せ付ける　庸佑
パワフルに生きる六法横に置く　美籠
同じ顔見てたらパワーダウンする　光男
戦争を生きたパワーがまだ残る　泰子

南大阪川柳会　吉川　寿美報

今更と思わず辞書を日日開ける　ルイ子
今になり柿の苗木はほしくない　タカ子
絵文字入り今更つらい老眼鏡　なぎさ
今更に黄砂の凄さ知った朝　克己
今更と思うが妻にありがとう　尚士
混浴を恥じらう妻と金婚日　柳伸
裁判員人の生死がこの胸に　弘泰
選ばれて六法全書たたき込む　寿美
ガキ大将裁判員も兼ねていた　たもつ
ずる休み裁判員と届けてる　弘風
抽選で人を裁けと無責任　忠昭
決めかねる被告の顔が前にある　章久
遺産分け他所に子供がひとり居た　直子

善悪を如何に司法の風通し　柳弘
感性を磨く図書館美術館　楓楽
心眼を磨くと読める人の裏　清
まだ光る僕を磨いて下さいな　勝弘
磨き上げ鏡にちょっと笑み添える　弘子
戴いた命へ朝の歯を磨く　志華子
だんだんと味出る人が側にいる　一歩
じわじわと地球蝕む温暖化　祥昭
ばらまきでだんだん上がる消費税　和雄
桜咲く時季がだんだん早くなる　叡子
労りを覚えて人になってくる　ダン吉
語り部のお国なまりにある魅力　集一
老いる身に種まきこころ芽吹く夢　嘉住子
だんだんと夢果しゆく老いの坂　柳右子
大阪弁でやって欲しいなナレーター　昌紀
ヒーローに陶酔させるナレーター　憲太郎
だんだんと人を追い越す介護ロボ　直樹
鬼手仏心裁判員が揺れている　郁夫
アコヤ貝に抱かれて真珠磨かれる　ひさ乃
下積みで耐えて磨きを掛ける業　庸佑
機械より匠の研磨世界一　東吉
鉢植えがだんだん増えた春の庭　シマ子

岩美川柳会(鳥取)　石谷美恵子報

網揚げのツアーにおどる桜鯛　蟹郎
ササ百合の写真立派と誉められる　重忠
一時間待った立派な応接間　忠良

歳だけは立派にとって生きている　一京
敵ながらさすが立派と言わせたい　一瑶
信心はせぬが神棚立派です　たぬ
価値観の相違立派とは言えず　公子
健やかに五世代揃う大家族　幸枝
ノーはノーはっきり言えるのは立派　一粋
花びらが女の髪にまといつく　螢
ひょっこりと広い都で恋拾う　孝男
広い世でたった一人と赤い糸　圭一郎
何億年宇宙の広さわからない　稔
陽が当る敵も味方もない広場　清帆
寝そべって広い野原で見る世界　和子
凸凹の頭も中味良けりゃええ　はるお
脳味噌を輪切りにしたが異常ない　茶子
他人さまの頭で稼ぐ床屋さん　節子
忘れ物頭叩いて思い出す　菖子
誰に似た頭を垂れることはない　幸安
エビ天はばくり頭にかぶりつく　和枝
頭の手術もう駄目ですと医者が言う　よしえ
被りたい帽子が遠慮せよと言う　美恵子

六甲川柳会(兵庫)　伊勢田毅報

なんとなく空を見上げる失意の日　みつ子
悔しさの涙こころを強くする　光久
若き日の涙わたしの糧となる　能子
頬つたうれし涙の温かさ　盛夫
拭きなよと渡すハンカチ愛こもる　基輔
一筋の涙の中にある誠　千賀子
幸せは涙の後に顔を出す　順子
強がりの男の涙汗という　芳江
真央ちゃんのくやし涙にもらい泣き　和子
泣くまいと作る笑顔のいじらしさ　悦子
こつこつと学ぶ粘りにサクラ咲く　弘子
したたかに生きる力は粘り腰　勤
苦しみが膨らみ風が逃げていく　弘
だんまりのけんかの結果粘り勝ち　和恵
粘る児が顎まで使い腕相撲　礼甫
納豆もオクラも同じ夫婦仲　洋一
粘っただけ答えが出たねお目出とう　恵子
政治屋の二枚舌にはあきれます　寿朗
盗るものがなくて隣へ行く空き巣　茂
実力が無いのに運の所為にする　和郎
あきれても今さら遅い式の後　浩司
財源の無い政策にあきれ果て　忠貞
戦中派あきれられても物すてず　寛子
反対の意見をもっている右手　無限
散るさくら咲く桜あり山は春　美穂
春風がプラス思考に変えていく　孝子
ふる里の山に言いたい事が増え　武臣
携帯を忘れ不安になる私　利子
子供部屋まだ捨てられぬランドセル　登美子
近頃の夫婦げんかは猫が食い　夏子
神様にお願いをする控え目に　勝
歳かなあ黄門さまに涙する　武彦
後十年賞味期あると古希の宴　毅
右に出るものはないなどそつがない　いわゑ
口ほどは回らぬ脳を持て余す　楓楽

川柳塔打吹(鳥取)　野口節子報

嫁が来た眼鏡にかなう超美人　紀美恵
ダテ眼鏡かけてさっそうデートです　芙美子
百均の眼鏡ぴったり合う私　和子
眼鏡かけ辞書を睨んで五七五　龍枝
めがねの度一段上げて古稀の春　善江
宇宙船笑顔に弾む胸が有る　よしえ
弾んでるブランド服を買っちゃった　富恵
春風にキスされ蕾弾み出す　美知江
ゴム毬が弾んで歌う肥後どこさ　照彦
旅先でちょっと弾んでみるゆかた　くにこ
絵手がみのキャッチボールが弾む春　禎元
わたくしのリズムで弾む花鋏　重忠
お料理が好きで包丁弾ませる　和枝
弾んだら人の笑顔が見えて来た　三津子
春の田の泥はいのちを蠢かす　玲坊
秘書に泥被せ本人知らぬ顔　清
着飾っても血の通わない泥人形　公恵
泥田でも元気に育つコシヒカリ　泰輔
泥鰌鍋汗をかきかき呑む旨さ　駿三

泥パックしても取れない泣きボクロ　美代子
泥の道蟷がつくった罠である　螢
泥吐かせ今朝は美味しい蜆汁　勝憲
泥の中蓮の上にはお釈迦様　たけ代
泥臭さ抜けて都会の垢を着る　紀の治
泥んこになって早苗が立っている　みち子
自我折ると人の話がやわらかい　芳光
おしゃべりや折り紙細工ぼけ防止　久芽代
花見客猫も杓子も折り詰めで　貴恵
折り紙になるとばあちゃんしゃしゃり出る　孝恵
意地っ張り折れるところに助け舟　玲子
自慢過ぎそこらじゅうから鼻折られ　滋
現われた美女に話の腰折られ　泰山
口数と覚えの良さに折れてます　いさお
気がつけば芯も折られた四面楚歌　睦子
少々で折れはしません戦中派　節子

尼崎尾浜川柳会(兵庫)　田原　一兆報

半額にされた刺身に罪はない　由美子
生きるとは禍福あざなうくもの糸　一兆
意識する人の背中見るばかり　里江
愚痴がなく幸せ入る貯金箱　よしひさ
全ボツの句会の帰り重い足　亀与子
引きこもる心を春がノックする　政江
半額の子供で大人釣るパーク　求芽
大仏が見上ぐる程の八重桜　野薫
半額の土産のケーキ無視された　孝一
花菜漬妻と一献かたむける　あかり
誘われてためらいつつもついて行く　江美
あの時の軽い一言悔やまれる　五月
蓑虫の晴れ着枯葉を二枚着る　靖鬼
洗濯機の中で諭吉が大暴れ　美義
長電話匂いは焦げる玉子焼　奮水
半額に乗せられ無駄を買ってくる　勝巳
散歩道風の話が楽しくて　かずお
引き出したキャッシュ取るのを忘れてる　茂幸
じゃが芋の芽がフツフツと主張する　イサミ
是非やると言う公約に入れた票　耕治
ためらいは薬片手の盗み酒　美代子
うしろ髪引かれながらのバイキング　祐康
人の世の大波小波のり越える　紀乃
うっかりを支えてくれる人と居る　雪菜
お砂糖の代りに塩の玉子焼　朋月
九段坂なむあみだぶつ出てしまい　哲男
ギャンブルで大穴入る月旅行　柳明
検診に足が進まぬ胸さわぐ　キヨミ
散り際が良すぎて妻に責められる　彰
風船に入る分だけ愚痴を吐く　和子
言うまいかためらい落ちる砂時計　美籠

豊中もくせい川柳会(大阪)　藤井　則彦報

スカーフはピンクわたしも春になる　紀乃
六法で分かった主婦の座の重さ　庸佑
会って欲しい人がいるのと娘言う　美津子
大噴煙花の気分も褐色に　佳恵
きっちりと分けてもたりぬ一人分　都代子
細い人に譲られつらい席の幅　宇乃子
わたしよりおばあさんには譲る席　千恵子
肩の荷をみんなあなたに譲りたい　早人
がやがやと町が賑わう登校時　佐和子
選ばれた種は無欲の根をおろす　満寿巳
手抜きおぼえベテラン主婦はよく遊ぶ　㈱玲子
充電完了五感が走り出す四月　幸雀
彼岸過ぎ何の間違い名残り雪　郁子
咲くも良し散るもひと味花見酒　志津子
持てるもの全て譲って風抜ける　きらり
エコバッグ提げて娘も主婦気取り　比ろ志
気持ちよく譲って友が増えてゆく　堅坊
流れ込む雨の匂いに癒される　夢隆
お互いに譲り合ってる厭な役　則彦
長生きをするほど募る孤独感　巴子
花便りついに五感を解き放つ　求芽
温いけどいずれ分かれる群れにいる　美智代
過信した若さに膝が軋みます　美義
チャッカリも主婦の必須科目です　葉子
注文をつけすぎてからすきま風　千代
春めいて少し明るい服を着る　尚士
古里で暮すと母は譲らない

歩きながら食べるアイスは旅の味　千枝子
暗い道どうぞ誰方かお先へと　寿美子
譲ること知った人には人が寄る　見清
晩学は視野を広げる分岐点　(岩)玲子

川柳さんだ(兵庫)　北野　哲男報

傷心の盃なめている深夜　朋月
言いすぎてしこりほどけぬ義理の仲　二英
傷ついてまた傷ついて強くなる　歳子
縄のれん常連と呑む今日の幸　一子
指名するイケメンが居る美容院　淑子
終章を悔いなく過すログハウス　美籠
いろり端芋粥すくった木のしゃもじ　哲男
桜咲き歓喜に満ちて山笑う　雅司
彼岸花なんだなんだと咲きほこる　ちあき
遅咲きの僕もそろそろピンク色　祐康
千の風綺麗な花を散らしよる　一泉
駅遥か四季の花咲く坪の庭　好文
やっと咲く花を無頼が首をはね　忠
ハイハイと三日続きの花見酒　正和
誠意なき威権に送る大あくび　晃
あくびして三分経つと夢の中　裕美
参観日あくびしているDNA　順子
出番なくタンスで晴れ着あくびする　光久
飽きず見る嬰児無心の大あくび　キヨミ
きっぱりと彼女と別れおしいけど　一良
連れ合いも松竹梅とくじの運　喜代子
やわらかな味で仕立てる母でいる　ひとみ
枡酒の香りで酔いが深くなる　彰
神様は時に私をテストする　宣子
改築の軒につばめの場所残す　章子

川柳大阪　長井　善純報

拍手の中おひねりがとぶ旅一座　美籠
なによりも妻の拍手が快い　柳昌
前向きなあなたに僕は拍手する　勝弘
私だけ意外な人が拍手くれ　芳香
ガンバレと拍手を送る新世帯　青道
リハビリの母の一歩に子の拍手　五月
泣きじゃくる孫の演技に大拍手　信酔
拍手して核持ち込みを認めてた　司
定年日家族の拍手に夢心地　喜楽
裏側も知って優しさ湧いてくる　東吉
裏方の汗が舞台に華咲かす　朝子
見栄を張る表に言えぬ裏事情　照月
口裏を合わした友が酔い潰れ　柳弘
路地裏のチョッと可愛いママの店　珠生
褒められた言葉の裏を読んでいる　まつお
駅裏の提灯今日も不安そう　美花
メダルより裏にかくれた努力賞　花笑
核持込み裏も表もあるかいな　ダン吉
ストレスとじっくり酒を酌みかわす　一風
どん底のストレス今が峠かも　章久
大声を出せばストレス飛んで行く　紀雄
嫁の愚痴ポチがストレス溜めている　いっふみ
ストレスとうまく付き合う発泡酒　義明
捨て台詞きっとストレス有るんやわ　かよこ
道楽はストレス癒すよい薬　和
褒めことば受けてストレス消えていた　一歩
ストレスがだんだん溜まるマニフェスト　笑風
ストレスが飛んだ三浪桜咲く　鉄心
ストレスがあるのも生きている証　善純

川柳ねやがわ(大阪)　籠島　恵子報

グルメです中国餃子も食べました　銀杏
井上ひさし手に温もりを置いて逝く　鈍甲
無人駅風とわたしと菜の花と　柳弘
たこ焼きのうまいお店を知っている　弘風
足腰も脳もそこそこ喜寿の春　薫
置き去りのサドルへ花弁きて座る　茜
嘆いても元に戻れぬ青いバラ　じゅんこ
いつの日か主役になろうカスミ草　博泉
姑の味夫にグルメと心掛け　尚世
新入生たった一人に村総出　敬
君となら何を食べてもグルメだよ　朝子
グルメには無縁路地住いのさんま　賢子
星幾つやろうか妻の豆ごはん　仁清
芽の出ないままに終った夢悔し　修

禁断の木の実握ってからの乱　洋
ふくらんだ蕾の中に明日がある　弘一
最高のグルメ故郷に湧く清水　美智子
菜の花を布団代わりに昼の夢　秀雄
母という強い味方のある戦　寿子
邪魔な花摘んですました華道展　かすみ
足下にある幸運に気付かない　祥昭
留年は駄目と釘さす入学日　さち子
会者定離固く握手をして別れ　ルイ子
再就職一年生になった春　麗
仲の良い友達誘いグルメ旅　三郎
カタカナ語が幅をきかせている花壇　恵子

翠洋会(大阪)　佐々木満作報

核貯めて核サミットの四月馬鹿　尚士
鳴く鹿の声きく度に偲ぶ妻　舞夢
角切られ威厳なくしてしょんぼりと　茶々
水を得て静けさ破る鹿おどし　滋彦
楽しい話題さげて病の友見舞う　昭
夢二の絵話題に古稀が盛り上がる　みつ子
熱血漢龍馬の話題撒きちらす　照子
宇宙にて琴を奏でて手巻すし　叡子
話題豊富口に渋滞ないお方　蕉子
大義名分話題蒐集お茶の会　理恵
いつまでも話題のつきぬ四人掛け　義
久し振り尽きぬ話題に盃重ね　恭昌
父さんは話題続かず座を外す　日の出
話題作尾鰭をつけて盛り上がる　満作
琴の音とハミング宇宙から届く　桃花
ハミングと口笛朝の散歩道　すみ子
鳩山さんハミングする気なれますか　弘子
ばあちゃんのハミング童謡から演歌　千歩
音痴だが妻のハミングほっとする　浩二
ハミングで三途の川を渡りたい　楓楽
対応が遅いと怒鳴る市民権　正雄
雑草と追いかけごっこの春の庭　げんえい
捨てられた一円拾い撫でてやる　知之
芽吹くとは限らぬ種を蒔いている　捷也
平成の騎士の出るのを待ちわびる　善之
残り花はらはら散りて亡夫思う　れんげ
幸せに匂い立ちます蜆汁　志華子
夢はまだ捨てず未完の絵に挑む　集一
春秋を甘く煮詰めるいちごジャム　富子

川柳塔すみよし(大阪)　岩崎　公誠報

幸せのポーズでパッと咲くさくら　朝子
小遣いをもらいバンザイする五歳　太郎
ポーズだけするが何にも進まない　裕之
羽根広げポーズを取っている孔雀　庸佑
寺田屋で龍馬のポーズ真似ている　定子
パワー込めポーズは良いが空振りに　りつえ
悩ましいポーズ男を引き寄せる　舞夢
二人して撮ったポーズは手を繋ぎ　ヒロ
満ちて欠けポーズ豊かなお月さま　克博
言われなくてもかわいいポーズ桃ひらく　ばっは
恥じらいの笑みを浮かべる老妻を撮る　蕉子
ガッツポーズ高く晴れ晴れ天を突く　賢子
ピースして照れ笑いするお父さん　美籠
パラリンピックガッツポーズの誇らしさ　桃花
ちょっとだけピンボケがよいはいポーズ　チエコ
しだれ梅風により添いポーズとる　温子
植山に住んでも威張るポーズとる　章久
座席でもポーズ取ってる人がいる　美世子
国技館ガッツポーズの額あがる　末吉
賑やかなポーズ取っている淋しがり　篤子
イメージは背筋が伸びているポーズ　かりん
正座した母の姿は忘れない　芳香
脇役のポーズが似合うかすみ草　シマ子
ポーズされ花嫁衣装うれしなき　岳人
どのポーズ撮っても似合う赤ん坊　日の出
ポーズとり細く撮ってと無理を言い　昌紀
横綱はガッツポーズは止めなはれ　(奥)五月
ポーズだけ見れば敵ではないらしい　ダン吉
とりあえず惚れていますというポーズ　萌
八方美人ポーズ決まらぬ風見鶏　遠野
自惚れのポーズに姿見知らんぷり　柳好
何を着てもポーズ気にする柄でない　半銭
考えるポーズでイビキかいている　まつお

財布あけ払うポーズの名演技　公誠

米子住吉川柳会(鳥取)　渡辺多美子報

天国の道蓮根の穴に聞く　すみえ
チューリップ冬の名残に首縮め　多美子
八十で騒ぐことない百はまだ　正二
自由句がテレビにつられ出てこない　登美枝
父思いお水取りの日近づいて　宏之
洒落っ気といたずら心あって古希　紀の治
あれこれとやけにはりきる新年度　礼子
主は逝き蕾は天へふくらみぬ　ふみ
美しくぼろぼろ枯れようと思う　未延子

京都塔の会　都倉　求芽報

忙中閑　目白と仲間になっている　篤子
亡妻の跫音を聴く花灯路　肇
力まずとも自分らしさに手を打とう　輝美
運の字のしんにょう派手に跳ねておく　ますお
埒もないいけずあなたが問われます　ふりこ
赤飯もふっくら届く春四月　公子
春日和菩薩の顔のふっくらと　としこ
せめて布団ふっくらしとく子の帰京　宏子
仕切線挟んで闘志漲らす　庸佑
高圧線触れても曲げぬ自己主張　昭
日々変る世相に迷う運命線　孝一
ふと淋し平行線のおつき合い　朝子
ひんぱんに感情線が脱線す　万紗子
頭脳線見て納得の通知表　かずお
一直線走り続けた父の靴　満子
清濁も夕日も飲んだ地平線　文代
水筒に湧き水詰めて山登る　比ろ志
農を継ぐ降って湧くよな嫁が来る　由美子
湧いてきたヒント忘れている夜明け　昌乃
父の注文一番先に仕分けされ　益子
注文のポーズ素直に一年生　典子
注文の闇に麻薬がある巷　欣之
空腹へ注文しすぎたレストラン　綾子
注文のとおりに建てた変な家　福子
年の功注文丸く捌く術　弘之
注文は聞かぬ尾を振る犬だけど　和友
注文の背広に合わせダイエット　則彦
注文が多くて計画頓座する　求芽
手術なんて言わない医者をまだ探す　葉子
頼んだら月が私に付いて来る　美義
注文へマニュアル通り聞いてくる　啓子

倉吉川柳会(鳥取)　竹信　照彦報

蛙さえ体の五倍飛べるのに　完司
魔が差して甘い汁吸い飛んだ首　いさお
パラリンピック飛んでるごとく金メダル　賀寿恵
飛んで来る噂話も吹きかえす　和子
飲む話いつも喜び飛んで行く　泰輔
羽をつけあなたにあいにとんでいく　美栄子
飛ぶ羽をたたんだままのニート達　瑞子
潤いをくれと地球の叫び声　節子
冬ごもり湿気払いに大笑い　康子
にんげんの湿度をさげて花が散る　螢
沖縄基地湿度が違う官と民　よしえ
陽が上る柏手うって芝生切る　重忠
お上りさんみんな都会の人になる　照彦
不景気で給料上がる見込み無し　英子
倦怠期湿度求めて旅に出る　美代子
湿度よしひとり暮らしにカビが生え　酔芙蓉
湿度なし人も心も潤わぬ　貞子
近づいて染井吉野とキスをする　石花菜
ゆっくりとおいで近づく老いならば　喜美子
トホホホホ夜中に三度厠ゆき　悠子
宇宙では近場月旅行　次男
近道の賽の河原で梃子摺った　秋草
もやか霧砂がぼやかす近い国　恭子
お目出たが近づき弾む家族たち　日出子
一人住み近い他人の世話になる　小生
遠近のメガネかけたりはずしたり　美津恵
学芸会森が動いて海になる　萩江
木が三本育ってやがて森となる　鬼一
森林浴雑草浴もしています　けいこ
どこからが森か林か解らない　由紀子
源流を辿ると森の水溜り　茶子

菜の花の森で蝶ちょの舞踏会　和枝
萌黄色の衣着た森語り出す　風露
雨上り森の滴がドレミファソ　祐子

いずも川柳会(島根)　佐藤　治代報

意地張って生き抜いている渓流魚　煩悩児
いたわられ泳ぎ忘れている魚　佳子
移り行くロマン街道春を見る　房子
今もなお酒でロマンを語ってる　夢生
別れても肌に写真を付けてます　英子
逃げ道を開けて女へ逢いにゆく　龍石
パソコンを開き問答くり返す　弘子
たまたまに代打が打ったホームラン　房緒
アイラブユーぐらいで心開かない　美千代
海ネコも僚も魚を追っかける　武久
重い口開き反抗期も終わる　桂子
飛び込んで来いと開いた父の胸　淞丘
釣りあげた魚の目には逆らえず　美江子
ばあちゃんのロマンが弾む茶のん会　治代
釣り好きが魚の話してくれぬ　徳子
喜寿と古稀二人揃って祝い膳　敬子
開運を祈ってみくじ結ぶ松　芙佐子
真夜中にたまたま夫の寝言聞く　たえこ
たまたまに里に帰れば家は留守　キミエ
飛行服ロマンうずうず発射台　佐余
容赦なく別れがやってくるさくら　久枝

捨てたはずのロマン時々ノックする　歌子
たまたまのクイズで図書券を貰う　昌枝
別れ来た余韻ゆっくり飲むコーヒー　多喜
たまたまのチャンスを消した削除キー　喜子
蛇口全開泣きたかったら泣けばいい　玲子
夕焼けの空をロマンが走り出す　蘭水
あの人のロマンス聞いた春の宵　満江
居合わせたばかりに火の粉浴びる羽目　寿美
予期しない別れカラスよ知ってたか　ちえ
美しい傘貰いました別れの日　孝亮
たまたまが私に味方してくれた　茂美
ロマン追う男は胸であたためる　きみえ
ふところを開いてくれた信じよう　文子
もう亡父の指標は見えぬ別れ道　ちかし

川柳塔さかい(大阪)　河内　月子報

父さんに内緒でお皿割ってます　さくら
子供等がこっそりホーム探してる　千代
周囲には巨人ファンと言うてない　玄也
父さんの嫌いな野菜みじん切り　冬虹
母さんの出来る出来るが子を伸す　五月
つるつるのほっぺばあばの宝物　半銭
犬となら本音で話出来る仲　好像山
安産にもう次の子を考える　和夫
すべすべの肌は知ってるエステ代　唯教
寅さんの売りで流れる名調子　公誠

ノーはノー無茶は許さぬ羅針盤　かりん
のんびりも虚しさとなる楽隠居　俶子
おばちゃんのお口に内緒無理らしい　綾乃
襖閉めひそひそがまだ続き　雅明
ばあちゃんをなめらかにするぬか袋　時雄
なめらかな決まり文句で謝罪する　としお
知る権利守る権利で散る火花　進
出来映えは任せています登り窯　篤子
今日出来ることから先にしてしまう　清晋
よく出来た人と言われて肩がこる　政男
スムーズな動き基本が出来ている　日の出
あと戻り出来ぬ人生今大事　八千代
宇宙での大仕事する直子さん　竜之介
批判するだけなら出来る私にも　朋月
なめらかな口調にまたも引っ掛り　りつえ
暇と金やっと出来たが気力欠け　健吾
残る火を無駄には消せぬ拉致の親　天笑
言わんとこ内緒守れる顔じゃない　世紀子
匿名にしたらすらすら出る本音　ゆきの
野の花に群がる蝶の楽園だ　山彦
反対の親へトドメの出来ちゃった　のん子
のりのりで群がってくる来客だ　舞夢
出来るだけ元気な内は遊びたい　妻子
当選の弁なめらかな舌さばき　敏治
出来る奴どこかに気障なとこがある

第11回 生駒市民川柳大会

日　時　22年７月18(日)　12時30分開場
会　場　生駒市芸術会館「美楽来(みらく)」
℡ 0743-74-1101（近鉄生駒駅北西へ400m）
挨拶と祝辞　生駒市長　山下　真氏 他
講　演　「天平の裏表」　青山　茂氏
事前投句　「魅　力」　松本　柾子 選
宿　題　締切13時30分(各題２句)
「はずれ」　植野美津江 選
「　間　」　小山　紀乃 選
「名　前」　村上　玄也 選
「脱　ぐ」　森中惠美子 選
「巻　く」　山田　順啓 選
会　費　１５００円　発表誌呈
事前投句先　ハガキで一句（６月18日締切）
（生駒市芸術会館「美楽来」も可）
お問い合わせ「美楽来」および
吉川　卓方「生駒番傘川柳会事務局」
℡ 0743-70-0220・FAX 0743-70-0220
主　催　生駒市・生駒市教育委員会
生駒番傘川柳会
後　援　全日本川柳協会・奈良県川柳連盟
生駒市芸術協会連盟

第５回　松江市川柳大会

日　時　７月11日(土)　午前10時半開場
場　所　松江テルサ４Ｆ(JR松江駅前西側)
兼題と選者
「のれん」　赤松ますみ　選
「含　む」　両川　洋々　選
「マスク」　毛利　幸　選
「学　ぶ」　竹治ちかし　選
「　肩　」　安黒登貴枝　選
「戻　る」　渡辺　康乃　選
「　塩　」　三島　淞丘　謝選
各題２句　出句締切　１２時00分
披　講　13時20分
参加費　1,500円(記念品・発表誌呈)
弁　当　600円　50個準備（先着希望者）
欠席投句　投句先　〒690-0012
松江市古志原1-12-11
井谷　久子宛
投句締切　６月25日厳守
投句料　1,000円（小為替）
主　催　松　江　川　柳　会

第３回「ごんぎつねの郷」誌上川柳大会

課　題　南吉童話「おじいさんのランプ」より得た課題です。
「　灯　」二句提出（複数応募可）
選　者　春口倭文子　松井　文子
(共選)　加藤　鰹　宮村　典子
樋口由紀子　浅利猪一郎
渡辺　松風　丸山　健三
中山　恵子　赤松ますみ
梅崎　流青
締　切　７月３１日（消印有効）
投句料　1,000円（現金同封のこと）
投句先　〒478-0833　愛知県半田市花園町4-11-14　「ごんぎつねの郷」事務局　森本　恵子　宛
用　紙　専用用紙又は便箋（１枚に２句）
賞　最優秀作品賞・優秀作品賞他
発　表　10月２日きぬうら川柳大会席上

朝顔川柳大会

下町の初夏の風物詩・入谷朝顔市協賛

日　時　７月８日(木)１１時開場
会　場　東京都台東区生涯学習センター
ミレニアムホール（２階）
台東区西浅草３－２５－１６
宿　題　締切13時　(各題３句)
「感度良好」　尾藤　一泉 選
「楽天主義」　米島　暁子 選
「意気投合」　河合　成近 選
「先手必勝」　播本　充子 選
「臨機応変」　杉山　昌善 選
「有名無実」　太田紀伊子 選
「右往左往」　二宮　茂男 選
席題なし　投句拝辞
特別課題　「あさがお」(一句)大川幸太郎謝選
会　費　1,500円　発表誌・朝顔一鉢　呈
お問合せ　台東区元浅草3-19-10　大川幸太郎
℡03－3841－0274
＊昼食はご用意できません。
＊浴衣等和服でご来場の方には特典があります。
主　催　台東区川柳人連盟
後　援　台東区教育委員会・朝顔市実行委員会他

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 さんだ	15日(火) 午後1時から 一本・滴・素足・ため息 自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5—2—4　堀　正和
岸和田 川柳会	19日(土) 午後2時締切 素性・育てる・ちらちら トータル	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
川柳 ねやがわ	20日(日) 午後2時締切 飼う・シングル・火種・自由吟	寝屋川市立総合センター　寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9—9　高田博泉
川柳 藤井寺	20日(日) 午後2時締切 クイズ・気後れ	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 髙田美代子
岬川柳会	20日(日) 午後1時半締切 身内・野次馬・ショック	淡輪17区集会所 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
豊中 もくせい 川柳会	21日(月)午後1時40分締切 重ねる・誘惑・シール・自由吟	豊中市中央公民館　阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2—8—4　江見見清
川柳クラブ わたの花	25日(金) 午前9時半から ニュース・背・秘密・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0834 八尾市萱振町1-16-1-501 田邊浩三
川柳塔 すみよし	26日(土) 午後2時半締切 呑気・案じる・ほんのり	住吉区民センター　南海高野線沢之町下車3分 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉3-16-8-206 鶴田遠野
和歌山 三幸 川柳会	26日(土) 午後1時から 顔・シルエット・近い	和歌山商工会議所4階　第2会議室 〒640-8111 和歌山市新通7—17　古久保和子
はびきの 市民 川柳会	27日(日) 午後2時締切 梅雨・笑う・スタート ほどほど	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8—31—11　塩満　敏
川柳 ふうもん 吟社	27日(日) 午後1時より 一人占め・バトル・気に食わん	鳥取駅2F　シャミネホール 〒680-0872 鳥取市宮長205—45　萩原美雪
南大阪 川柳会	28日(月) 午後6時から 迷う・選挙・リリーフ・雑詠	住まい情報センター（大阪くらしの今昔館・5F） 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都 塔の会	28日(月) 午後1時開場 ○○派・溢れる・位置	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328—202　都倉求芽
松露 川柳会	28日(月) 午後7時半締切 制服・ビタミン・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6779-3490）へご連絡ください。

6月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 なら	3日(木) 午後1時開場 触れる・緑・早速	奈良市立中部公民館4F　近鉄奈良駅④番出口 〒634-0812 橿原市今井町2—1—24—901 安土理恵
城北 川柳会	5日(土) 午後1時開場 痛い・巣・ハーモニー・自由吟	旭区老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富柳会	5日(土) 午後1時から 毬・弱い・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴4-1-10 TEL 0721-25-0603　池　森子
倉吉 川柳会	5日(土) 午後2時締切 どうですか・足・そっくり	倉吉市　明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
尼崎 尾浜 川柳会	8日(火) 午後2時締切 平凡・根気・あべこべ・自由吟	尼崎女性センター　トレピエ　阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8　山田耕治
ほたる 川柳 同好会	8日(火) 午後1時半締切 赤・意・当てる	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール　蛍池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曽根2—4—1　水野黒兎
川柳塔 さかい	11日(金) 午後1時から それじゃ・亡びる 「よしだ(折り句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3　河内天笑
あかつき 川柳会	11日(金) 午後2時締切 小川・心・光る・時事吟	ねむかホール（新谷町第2ビル3階） 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から南へ2分 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14　江島谷勝弘
川柳大阪	12日(土) 午後2時締切 譲る・力・手本	長堀鶴見緑地線京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14　長井善純
川柳塔 まつえ	12日(土) 午後2時締切 天気・腹・自由・けじめ	松江市雑賀町　雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町1388　安達幸子
川柳塔 みちのく	12日(土) 午後5時締切 壮絶・訂正・ばりばり	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53—1　小寺花峯
川柳塔 打吹	12日(土) 午後1時から 恩・奇跡・置く	倉吉市上灘町9　上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637—3　牧野芳光
八尾市民 川柳会	13日(日) 午後2時締切 野菜・村・探す・雑詠	八尾神社内　西郷会館 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川柳塔 わかやま 吟社	13日(日) 午後1時開会 先走る・クール・夢中・化粧品	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒640-8482 和歌山市六十谷1188—14　川上大輪
西宮北口 川柳会	14日(月) 午後1時開場 不意・夜・なめらか・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分　プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2—19—515　山本義子

柳界展望

○造幣局の通り抜けの桜並木に、昨年の入選作が短冊で掛けられた。同人の秀逸。

造幣局の桜に恋をしてしまい　河内天笑

アンニョンハセヨニイハオハロー通り抜け　村上直樹

この他の佳作掲出は、津守柳伸、津守なぎさ、坂上淳司、榎本日の出、安田忠子。

○第59回西大寺会陽川柳大会の同人の受賞。岡山県知事賞

魔法にかけられて老人になった　新家完司

▽柳界動向△

○米子住吉川柳会（鳥取県）は役員を改選した。代表者＝竹村紀の治。〒683－0804 米子市米原5－13。☎0859－21－7656。

○板尾岳人氏（相談役、堺市）は3月、帝塚山学院中学でジュニア川柳の指導を行った。今後も不定期実施。

○第18回相生市もみじまつりの「事前投句の部」は8月31日消印有効で募集されている。課題＝「坂」、「表」、「力」、「横」は古川奮水選（同人）。投句料千円。宛先＝〒678－0024 相生市双葉1丁目6－14　千賀紀代子。

○第20回太平記の里川柳大会の「誌上大会」は9月30日締切で募集。課題は「夢」。共選の選者に河内天笑主幹。投句料千円。応募先＝〒373－0844 群馬県太田市田島町1243－65　原名幸雄。

○5月8日、日本詩人クラブ60周年記念全国大会（関西詩人協会共催）が開催された。『上方芸能』代表・木津川計氏は「大阪の都市格はなぜ低下したのか―再び含羞都市へ」と題して講演した。

▼訃　報▲

○住谷石舟氏（理事、尼崎市）は5月2日に逝去され4日に葬儀が行なわれた。享年82歳。（追悼文は次号）

○久米奈良子さん（同人、東大阪市）は4月6日に逝去された。（遺句抄は次号）

▽お詫びして訂正△

○四月号、8ページ上段19行目、最初はグーと無料宿泊券→最初はグー無料宿泊券。95ページ下段1行目と12行目、づつ→ずつ。95ページ上段24行目と下段24行目、かお里→加お里。

○五月号19頁上段3行目、繋ぎ手ばかり→繋ぎ度い手ばかり。46頁上段1行目、清川悦子→清原悦子。92頁中段1行目、複本一郎氏→復本一郎氏。

▽新誌友紹介△

大阪市　赤澤ゆう子
　紹介者　河内　天笑
神戸市　白川　淑子
　紹介者　北野　哲男
川西市　岡嶋　洋子
豊中市　貝塚　正子
　紹介者右2人　水野　黒兎
西宮市　氈受　彰
　紹介者　長浜　美籠

常任理事会＝5月7日(金)出席22名。①一〇〇〇号記念大会運営関連、同人誌友出欠連絡②傘下川柳会③同人提案事項④定例確認事項。⑤各部報告事項。

次回＝6月7日(月)13時半。

新同人紹介

鳥越鬼一（とりごえきいち）
―螢・完司・和枝推薦

寺井弘子（てらいひろこ）
―楓楽・恭昌・たもつ推薦

岩本浩二（いわもとこうじ）
―恭昌・れんげ・水昇・みつ子推薦

辻内げんえい（つじうち）
―恭昌・れんげ・水昇・みつ子推薦

阿部紀子（あべのりこ）
―恭昌・れんげ・水昇・みつ子推薦

2010（平成22）年　第16回川柳塔まつり

川柳雑誌・川柳塔通巻1,000号記念大会

と　き　平成22年10月9日（土）　午前11時開場・午後1時開会

ところ　ホテルアウィーナ大阪　4F　金剛の間
大阪市天王寺区石ヶ辻町19－12　電話 06－6772－1441

祝　辞　㈳全日本川柳協会　理事長　大野風柳　氏
番傘川柳本社　主幹　礒野いさむ　氏

表彰式　路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬抄・一路賞・各地柳壇賞

おはなし　「路郎と薫風 ― 牽引車の火と継承者の灯」
『上方芸能』発行人　木津川　計　氏

兼　題

「　虫　」	川柳展望社	天根夢草　選
「深　い」	時の川柳社	平山繁夫　選
「渡　る」	ふあうすと川柳社	赤井花城　選
「車　輪」	番傘川柳本社	森中惠美子　選
「スピーチ」	川柳噴煙吟社	田口麦彦　選
「価　値」	柳都川柳社	大野風柳　選

事前投句　「　千　」9月1日必着　川柳塔社　河内天笑　選

出　句　各題2句・欠席投句拝辞
出句締切　正午（午後5時終了予定）※各題の「天」位に賞呈

会　費　4,000円（当日いただきます）ご昼食は各自でお済ませ下さい

記念品呈　「麻生路郎読本」・「河内天笑川柳句集」

≪懇親宴≫

と　き　平成22年10月9日（土）（午後5時半～7時半）

ところ　ホテル・アウィーナ大阪　3F　葛城の間

会　費　7,000円（会席料理）

＊事前投句および懇親宴・宿泊のお申込は**チラシに刷りこみのハガキ**（ご希望の方は事務所）にて9月1日までに本社事務所宛、お送り下さい。
＊懇親宴・宿泊のご送金（句会費は除く）は同封の振込用紙でお願い致します。

川柳塔社　〒543-0052
大阪市天王寺区大道1丁目14番17号201
電話・FAX 06－6779－3490

編集後記

☆著名な小説家であり、劇作家である井上ひさし氏が亡くなられました。懐かしい「ひょっこりひょうたん島」の作者です。また。東北の寒村が独立する「吉里吉里人」という分厚い小説で世間の度肝を抜かれました。作品を書くスピードが遅く、編集者や芝居の出演者を待たせることでも有名で、ご本人は開き直って「遅筆堂」と称しておられたそうです。

☆ひさし氏のモットーは

むずかしいことをやさしく
やさしいことをふかく
ふかいことをおもしろく
おもしろいことを
まじめに
まじめなことをゆかいに
そしてゆかいなことは
あくまでゆかいに

でありました。

☆川柳を学んでいて、自らの想いをたった十七音で如何に「やさしく」「ふかく」表現するかに苦心しています。まして「おもしろく」「まじめに」「ゆかいに」表現することは至難の業と思えてきます。

世の中には難解句と称して読者を悩ませる川柳もあるようですが、川柳が文芸として社会で愛されるためには、誹風柳多留の昔のように庶民の口に膾炙される川柳でありたいと思います

☆「むずかしいことを如何にやさしく詠むか」に挑戦したいものです。（尚）

◇漢書によると「酒は百薬の長」とある。適当な酒はどんな薬にもまさる効果があるということだ。外国では「よい酒はよい血を作る」と言われている。

◇巷では、酒はきちがい水だ、との声がある。確かに酒は人を狂わせるのである。

格言曰く、「酒に酔って本性を現す」また「酒の酔い本性を忘れず」とも。

◇酒は古代から親しまれてきた。宮中では菊の宴がしばしば催されていた。盃に菊の花を浮かべて長寿を祝ったのである。謡曲の菊慈童では妙文を書き記した菊の葉に、置く露の滴りが不老不死の薬となって七百歳を送りぬ、とある。

◇法華経抄によれば「はじめは人酒を飲み、次には酒酒を飲み、後には酒人をのむ」とある。百薬の長も適度の量が肝心。（光）

▽フォト川柳が近頃マスコミでも取り上げられるようになりました。たまたまその機会があり、写真は別の人に川柳は私での作品が近隣の文化祭で展示される事になり、皆さんに見ていただき少しは川柳のＰＲになったかなと思いました。

▽各句会の作品展の開催の折りがあればフォト川柳を試みられるのもいいのではと思います。写真で句が生かされ、句が写真を引き立てて楽しい作品が出来上りました。もうすでに作品展を催されている句会もあるようですがフォト川柳を加えられるのは如何ですか。

▽川柳を沢山の人の目にふれる努力をしていきたいものです。その前にまずはデジカメを買って、素敵な写真を撮る練習をせねばなりませんが―（能）

ひとこと

大つごもり

三月号の私の句が何故か「太陽暦大つもごりに満月が」とある。あわてて句帳を見たがちゃんと大つごもりとあった。投稿の時書きまちがえたかと思ったが後のまつりであるる。つごもりは月が隠れて見えない時の事だ。国語辞典には大つごもりは大晦日とあり、つごもりの項には最後にみそか、つもごりとある。ついでに広辞苑を見ると、「つもごり」は音韻顛倒とあった。そうか訛ってるんやなと私は私流にナットクした。それのついでに思い出して樋口一葉の「大つごもり」を引っぱり出して読んだ。因みにH21年12月31日の月齢は14・6であった。

（安藤寿美子）

川柳塔（同人）・水煙抄（誌友）投句用紙

種目「　　」発表（**8月号**）

地名

都県
道府
市

姓
雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友　マルで囲んでください。

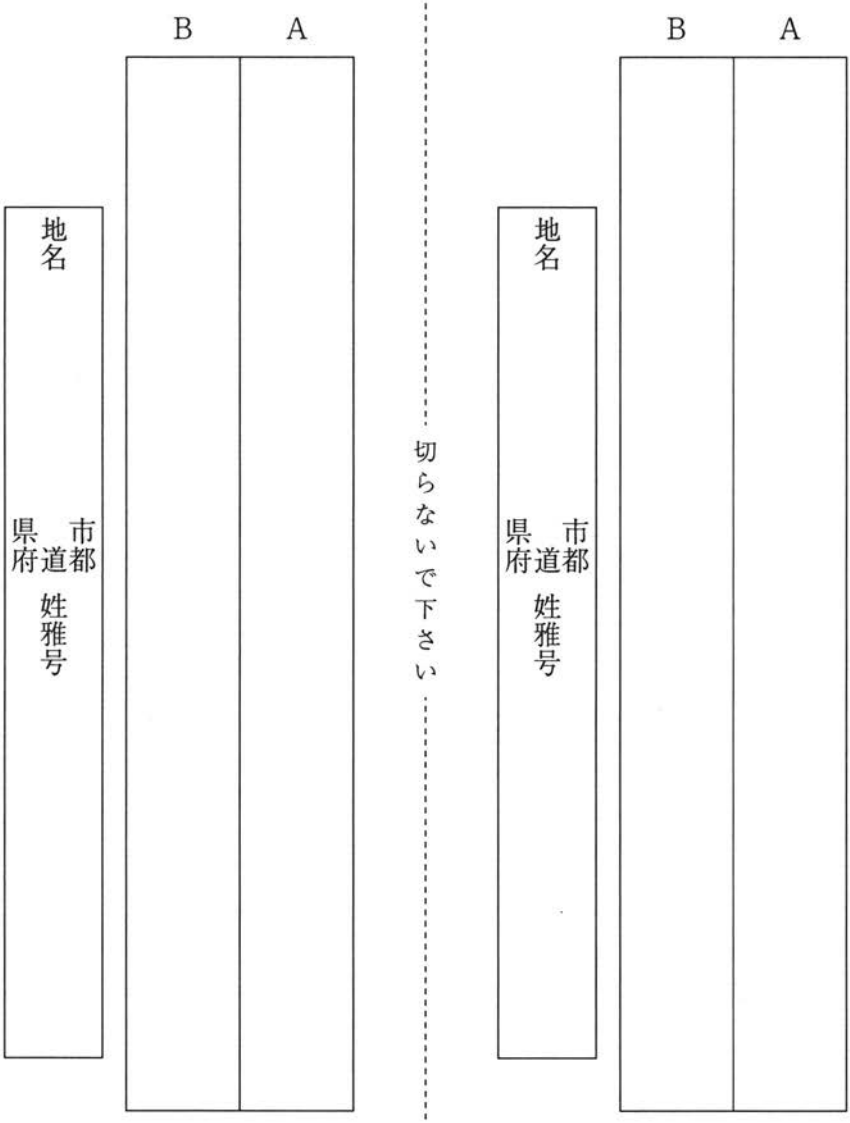
投句先　〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「痛　い」　（6月15日締切）

8月号発表

髙田美代子 選 ——共選—— 三宅　保州 選



左右に同じ句を書いて下さい

「私の珠玉の一句」投句用紙

締切（6月15日）　発表（9月号）

同人・誌友（○で囲んでください。）

地名	
道県 都府	
姓 雅号	

投句先

〒543-0052　大阪市天王寺区大道1丁目14番17号
花野ビル201

川柳塔社

本社6月句会

とき　6月7日(月)　午後5時開場・6時20分締切り
―開場時間、締切時間を変更しています。ご注意下さい。

ところ　アウィーナ大阪　4階　金剛
天王寺区石ケ辻町19―12　電06・6772・1441

おはなし「難病と川柳」　北野哲男

席題「　　」　山岡冨美子　選

兼題「遊園地」　加島由一　選
「蛍」　渡辺富子　選
「ふいに」　岩崎公誠　選
「保険」　奥田みつ子　選
「湿る」　河内天笑　選
（各題2句以内）

会費　1000円　投句料　500円（切手可）

本社7月句会

7日(水)　午後5時から

兼題「大袈裟」「筋　」「うやむや」
「午　後」「痺れる」

作品募集

8月号発表（6月15日締切）

川柳塔（8句）　河内天笑　選
水煙抄（8句）　川上大輪　選
愛染帖（3句）　新家完司　選
檸檬抄「痛い」（2句）　（三宅保州　共選
高田美代子）
一路集（3句）「貢ぐ」　福士慕情　選
「割引」　堀正和　選
「テンポ」　山口高明　選
初歩教室「必ず」（3句）　鈴木公弘　担当

9月号

檸檬抄「託す」
一路集「息抜き」「強　気」「アニメ」
初歩教室「　音　」

第29年度　夜市川柳募集

第1回「気　迫」　三島淞丘　選
ハガキに3句　**6月末日**締切

投句先　〒593-8305　堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方　**川柳塔さかい**

「川柳塔」への投句について

(1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。

(2)愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。

(3)各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。

(4)各欄への投句数および**投句締切期日の厳守**をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

定価　八百円（送料76円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）

二〇一〇年（平成二十二年）六月一日発行

発行人　河内權治
編集人　穴吹尚士
印刷所　美研アート

〒543-0052
大阪市天王寺区大道一―一四―一七
花野ビル201号室
発行所　**川柳塔社**
電話（〇六）六七七九―三四九〇番
振替　〇〇九八〇―四―二九八四七九番

川柳塔のホームページアドレス　http://www.senryutou.com/

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成二十一年六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻九九七号　柳塔　六月号
定価　八百円（送料　七十六円）

杵つき製法の「すりごま」
オニザキの
つきごま

長い間親しまれてきたオニザキの「すりごま」は、この度「つきごま」に名称を変更いたしました。
オニザキのすりごまは、元々すり鉢ですったゴマではなく、杵と臼を使った杵つき製法で出来た「すりごま」です。
今までと変わらぬ、風味豊かな味わいをご堪能ください。

株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL（フリーダイヤル）0120-30-5050

医療法人社団
湯川胃腸病院
・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得
健康保険取扱　看護２A・緩和ケア病棟
・消化器科・内科・外科
・放射線科・ホスピス
・デイサービスセンター
診療時間
月～金　8:30～16:00
土　8:30～11:00
JR桃谷駅徒歩3分
http://www.yukawa.or.jp
電話 大阪(06) 6771-4861(代)